

埋蔵文化財調査報告書37

高蔵遺跡（第26次～30次）

玉ノ井遺跡（第2次）

2001

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書37

高蔵遺跡（第26次～30次）
玉ノ井遺跡（第2次）

2001

名古屋市教育委員会

収録遺跡

- 高蔵遺跡（第26～30次）……………1
 玉ノ井遺跡（第2次）……………85



高蔵遺跡第26～30次発掘調査



例言

- 1、本編は名古屋市熱田区に所在する高森遺跡第26～30次発掘調査報告書である。
- 2、各次発掘調査の地点、期間、原因、対象面積、担当者は以下の通りである。

○第26次調査

調査地点	熱田区沢上町1丁目621-1	調査期間	平成12年2月8日～2月29日
調査原因	個人住宅	調査面積	50㎡
担当者	山田鮎一・野口泰子		

○第27次調査

調査地点	熱田区沢上町1-6-28	調査期間	平成12年2月21日～3月17日
調査原因	個人住宅	調査面積	80㎡
担当者	野澤則幸・村木 誠		

○第28次調査

調査地点	熱田区外土居町5-13	調査期間	平成12年5月22日～6月9日
調査原因	個人住宅	調査面積	60㎡
担当者	水野裕之・嶺巖 茂		

○第29次調査

調査地点	熱田区外土居町5-14	調査期間	平成12年7月21日～8月11日
調査原因	個人住宅	調査面積	80㎡
担当者	服部哲也・嶺巖 茂		

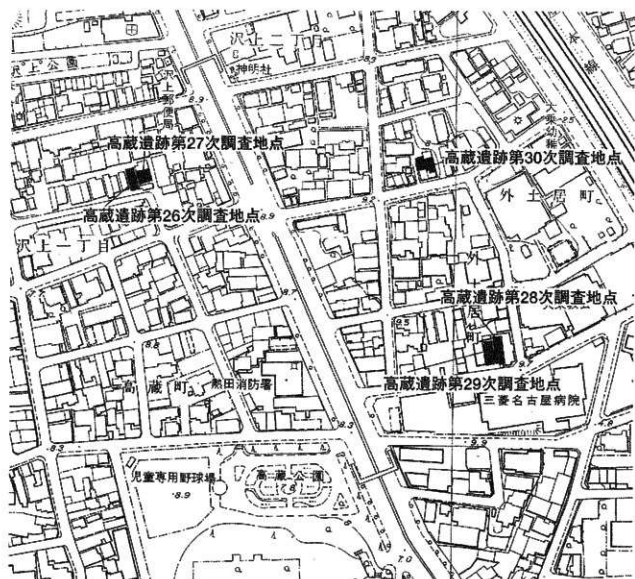
○第30次調査

調査地点	熱田区沢上2丁目713	調査期間	平成12年10月10日～11月2日
調査原因	個人住宅	調査面積	120㎡
担当者	野澤則幸・村木 誠		

- 3、本編では基準高は東京湾平均海面(T. P.)を、座標系は国土交通省公示の第Ⅷ座標系を使用した。
- 4、発掘調査及び本書の作成にあたり下記の方々にご教示ご協力をいただいた。記して謝意を表する。
赤羽 一郎・尾野善裕(順不同、敬称略)
- 5、本編の作成にあたり、遺物の復元、実測、トレースなど下記の方々の協力を得た。
佐々木佳子、山本雅代、小浦美生、稲田翠子、岡地田津、杉浦綾子
- 6、本編は各調査担当者の助言を得て、野口泰子(第2章)、村木誠(第3・5章)、嶺巖茂(第1・4章)が執筆し、嶺巖が編集した。
- 7、出土遺物や調査にあたり作成した実測図、写真類は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

目次

高蔵遺跡26～30次発掘調査	… 1
例言	… 2
第1章 遺跡の位置と環境	… 4
第2章 高蔵遺跡第26次調査	… 7
第3章 高蔵遺跡第27次調査	… 21
第4章 高蔵遺跡第28・29次調査	… 37
第5章 高蔵遺跡第30次調査	… 69



第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

現在の名古屋市区は様々な自然地形の上に立地をしている。緑区や守山区は丘陵地形が区域の大部分を占め、また一方中川区、西区などの大部分は海拔0メートルに近い低地が広がっている。市域の北側には庄内川、矢田川が河岸段丘や自然堤防を形成し、その上で様々な人間活動が営まれてきた。高蔵遺跡の立地する熱田台地は鳴海丘陵から完全に独立した台地で、最終間氷期に堆積の進んだ熱田層が開析されて形作られた。現在では台地の両脇を堀川、新堀川の両人工流路に挟まれた格好になっているが、海水面の上昇が甚だしかった中世段階はもちろん、近世の中頃まで台地の周辺には「あゆち湯」と呼ばれる遠浅の干潟が広がっていたという。この熱田台地上には弥生時代以降、各時期の遺構をはじめとした人間の生活活動の痕跡が残されている。高蔵遺跡はそのほぼ全域が熱田台地の上面に位置している。部分的に小谷が台地を解析しており、沢上などの地名にその名残を残すが、ビルや住宅の建ち並ぶ現在の景観からは、そうした往時の状況をうかがい知ることは難しい。今回の調査のうち、26、27次調査地点は台地の中央部、28から30次までの調査地点は、台地の縁辺に位置している。



第1図 高蔵遺跡周辺の遺跡

第2節 周辺の遺跡

高蔵遺跡は熱田台地のやや南より、熱田区外土居町、沢上町、五本松町、夜寒町、花町に渡り、南北約700m、東西500mの範囲を遺跡として確認している。中区の南部、伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡から高蔵遺跡にかけての周辺は、名古屋市域にあって最も高い密度で弥生～古墳時代の遺構が検出される地域である。熱田台地上の旧石器時代の生活痕跡は、二次的な堆積に伴った石器等が散見される竪三蔵遺跡や旧紫川遺跡などに限られる。縄文時代になると早期～前期の貝塚が天白川流域に集中するが、熱田台地上には縄文時代の居住痕跡は少ない。旧石器時代同様竪三蔵遺跡や旧紫川遺跡、白川公園遺跡の堆積土中に土器片などが検出されている。高蔵遺跡やすぐ南の玉ノ井遺跡でも、縄文時代後・晩期の土器が出土している。熱田台地上で生活痕跡が盛んに残されるようになるのは、弥生時代以降である。高蔵遺跡の南側では前期の環濠集落が検出されているが、市内では他に西志賀遺跡、平手町遺跡など低地部で集落が確認されている。中期以降台地上での土地利用痕跡は爆発的に増加する。熱田台地上の環濠集落の検出は高蔵遺跡にとどまっているが、伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡、東古渡遺跡、古沢町遺跡などでは弥生時代後期、そして古墳時代にまでつながって、集落が構築される。後期以降、方形周溝墓や古墳が盛んに築造されているが、これは高蔵遺跡でも西側の地域に集中し、この付近は熱田台地の中でも最も多く墳墓が築かれた地域といえる。高蔵遺跡の南には東海地域最大の前方後円墳斯夫山古墳や白鳥古墳が立地する。古代においては、集落とともに東海最古の寺院とされる尾張元興寺跡は高蔵遺跡の北西に位置し、周辺では、引き続き熱田台地上の各遺跡において集落が営まれている。熱田神宮は高蔵遺跡のほぼ真南に位置する。中世になると台地上の削平などが行われているが、遺構として検出されるのは溝状遺構がほとんどである。近世以降の遺構は街道沿いに集中するが、名古屋城下のように集中したものではない。

第3節 調査研究略史

高蔵遺跡の調査研究は、明治30年代より学会に報告されたことを嚆矢とするが、大きな注目を浴びるのは、鎌谷徳二郎が大津通の改修工事の際に出土した弥生式土器に石器が伴うなどの報告を行ってからである。その後も地域の研究者や、大学などによって何次にも及ぶ調査が行われているが、その中でも特に戦後田中稔によって地点ごとにまとめられた成果は、現在に至って基礎資料として重要な位置を占めている。大学などの研究期間や民間の研究者によって担われてきた高蔵遺跡の調査に、名古屋市教育委員会が体系的に取り組み始めたのは80年代以降である。以後今年度終了時点で市が担当した調査も32次を数えた。小規模な発掘調査が大半を占めるが、今年度だけでも5地点の調査が行われ、正木遺跡、伊勢山中学校遺跡と並んで、市内でも調査回数が多い地点となる。そんな中で、遺跡内の各地点における、状況も次第に明らかとなりつつある。本報告に関連させていえば、28・29・30次調査地点付近は集落に伴う溝(田中氏E地点)や住居址が多数検出されている。市における調査こそ少ないが、田中稔によって弥生時代中期の溝や地点貝塚が調査されている。大津通の西側では、北よりの26・27次調査地点付近では(市17・21次調査他)古墳が、南付近には弥生時代前期の環状集落(市1次調査)と、中期以降の周溝墓や古墳(市6次、12～15次調査他)などの墳墓が築かれている。すぐ南に熱田神宮が控えることもあって、中世の溝や削平などの土地利用痕跡は盛んに検出されているものの、居住の痕跡はまだ明確に把握されていない。

調査年	調査地	調査者	所見
1908	大津浦	鎌谷謙三郎	貝塚、弥生土器、石製、馬骨
1913	—	井上(飯沼小学校)	弥生土器、人骨
1916	—	安藤清次郎	弥生土器、人骨
1917	—	徳川義徳	—
1917	—	佐藤龜一	—
1919	—	小金井良輔・柴田常恵	溝、弥生土器
1919	—	野野塚次	貝塚、弥生土器
1922	外土器町	西良貞夫	貝塚
1928	熱田東町(旧町名)	小栗謙次郎・伊藤文四郎	貝塚、弥生土器
1940	高蔵町60	鈴木翼一	溝、縄文土器、弥生土器
1941	—	西村清男	貝塚
1942	—	高橋儀一	竪穴、弥生土器
1946	—	紅村玄	—
1951	外土器町12(住地点)	田中徳	溝、貝類、弥生土器
1953	高蔵町62(D地点)	中山英司	貝類、弥生土器
1954	高蔵1号墳	橋崎彰一	墳(竪穴式石室)
1956	D地点	稲原賢也	溝、弥生土器、人骨
1981	高蔵町1001-2	高蔵遺跡調査会(会長伊藤秋男)	住居跡、弥生~近世陶器
1981	高蔵町9-7	名古屋市第1次調査	溝、縄文土器、弥生土器
1982	夜寒町70	名古屋市第2次調査	溝、弥生土器、須恵器
1985	夜寒町201	夜寒地区調査会(代表長松和男)	溝、陶器類、住居跡、弥生土器、土師器
1985	五本松町11	荒木実(第1次調査)	陶器類、弥生土器、中世陶器
1986	五本松町11	荒木実(第2次調査)	馬場跡
1987	五本松町11	荒木実(第3次調査)	弥生土器、中世陶器
1987	夜寒町102	夜寒町遺跡調査(荒木実他)	溝溝、溝
1987	五本松町1002	名古屋市第3次調査	中世遺跡、中世陶器、瓦
1987	沢上二丁目509	試掘	溝、弥生土器
1988	沢上二丁目501	荒木実	住居跡、弥生土器、土師器
1988	外土器町1-21	立会調査	溝、弥生土器
1989	五本松町901	名古屋市第4次調査	古墳、土師器、須恵器、中世陶器
1989	五本松町11	荒木実(第4次調査)	縄文土器、弥生土器
1990	五本松町11	荒木実(第5次調査)	縄文土器、弥生土器
1990	五本松町11	荒木実(第6次調査)	縄文土器、弥生土器
1990	五本松町11	荒木実(第7次調査)	縄文土器、弥生土器
1991	外土器町7-30	立会調査	溝、弥生土器、貝類
1993	花町5-15 高蔵遺跡(花町地区)	調査会(中嶋重道)	溝、弥生土器、須恵器
1993	沢上二丁目704	名古屋市第5次調査	弥生土器
1993	高蔵町510	立会調査	溝
1994	五本松町7-20, 30	名古屋市第6次調査	陶器類、古墳、弥生土器、須恵器
1994	高蔵町6-10	名古屋市第7次調査	弥生土器、須恵器
1994	高蔵町203	立会調査	溝
1994	高蔵町1-17	名古屋市第8次調査	弥生土器、須恵器
1995	沢上二丁目4-12	名古屋市第9次調査	土塚、弥生土器、須恵器
1995	五本松町・夜寒町	名古屋市第10次調査	溝、山形碗、中世陶器
1995	外土器町	名古屋市第11次調査	弥生土器、須恵器
1995	夜寒町12	立会調査	灰堆跡
1996	高蔵町601	立会調査	溝?
1996	五本松町909-3	名古屋市第12次調査	溝、山形碗、中世陶器
1996	五本松町909-4	名古屋市第13次調査	溝、須恵器、山形碗、近世陶器
1996	高蔵町5-18	名古屋市第14次調査	溝、弥生土器、古代須恵器、山形碗
1996	五本松町4-4	名古屋市第15次調査	溝、須恵器、土師器
1997	五本松町503-1	名古屋市第16次調査	縄文土器、溝、弥生土器
1997	高蔵町1-18	名古屋市第17次調査	溝、埴輪、須恵器
1998	五本松町208-3	名古屋市第18次調査	土師器、須恵器
1998	高蔵町110	名古屋市第19次調査	古墳、埴輪、須恵器
1998	五本松町11-18	名古屋市第20次調査	陶器類、土塚、弥生土器、中世陶器
1998	沢上二丁目他	名古屋市第21次調査	溝、弥生土器、須恵器
1998	夜寒町6-617	名古屋市第22次調査	溝、須恵器
1999	五本松町3-8	名古屋山形23次調査	溝、中世陶器
1999	外土器町806	名古屋山形24次調査	竪穴住居、貝類、弥生土器、須恵器
1999	高蔵町1他	名古屋市第25次調査	土塚、埴輪、須恵器
1999	沢上二丁目136-19	新緑人類学研究所(所長森実史)	須恵器
1999	沢上二丁目3	高蔵遺跡調査会(会長伊藤秋男)	土塚、須恵器、土師器
2000	五本松町1202	アイシン開発株式会社	溝、須恵器、山形碗
2000	沢上二丁目621-1	名古屋市第26次調査(今回の報告)	名古屋山形26次調査(今回の報告)
2000	沢上二丁目6-28	名古屋市第27次調査(今回の報告)	名古屋山形27次調査(今回の報告)
2000	外土器町5-13	名古屋山形28次調査(今回の報告)	名古屋山形28次調査(今回の報告)
2000	外土器町5-14	名古屋山形29次調査(今回の報告)	名古屋山形29次調査(今回の報告)
2000	沢上二丁目713	名古屋山形30次調査(今回の報告)	名古屋山形30次調査(今回の報告)
2000	五本松町604	名古屋山形31次調査(平成13年度報告)	方形周溝墓、古墳、弥生土器、須恵器、中世陶器
2001	外土器町110	名古屋山形32次調査(平成13年度報告)	住居址、貝類、弥生土器

第1表 高蔵遺跡における主要調査

第2章 第26次発掘調査報告

第1節 はじめに

第26次調査は、個人住宅の建築に伴う調査である。調査地点は、熱田区沢上一丁目で遺跡の中央北にあたる。調査地点の周辺では、第17次・第21次・第25次調査などが行われており、古墳の溝などが検出され、弥生土器・須恵器・埴輪などが出土している。調査面積は約50㎡、排土置場を確保するため調査区を東と西に分けて実施した。調査期間は平成12年2月8日から2月29日までであった。

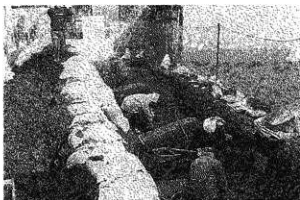
第2節 調査の経過

- 2月8日 調査区設定。
- 2月9日 東区の表土除去。SD01を検出。南側は包含層が厚く残っている。
- 2月10日 SK01・02を掘削、防空壕と思われる。SD01の埋土から埴輪片が出土する。
- 2月14日 SD01には埴輪片が集中している。北側の地山面でピット掘削。
- 2月15日 調査区南側の遺構検出をする。SD06からも埴輪片が出土。
- 2月17日 遺構掘削終了。土層断面図作成。
- 2月18日 清掃・写真撮影。遺構平面図作成。
- 2月19日 埋め戻し、西区の表土除去。
- 2月21日 北側から包含層掘削を開始する。
- 2月22日 SD01の西側辺とSD06の東・西側辺を検出。
- 2月23日 遺構掘削。SD06の底面付近では弥生土器が出土。
- 2月24日 遺構掘削終了。上層断面図作成。
- 2月25日 清掃・写真撮影。平面図作成。
- 2月28日 埋め戻し。
- 2月29日 後片付け。完了。

第3節 基本層序

調査地点の基本層序は、表土が20~40cm、包含層は黒褐色土、暗灰褐色土、褐色土で、10~30cm

が堆積している。もっとも標高の高い位置の地山面は、調査区北端で標高約8.2m、このあたりは包含層が残存していなかった。



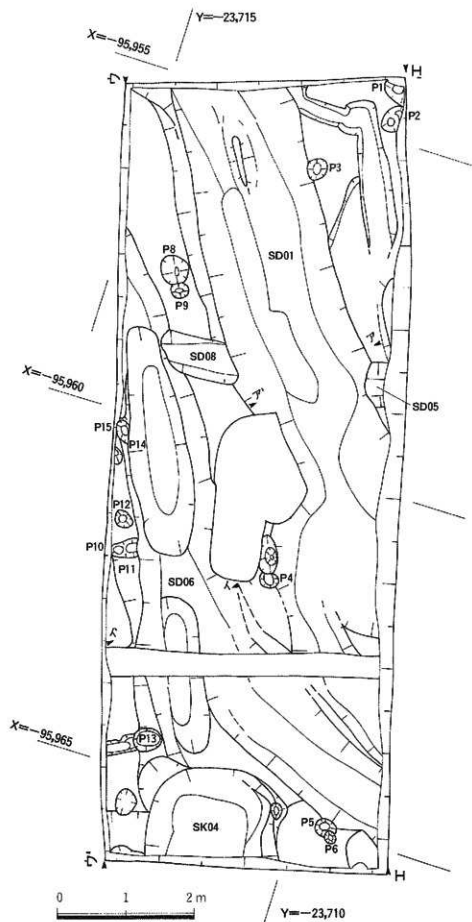
発掘風景（東側）



発掘風景（西側）

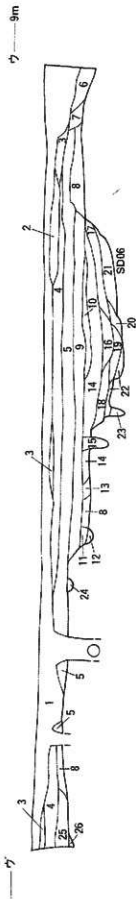


SD01埴輪出土状況

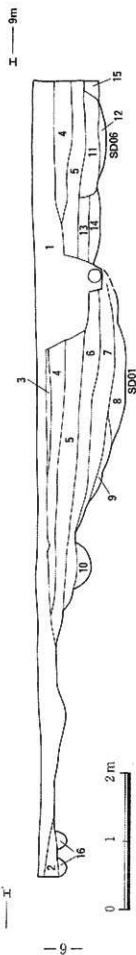


第1図 道構図

第2図 調査区西壁土層断面図



第3図 調査区東壁土層断面図



調査区東壁土層

- 1 黄土・粗石 灰褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 2 黒褐色土 褐色土を含む。灰褐色砂ブロックを少し含む。
- 3 粉状砂質土 粘土・炭化物を含み、固く硬まる。
- 4 灰土 粘土・炭化物を含み、固く硬まる。
- 5 灰褐色土 褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 6 黒褐色土 褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 7 黒褐色土 SD01層土
- 8 黒褐色土 黒味が強い。粗砂を多く含む。固く硬まる。SD01層土
- 9 黒褐色土 地山ブロックを含む。
- 10 黒褐色土 地山ブロックを含む。
- 11 黒褐色土 調査区東壁土層を多く含む。
- 12 黒褐色土 黒褐色土層と地山ブロックを含む。
- 13 黒褐色土 SD01層土
- 14 黒褐色土 灰褐色砂ブロックと地山ブロックを含む。
- 15 黒褐色土 褐色土層と灰褐色砂を含む。
- 16 黒褐色土 褐色土層と灰褐色砂ブロックを含む。

調査区西壁土層

- 1 黄土・粗石 灰褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 2 黒褐色土 褐色土を含む。灰褐色砂ブロックを少し含む。黒味が強い。
- 3 粉状砂質土 粘土・炭化物を含み、固く硬まる。
- 4 灰土 粘土・炭化物を含み、固く硬まる。
- 5 灰褐色土 褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 6 黒褐色土 褐色土層を多く含む。黒味が強い。
- 7 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。
- 8 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 9 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 10 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 11 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 12 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 13 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 14 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 15 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。
- 16 黒褐色土 灰褐色砂を多く含む。黒味が強い。

調査区東壁土層

- 17 褐色土 やや硬質である。
- 18 粉状砂質土 固く硬まる。
- 19 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 20 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 21 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 22 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 23 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 24 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 25 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 26 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。

調査区西壁土層

- 17 褐色土 やや硬質である。
- 18 粉状砂質土 固く硬まる。
- 19 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 20 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 21 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 22 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 23 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 24 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 25 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。
- 26 粉状砂質土 0.5~1.5mの地山ブロックを多く含む。

第4節 遺構と遺物

検出された遺構は、調査区の中央を北西から南東方向に走る2条の溝、東西方向に走る溝、南端の上坑などである。また、北側や溝の間の地山が高く残っている部分ではピットが検出されている。その他、防空壕と思われる上坑が北側に2基あった。遺物は、弥生土器・土師器・埴輪・須恵器などが主に溝の中から出土し、包含層からは灰軸陶器片も出土している。

SD01

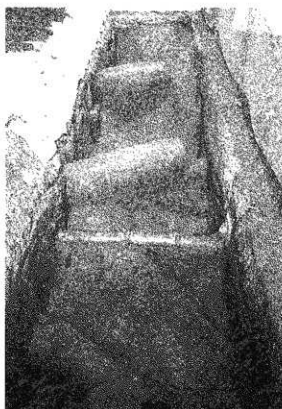
地山面で検出された。幅は2~2.2m、深さは50~70cm（底面の標高は約7.4m）、断面はほぼ逆台形を呈し、方向はN30°W、南端で東方向に曲がっていく。この溝の底は、北側では中央に地山の高まりが残り、西側は東側よりやや深くなっていることから、2条重なっているようにも見える。更に、東に曲がって行くあたりは、南に張り出した形状を呈し、張り出した南側はやや浅くなっており、別の遺構が重なっている可能性もある。底部は平坦ではないが、幅は広い部分で約1m、狭い部分は約30cmである。底面の標高は、7.3~7.5m、両肩の地山の標高は7.9~8mである。SD01の埋土は、上位が黒褐色上、中位が黒味の強い黒褐色土、下位が地山ブロックを含む暗褐色土である。上位から中位の土層は比較的固く締まっている。

遺物は、土器、須恵器、埴輪などがあり、特に埴輪は埋土中位~下位にかけて多く出土している。また、下位からは弥生土器が出土している。

弥生土器は中期後葉から後期の甕（図6の2）、壺(1)、須恵器は杯身、罍、壺などがある。杯身(3)は最下層から出土し、口径約12cm、器高約6cm、体部には丸みがあり、口縁端部は尖っている。器壁は薄い。8の線はやや肩が張り、頸の径が大きいタイプである。4・5の杯身は口径9.2cm・8.6cm、器高は低い、口縁部



全景（西側）

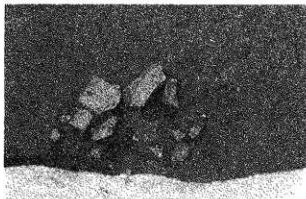


全景（東側）

は内側に短く立ち上がる。6は有台杯身、7は壺と思われる。埴輪のうち、朝顔形埴輪は、図化できたのは図10の25だけである。円筒埴輪は、2凸帯3段構成で、第2段に孔が2ヶ所あけられている。外面の調整はタテハケ後ヨコハケを施し、内面は第3段から2段はヨコハケが見られるが、1段は横ナデが主である。外面口縁部は横ナデが施されている。底部端は内外面ともケズリがみられるが、内面の方がシャープに削られている。凸帯は1:2凸帯。図7の14はゆがみがあるため口径は不明であるが、焼成が非常に良く固く締まっている。第3段で第2段の孔の上にあたる位置に釣針様の記号がある。内面には指圧痕が多く残る。15も焼成が良く、第3段目で孔の上にあたる位置に釣針様の記号がある。16は口径27.5cm、直線的である。18は口径31.5cm、17は底径約23cmである。図8の19は全形が復元できる資料である。口径約30cm、底径約21cm、器高約40cm、孔は2段目に2孔あり、孔の径は7cmほどである。1段目の外面には指痕と擦ったような痕が2ヶ所残っている。図9の20はくの字状の記号が孔の縁から付いている。図10の21は底径21cmほど、外面に3本の指を引き上げたような痕がある。22は底径約21cm、底部内外面とも鋭く削られている。外面には斜めに擦り上げたような痕があり、削られた粘土が斜めに丸まって張り付いている。23は底径25.5cm、底面から2cmほど上に、指で押したような凹んだ部分がある。24は底径が約22cm、外面にはわかりにくい、3本の指の痕と擦り上げたような痕がある。

SD06

SD01の西側で、黒褐色土中で検出されている。幅は1.1~1.5m、深さは20~50cm（底面の標高は約7.5m）、断面は逆台形を呈し、方向は、検出部分ではSD01と同じN30°W、南側では東向きにやや弧を描いている。北側底面には更に楕円形状の落ち込みがある。落ち込みは、長さ約3.5m、幅約0.9m、深さはSD06底面から20cmほどである。この落ち込みの更に南側にも規模は小さいが、同じような落ち込みがあり、これらの方位はN25°Wを測り、SD06に先行する遺構と思われる。SD06の底面の幅は50~60m、標高は7.5~7.6m、両側の地山の標高は7.9~8mである。埋土は、上から灰土や礫を含む黒褐色土、暗褐色土、黒味の高い黒褐色土、暗褐色土、地山ブロックを多く含む褐色土である。落ち込みの埋土は、暗灰黄色土、暗褐色土で地山ブロックを多く含んでいる。埋土中位~下位から、埴輪、須恵器、土師器が出土し、下位からは弥生土器が出土している。埴輪の量はSD01に比べるとかなり少ない。図6の10・11は弥生時代中期後葉の壺、須恵器は長頸瓶、壺である。図10の26の円筒埴輪は焼成が良い、底径は20.7cm、擦り上げたような痕は3ヶ所見える。上の2ヶ所は同時についたものと思われるが、下の幅の狭い擦り上げ痕は後から重なっている。指の痕は、上は2本の指痕のように見え、下の指痕は1本で、下の引き上げ痕と一体となっ

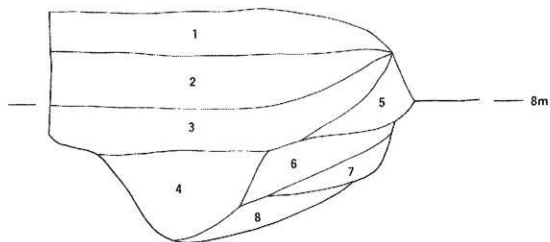


SD01埴輪出土状況



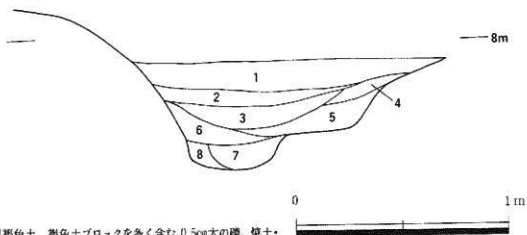
SD06壺出土状況

図4 SD01土層断面図（ア-ア）



- 1 褐色土 焼上・炭化物を少し含む。固く締まる。包含層
- 2 褐色土 黒褐色土ブロックを少し含む。
- 3 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。碎輪を多く含む。固く締まる。
- 4 黒褐色土 黒味が強い。堆積を多く含む。固く締まる。
- 5 黒褐色土 灰色味がある。
- 6 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
- 7 黒褐色土 1cm大の地山ブロックを含む。
- 8 褐色土 1~2cm大の地山ブロックを多く含む。

図5 SD06土層断面図（イ-イ）



- 1 黒褐色土 褐色土ブロックを多く含む、0.5cm大の礫、煤土・炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 黒色シルトブロックを含む。
- 3 暗褐色土 暗灰色シルトブロックを含む。
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土 黒色シルトブロック、焼上を含む、1~2cmの地山ブロックを多く含む。
- 6 褐色土 黒色シルトブロックを多く含む。黒味がある。
- 7 暗灰黄色土
- 8 暗褐色土 0.5~1cmの地山ブロックを含む。

ているようにみえる。底面には段状の痕がある。

SD05・08

調査区中央付近のSD01と重複する位置で検出されている。幅約60cm、深さ20～25cm（底面の標高は7.8～7.6m、西に行くほど低くなる）、断面はじ字形を呈し、方位はN95°Wである。埋土は暗灰褐色土ブロックを多く含む黒褐色土である。埋土からは弥生土器片が出土している。埋土の切り合いから、SD01・SD06に先行する溝と思われる。図6の1はこの溝付近から出上している。

SK04

調査区南端で検出されている。幅は約2m、検出長は約1.4m、深さは約70cm（底面の標高は7.35～7.5m、西に行くほど低くなる）、埋土は、上層は黒味の強い黒褐色シルト質土、下層は黒褐色砂質土、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪片が両層から出上している。SD06に先行する遺構である。

SK01・02

表土直下で検出された方形の上坑で防空壕と考えられる。SK02の北側部分はトンネル状に削られ、その中に直径20～30cmの扁平な石が埋っていた。



SK02

ピット

P1：直径40cm以上、底面の標高は約8.25m、埋土は黒褐色土である。

P2：長径約40cm、短径30cm以上、底面の標高は約7.96m、埋土は黒褐色土である。

P3：SD01の東側に位置し、直径約30cm、底面の標高は約7.99m、埋土は灰褐色土を含む黒褐色土である。

P4：SD01の西側に位置し、長径約30cm、短径約25cm、底面の標高は約7.79m、埋土は褐色土である。

P5：SD01の南西側に位置し、直径約23cm、底面の標高は約7.6m、埋土は黒褐色土である。

P6：直径約10cm、底面の標高は約7.72m、埋土は黒褐色土で須恵器片が出土している。

P8：直径約42cm、底面の標高は約7.97m、埋土は黒色土で須恵器、埴輪片が出土している。

P9：長径約26cm、短径約23cm、底面の標高は約7.85m、埋土は黒褐色土である。P8に先行するピットである。

P10・11：2基重なった形状をしている。2基の長径は約40cm、短径は約28cm、底面の標高はP10が約7.82m、P11は約7.76m、埋土はP10が黒褐色土、P11が褐色土でP11からは埴輪片が出土している。

P14：SD06の西側に位置し、長径35cm以上、短径22cm以上、底面の標高は約7.37m、埋土は黒褐色土である。SD06に先行するピットである。

P15：SD06の西側に位置し、直径約25cm、底面の標高は約7.62m、埋土は暗灰褐色土である。

包含層出土の遺物

図6の13は須恵器鉢の底部、図10の27の円筒埴輪の底面には薄く凹線がある。

第5節 おわりに

今回の調査では古墳に伴うと考えられる溝が検出されている。東隣で実施された第27次調査では、SD01に直交する位置で、南西から北東方向に向く溝が検出され、埴輪が出土している。整然とした溝でないことは第27次でも同じで、2条重なっているような様相を呈している。その形状等からSD01は方墳の溝と考えられる。第26次調査区の南側で行った第17次・第25次調査でも溝が検出されている。第17次調査では、鍵の手状に曲がる溝があり、溝の幅は3～4m、深さは約60cmと推測され、尾張型埴輪や須恵器などが出土し、方墳と考えられる。第25次調査ではL字形をした溝が検出されている。溝の幅は3.1～3.7m、逆台形を呈し、埴輪、須恵器等が出土している。この溝は第19次調査で検出された溝に続き、1辺約17mの方墳で、家形埴輪が出土している。今回のSD01は、幅は2～2.5m、深さは約60cmと第17次・第25次より幅は狭い。埴輪の出土状況は第25次調査と似ており、埋土中位から下位にかけて埋っていた。高森遺跡では、遺跡の中央から南側で方墳の検出が多く報告されているが、今回の調査で方墳の分布が更に北に広がることが判明した。

埴輪についてみると、出土した埴輪は「尾張型円筒埴輪」で、2凸帯3段の形状を持ち、口径と底径の差が小さく筒状を呈している。外面調整はタテハケ後ヨコハケ、内面調整はヨコハケ、ヨコ指ナデ、底部調整は底部内外面にケズリが用いられている。「味美技法」(註1)といわれる痕跡については、底面には、細い1条の門線が付いているもの、段の付いたもの、ケズリが用いられているものなどあるが、底面が全体に残っている資料がなく不明である。また、第1段の外面の痕跡は、指を擦り上げたような痕と紐状のもので擦り上げたような痕にみえる。指の本数が確認できるのは図10の26を除き3本である。(図8の19、図10の21・22・24) 指痕と擦り上げ痕の位置は、21は指痕の近くには擦り上げの痕跡は付いていない、19と22は指痕と同じ高さに引き上げの痕がある。24は19や22より低い位置に引き上げの痕があり、26は引き上げの痕が2段付いている。指の痕も1本が下に付き、その上に薄く2～3本の指痕が残っている。出土した円筒埴輪は破片が多く、全周の残るものが少ないが、19・22から、これらは紐状のものをもち、指を体部に付けたまま両手で引き上げたような痕跡と思われ、持ち上げるという動作に伴って付いた痕(註2)と思われる。また、26の痕跡は、2度(以上)持ち上げられたものと思われる。紐状の工具を断定できる資料はないが、紐状の引き上げ痕と指痕の位置、引き上げ痕の長さにはそれぞれ微妙な差があり、工具の長さや持ち方の違いによるものであろうか。

円筒埴輪は、赤塚編年Ⅲ期第3段階(註3)に該当すると思われる。須恵器は年代幅が大きく、5世紀後半から8世紀にわたっている。出土した須恵器中もっとも古いと思われる図6の3の杯身は、やや口径が大きくことなどからH-10号窯式(註4)に該当すると思われる。これらからこの方墳は5世紀後半頃に築造されたと推定される。また、遺構は断定できないが、弥生中期後葉の土器が比較的良好な状態で出土しており、この頃にも土地利用があった地区と考えられる。

註1 1991 赤塚次郎『尾張型埴輪について』『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

註2 1994 犬塚康博『「味美技法」批判』名古屋博物館研究紀要第17巻 名古屋博物館

註3 註1と同

註4 1997 尾野善治『尾張・西三河(遺跡) 葬・尾北・その他』『古代の土器5-1 7世紀の土器』古代の土器研究会編

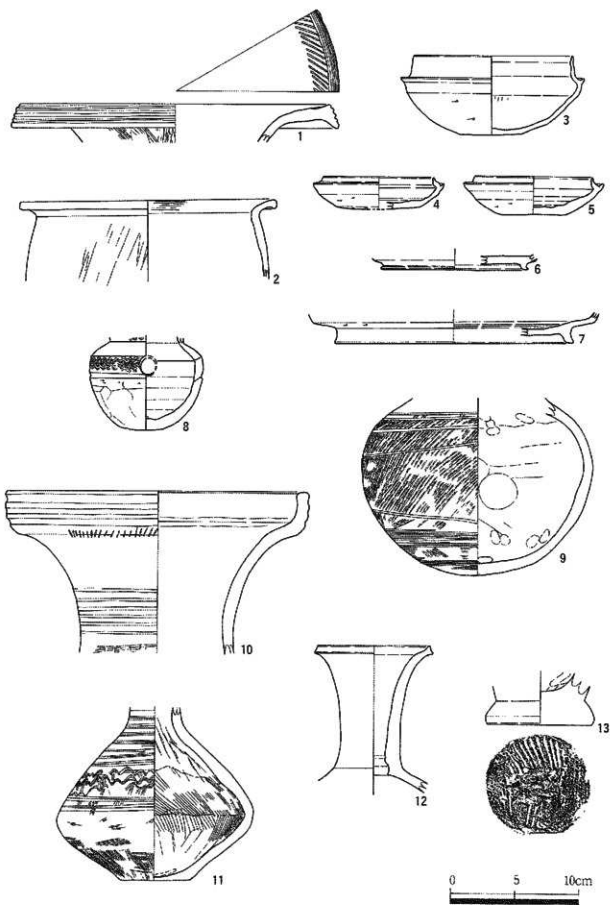
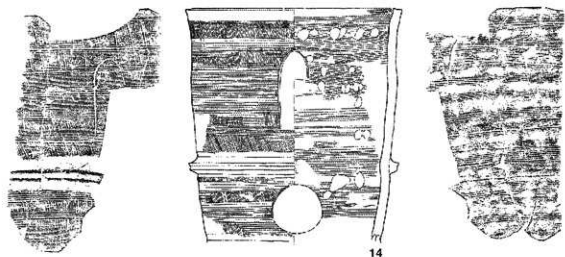
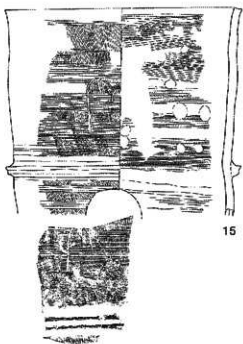


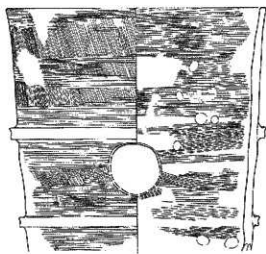
图6 出土器物(1)



14



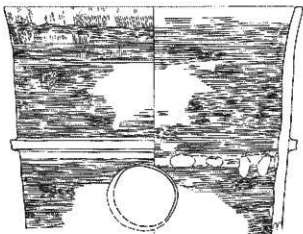
15



16



17



18

0 5 10cm



图7 出土遗物(2)

图8 出土遗物(3)

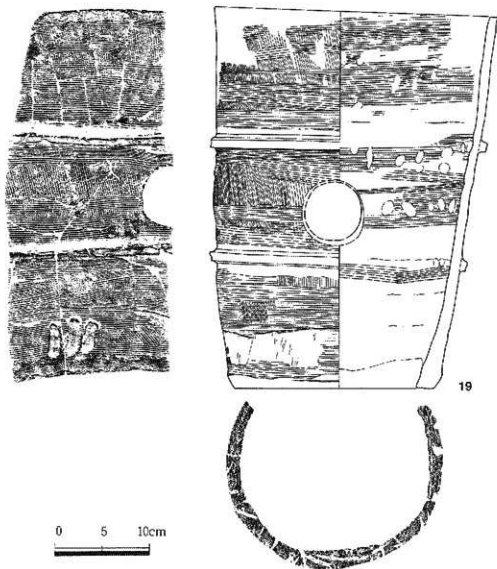
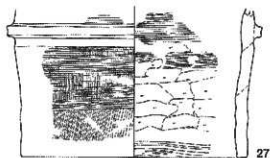
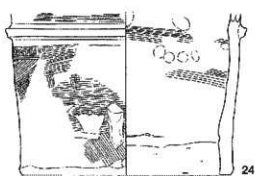
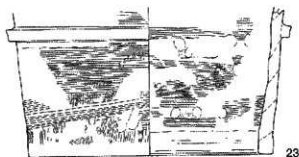
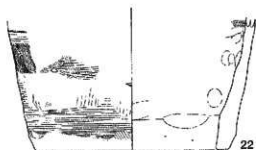
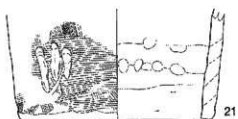


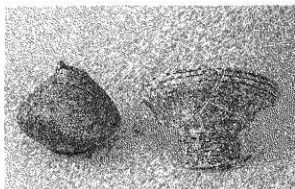
图9 出土遗物(4)



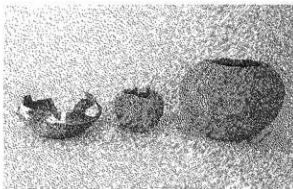
(1:2)

图10 出土遺物(5)





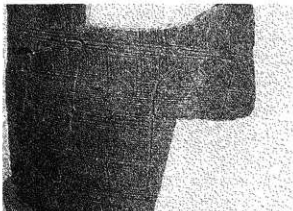
弥生土器



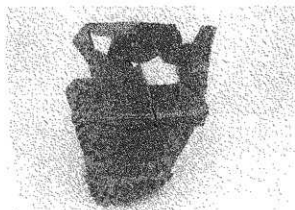
須恵器



円筒埴輪 (図7の14)



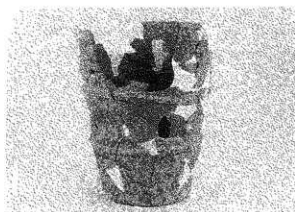
円筒埴輪 (図7の14)



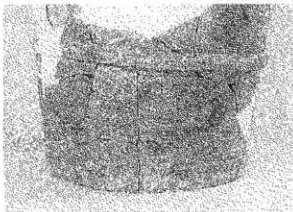
円筒埴輪 (図7の16)



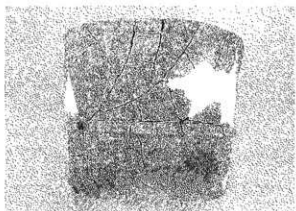
円筒埴輪 (図7の17)



円筒埴輪 (図8の19)



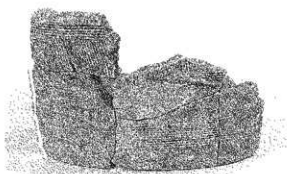
円筒埴輪 (図8の19)



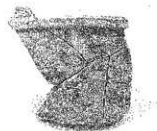
円筒埴輪 (図7の18)



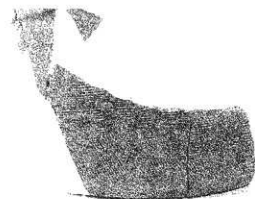
円筒埴輪 (図10の21)



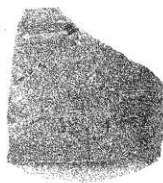
円筒埴輪 (図10の22)



円筒埴輪 (図10の23)



円筒埴輪 (図10の24)



円筒埴輪 (図10の26)



円筒埴輪 (図10の27)



円筒埴輪 (図10の26)

第3章 第27次発掘調査報告

第1節 調査の経過

第27次発掘調査は、熱田区沢上1-6-28で、個人住宅の建設に先立って実施した。前章で報告した、26次調査のすぐ東側の地点である。調査期間は、2000年2月21日から同年3月17日、調査面積は、約80㎡である。排土置場の都合上、南北に二分して調査を行った。北側の前半区は遺構、遺物ともに少なかった。南側の後半区では、古墳の周濠であると思われる溝が検出され、埴輪や須恵器などがコンテナケース8箱分程出土した。調査では、溝にはSD、上坑にはSK、住居にはSB、小穴にはPを冠した番号を検出順に与えた。本書でもその番号を踏襲している。

その後、見晴台考古資料館において、図面や遺物の整理作業を実施した。遺物については、埴輪は、口縁部あるいは底部で、その径が明らかなものを中心に図化した。須恵器についても、口徑あるいは底径が復元できるものを図化した。

第2節 基本層序（第1図）

調査区の周囲の壁面で層序を確認した。北半部では、10～20cmの表土の下に、遺物をあまり含まない黒褐色土が見られた。この黒褐色土は15cmほどの厚みがあり、その下位は橙色粘質土の地山であった。南半部では、その黒褐色土は見られず、表土の下位はすぐ、後述する古墳の周濠らしい溝の埋土であった。おそらく、調査区北半部は古墳の墳丘部分にあたると思われ、黒褐色土は古墳の盛土の一部の可能性がある。



写真1 調査風景



写真2 調査区北壁

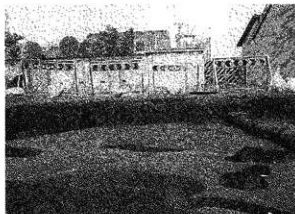
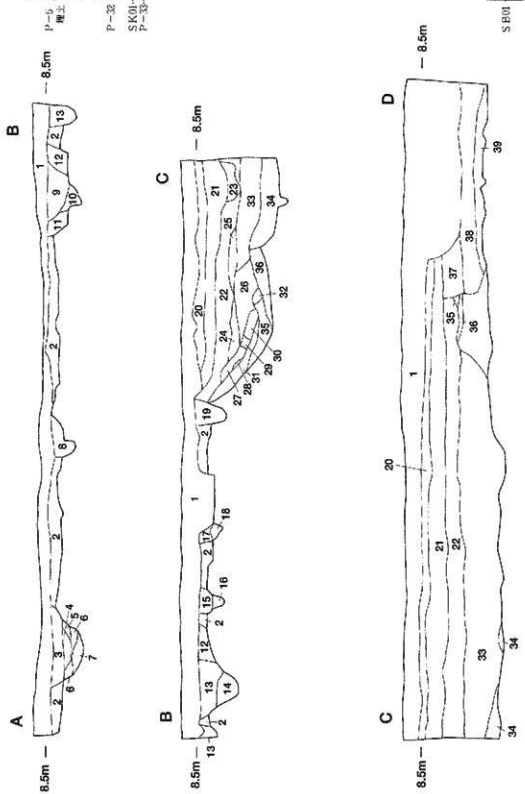


写真3 調査区東壁

- 1 湖上・湖上・湖上土
- 2 湖相色土…砂質・小石・やわやわ、量物少な
- 3 湖相色土…湖底近く、砂物多し、しまりなし
- 4 湖相色土…3と同層、砂物は上り少ない
- 5 湖相色土…湖底近く、砂物多し、しまりなし
- 6 湖相色土…6より湖底は少ない
- 7 湖相色土…湖底近く、砂物多し
- 8 湖相色土…湖底近く、砂物多し
- 9 湖相色土…湖底近く、砂物多し
- 10 湖相色土…湖底近く、砂物多し
- 11 湖相色土…9より湖底は少ない、砂物多し
- 12 S.F.01…9より湖底は少ない
- 13 P-33…12より湖底は少ない、砂物多し
- 14 湖相色土…13より湖底は少ない、砂物多し
- 15 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 16 湖相色土…15より湖底は少ない、小石・砂物少な
- 17 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 18 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 19 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 20 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 21 湖相色土…20より湖底は少ない (第3層2)
- 22 湖相色土…21と同じ程度に砂物も少ない (第3層3)
- 23 湖相色土…22と土質は近いが湖底は少ない
- 24 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 25 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 26 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 27 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 28 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 29 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 30 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 31 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 32 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 33 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 34 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 35 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 36 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 37 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 38 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し
- 39 湖相色土…湖底近く、小石・砂物多し

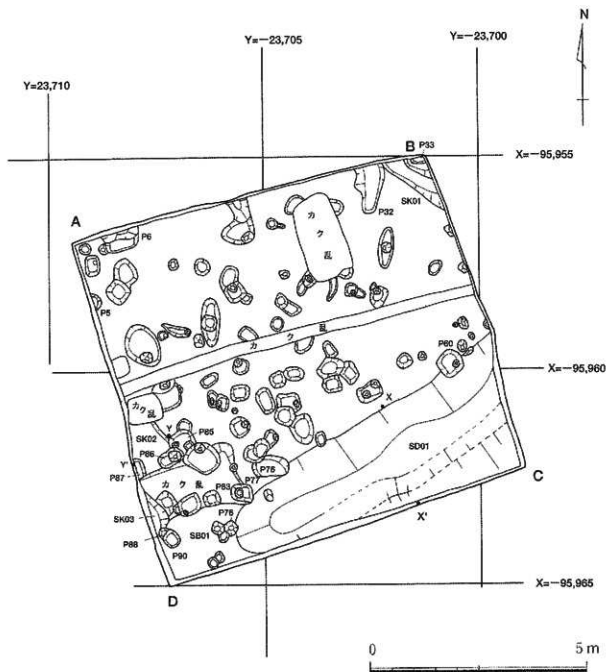


第1図 調査区断面図 (A~Dは第2図と対応)

第3節 遺構と遺物

調査区の南半を中心に、古墳の周濠と思われる溝1条、古代の竪穴住居、約100個の小穴などを検出した。先述したように、北半では遺構、遺物が極めて希薄であったが、これは、後述するようにこの部分が古墳の墳丘下であったことも原因の一つと思われる。

遺物が出土し、時期が特定できた遺構を中心に、時代順に記述する。



第2図 調査区平面図

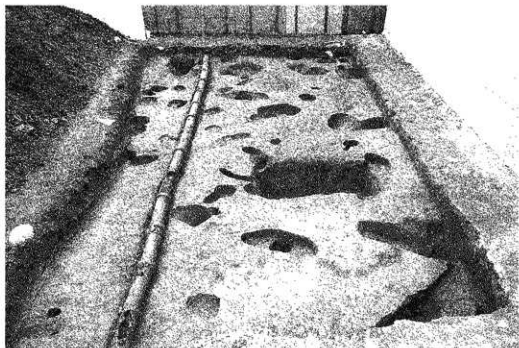


写真4 前半区全景



写真5 後半区全景

SD01 (第3図)

調査区の南半で検出した。一条の溝として掘削を行ったが、掘削途中の断面の観察で、この溝の中央に地山上の高まり(第3図13層)があることがわかった。溝が二条重なっていた可能性もあるため、第2図にはその断面の高まりを結んだ線を破線で示した。出土遺物は区別して取り上げられなかったが、この高まりの両側から埴輪片や須恵器片が出土しており、遺物の時期では区分できない。

断面で観察しても、13層の高まりを境とする切り合いははっきりしないため、ここでは、掘削中の評価のまま、一条の溝として報告する。溝は、2.8m以上の幅を持ち、深さは検出面から1mほどをはかる。埴土は、北側に地山土を多く含む土が堆積し、その上位に、黒褐色上、暗褐色土、褐色土が堆積していた。この内、褐色上には多くの埴輪片が含まれていた。隣接地で行った26次調査の成果と合わせて考えると、この溝の北側が埴丘にあたり、溝内の北側の地山土を多く含む土は、古墳の盛土、あるいはその盛土が岡窪内に流入したものの可能性が高い。

出土遺物は、埴輪片が多い。小破片が多く、全体がわかる資料はない。また、原位置を保っているものはない。須恵質のもの、土師質のものに見られる。1は、須恵質埴輪の口縁部である。外面は、縦ハケメの後、回転による横ハケメが施されている。内面も横方向に回転によるハケメが施されている。口縁端部は、ヨコナデによって、幅の広い面をなしている。突帯は、比較的高く、断面は台形を呈している。円形の透孔が確認できる。口縁部付近に逆U字形のヘラ記号がある。

2は、土師質埴輪の底部である。器面の摩滅が進んでいるが、外面には縦ハケメ後、回転によるヨコハケメが施されている。内面にも横ハケメが施されている。おそらく回転によるものと思われる。また、内面には、指頭による凹印の痕跡が極めて多く認められる。円形の透孔が観察できる。

3は、朝顔形埴輪の胴部である。円筒部上位の頸部付近は、縦ハケメの後、横方向の回転によるハケメが施されている。口縁部には、縦方向のハケメのみが観察できる。頸部の屈折部には、断面三角形の突帯が貼り付けられている。円筒部の突帯は比較的高い。円筒部の内面は、ナデによって調整されており、ハケメは見られない。口縁部内面は、横方向のハケメであるが、短い単位のハケメである。

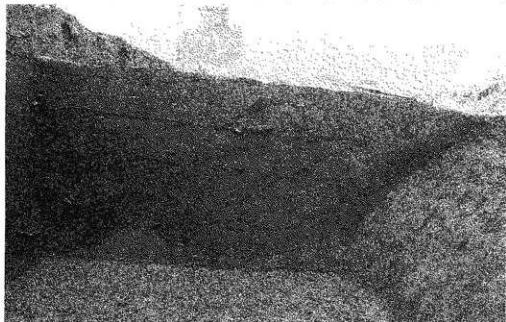
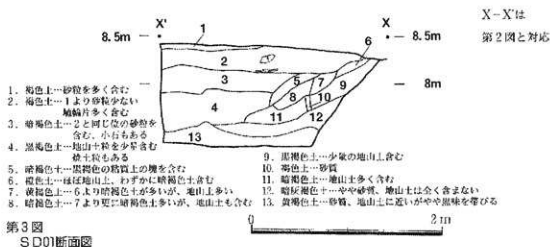


写真6 SD01断面



4は、円筒埴輪の胴部である。天地については、傾きによって判断した。この個体についても、外面は縦方向のハケメの後、回転による横ハケメ、内面も回転による横ハケメである。内面は、指頭によるオサエの痕跡が顕著に残っている。

SD01からは、直接古墳とは関わらないと思われる遺物も出土している。5は、須恵器高杯脚部である。脚部径は、10.0cm、脚中位に一条の沈線が巡っている。口縁の端部には、ヨコナデによって凹面が形成されている。6は、須恵器の鉢であろう。口径は、19.2cm。口縁部には一条の沈線が巡っている。外面は、縦方向の平行タタキの痕跡が残り、下位については、その後イタ状工具によるナデが施される。胴部の内面は、横方向にナデが施されている。7は、直線的に僅かに開く口縁部を持つ。須恵器の鉢あるいは甌であろう。口縁部は四角く作られ、端部が外側に突出する部分もある。口縁部直下には一条の沈線が巡っている。

8は、灰釉陶器の磨底部である。小片であるが、底部径は、7.6cm程に復元される。高台の形態等から、折戸53号甌式〔齋藤1994〕に比定できるだろう。

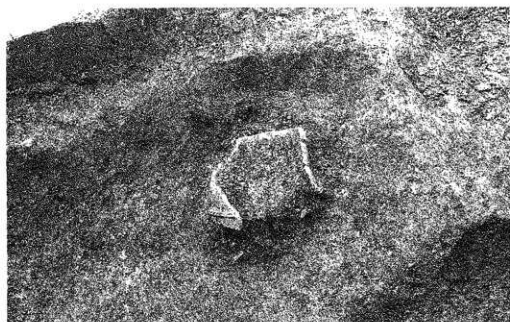


写真7 SD01埴輪出土状況

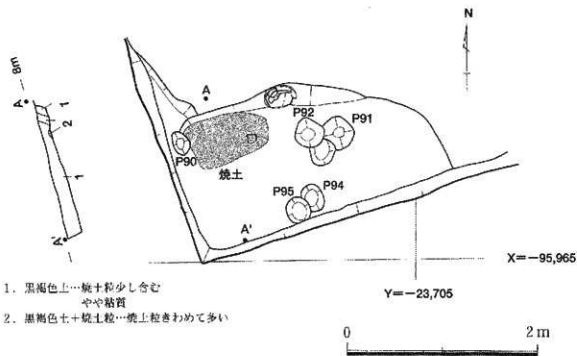
SB01 (第4図)

SD01は、調査区南西隅付近で浅くなっており、その部分で竪穴住居を検出した。SD01の埋土中に築かれており、プランの検出は困難であったが、焼土や須恵器の存在と、断面の観察などを手掛かりに、プランを推定した。住居のコーナー部分を僅かに検出したのみで、規模は不明である。検出できた面からの深さは、20cm程であるが、調査区南壁で見る限り、50cm近く掘り込まれているように思われる。SD01出土遺物中に見られる古代の遺物の多くはこの埋土に由来する可能性が高い。埋土はやや粘質の黒褐色土で、焼土粒を少量含む。埋土の上位を中心に、地山上の塊が含まれている。

住居の北側の壁際の、東西80cm、南北50cmの楕円形の範囲内では、焼土、炭化物が多く見られた。その東側の、住居の壁面に接するように須恵器の横瓶(9)が出土している。おそらく住居で本来置かれていた姿を留めているものと思われる。口径は、幾らか歪んでいるが、11.0cm程度である。器高は、31.0cmを計る。口縁部は下位はほぼ直立し、上位が僅かに外反する。端部は、ヨコナデによって幅広い外傾面をなしている。外面は、横方向のタタキが観察できる。内面は、縦方向にナデを施している。長軸方向の胴部端は、粘土を貼った痕跡が顕著に残っている。

10は須恵器の蓋である。図化部の1/8程度しか残っていない小片であり、口径は15~16cm程度である。内外ともヨコナデによって整えられている。口縁部は外側に面をなしている。11は、須恵器の行台の付である。図の1/4程度が残っているが、口径は、17.0cm、底径は11.7cm、器高は3.5cmを計る。口縁部はヨコナデによって整えられており、口縁端部は丸い。貼り付けの高台は、接地面が僅かに中高の面をなし、内側に僅かに突出している。底部外面には、ヘラケズリが施されており、砂粒は反時計周りに動いている。

12は、須恵器の碗である。図化部の2/3が残っている。焼土内から出土しており、出土状況からもこの



第4図 SB01

住居に属する遺物と考えて良いだろう。口径は12.7cm、器高は4.9cmを計る。口縁部付近はヨコナデによって整えられている。端部は、内傾する面を持っている。体下部位には、ヘラケズリの痕跡も確認できるが、やや突出する底部はヘラケズリの痕跡は認められない。

また、住居の床面と思われる面で検出したビットP92から、須恵器の杯蓋(13)が出土している。ほぼ全体が遺存している。偏平な筒みを持つ。口径は、15.5cm、器高は3.1cmを計る。口縁部付近はヨコナデが施され、端部外面には凹面が形成されている。天井部付近外面にはヘラケズリが為されている。この蓋の内面には、ヘラ記号が見られる。

なお、このビットはSB01に作うものであると思われるが、それ以外のビットについては時期の特定ができず、住居の柱穴は特定できていない。

須恵器杯蓋は、NN-288号窯などの出土遺物に類似し、横瓶は、あまり良好な比較資料がないが、NN-288号窯出土のもの、口縁部の形状はと大きくは異ならない。それゆえ、このビットと住居は同時期のものと考え、その年代としては8世紀初頭【尾野2000】としておく。



写真8 SB01

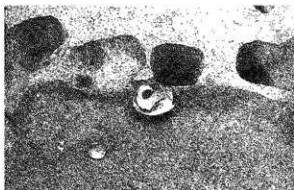


写真9 SB01 遺物出土状況



写真10 SB01 焼土断面

SK02 (第5図)

調査区南半の西壁付近で検出した。西は調査区外に続き、他は攪乱などに切られて全体の形状は明らかではないが、残っている東側の辺は直線的である。検出した地山面からの深さは10~20cm程で、床面はほぼフラットになる。埋土からは、古代の須恵器などが出土している。

この遺構の床面で、P87を検出した。このビットからも古代の須恵器片が出土している。



第5図 SK02・P87断面図



SK03

調査区南半西壁付近、SK02の南側で検出した。ごく僅かな部分を検出したのみで、大半が調査区外であるため、形状や深さは不明である。黒褐色土を埋土とし、SB01を切っていると判断した。埋土中から、古代の須恵器が出土している。須恵器の右台の杯である。図化部の1/3程度が残っている。高台の径は、10.1cm。高台の中ほどに一条の沈線が巡っている。底部外面にはヘラケズリが施されている。

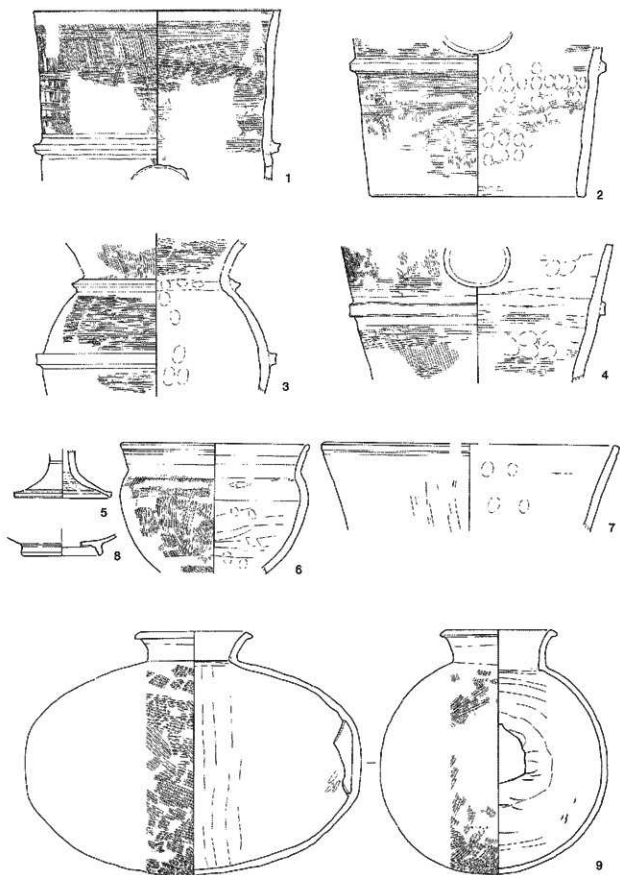


SK01

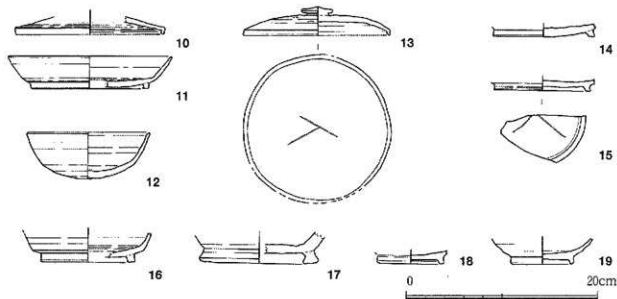
調査区北東端で検出した。大半が調査区外の上、西側はP32に切られているが、溝状の遺構である。P32の埋土に類似しているが、P32に比べると砂粒がやや少ない黒褐色土を埋土としている。検出した一つの辺は、直線的である。基本層序の2層から掘り込まれている。遺物の出土はなく、時期は不明である。

ビット

調査区南半を中心に、95個の小穴を検出した。遺物が出土したものは少なく、出土したビットでも小破片に過ぎず、多くのビットは時期が特定できていない。特に、北半で検出したビットについては、出土遺物は極めて少なかった。P6は、北側調査区北壁付近で検出した。基本層序の2層に掘り込まれている。検出できた範囲では、一辺が0.75m程の方形のビットであり、北は調査区外へ続く。掘り込まれた2層上面からの深さは約40cmである。埋土は基本的に黒褐色土であるが、地山土の多さで区分した。埋土中から



第6圖 出土遺物(1) (1~8 : S D01)
(9 : S 1301)



第7図 出土遺物(2) (10~12: SB01, 13: P91, 14: SK02)
(15: SK03, 16~19: 包含層等)

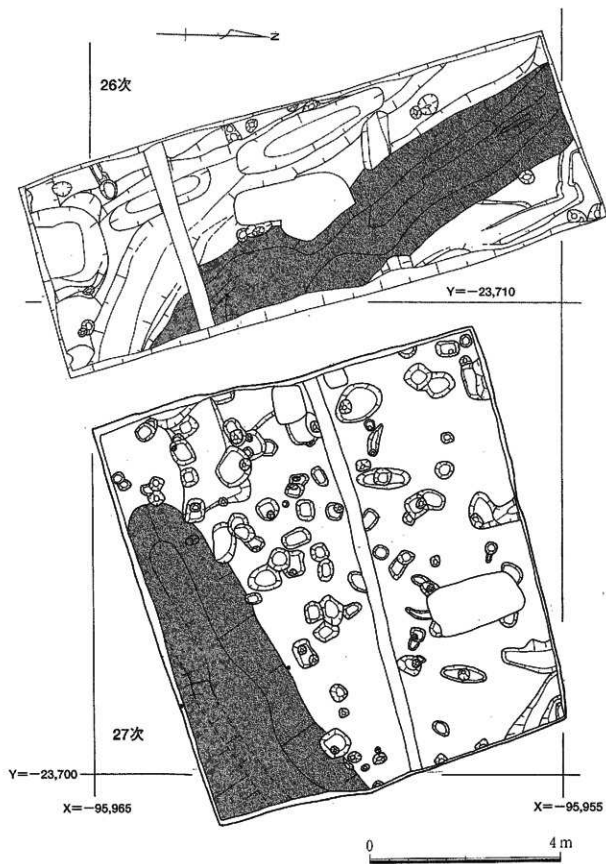
は、小片であるが、弥生土器が出土している。同じく北西隅のP5からは土師質の土器の小片が出土しているが時期は特定できない。検出した地山面からの深さは0.2m程度である。

南半部では、南西隅SB01の周辺のP77、P85、P86等のピットからは、須恵器が出土しており、古代の遺構の可能性が想定される。須恵器も小片のため、ピットの時期を示しているとは限らないが、SB01周辺には須恵器の出土する遺構が集中している。

包含層等出土遺物

表土除去中や、遺構検出掘削中に出土した遺物が幾らかある。16は、須恵器の右台杯である。図化部の1/6程度しか残っていないが、高台径は、8.5cm程度に復元できる。杯の底部から比較的シャープに折れて体部にいたる。17は瓶の高台部片である。図の1/2程度が残っている。高台端部は、幅広い面をもち、内側にやや突出している。端部の面には、板状工具による斜めの条線が観察できる。

18及び19は、灰釉陶器碗底部である。底部は全体が残っている。18は底径6.4cmをはかる。19は底径6.1cm。何れも高台の端部は丸みを帯びているが、19は、外側に僅かに面をなしているように見える。



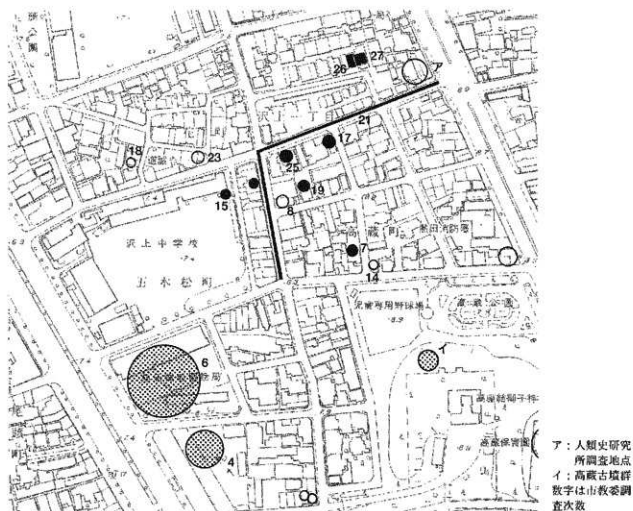
第4節 まとめ

27次調査では、古墳の周濠らしい溝1条と、古代の竪穴住居などを検出した。調査区の面積が限られており、全体の姿が明らかで遺構はないが、前章で報告した、26次調査の成果と合わせて考えることでまとめとしたい。第8図に示したとおり、27次調査のSD01は、調査区の端付近で浅くなり、一端途切れているが、26次調査で検出された溝と連続している事は間違いない。第26次では、埴輪が出土する溝が2条検出されており、何れも27次調査区にむかってまがっているように見える。位置関係からすると、26次調査の西側の溝は、27次調査区外へとつながるように見えるから、内側の、図にアミで示した溝が今回のSD01につながる可能性が高い。但し、27次調査区でも、報告したとおり、SD01は、平面の検出では切り合いが確認できず、断面でも明瞭な切り合いは見られなかったため、1条の溝として報告したが、2条の溝が重なっている可能性も否定できず、それぞれが、26次調査の2条に対応する可能性もあろう。26次調査の2条の溝の出土遺物にも、27次調査のSD01の出土遺物にも時期差を見いだせていないため、遺物から判断することも困難である。現状では、27次調査の溝は26次調査区の東側の溝SD01とつながって、方形の古墳の周濠であったと推定しておきたい。ただし、その場合でも26次調査では、ほぼ時期差のない溝がこの古墳の周濠に接するように掘られていたことは確かであり、興味深いところである。また、検出した古墳も、周濠のコーナー部分が極めて浅く、底部のレベル差が30cm程あり、一端途切れているように見えることも注意しておいたほうが良いだろう。時期としては、埴輪の特徴等から5世紀後半から6世紀前半〔赤塚1991〕であろう。

ところで、26次及び27次調査地点の付近では、過去に市教委21次調査が行われている他、1999年には隣接地が人類学研究所によって発掘調査が実施されている。後者については、未報告のため成果についてはわからないが、21次調査では、今回の調査区の南側の道路上で、土師器、須恵器、埴輪が出土したSD092802、あるいは土師器が出土したSD092501と呼ばれる遺構が検出されている。幅1mのトレンチ状調査のため、遺構の性格は確定できないが、古墳の周濠である可能性もあろう。更に、調査地点から東側では、市教委による調査が度々行われている。第9図には、その位置を示したが、須恵器、埴輪等が出土し、古墳の可能性のある遺構が検出された地点を●及びアミで示した。高蔵公園の北側及び東側一帯で、方墳の周濠であろうと思われる遺構が点々と見つまっていることがうかがえる。19次及び25次調査地点で検出された方墳は、一辺17m程度の方墳で、周濠からは須恵器の甕や円筒埴輪、家形埴輪が出土している。この古墳の周濠は、幅が5m程ある。上位の削平状況にもより、溝の規模は単純には比較できないが、今回の古墳の周濠よりはかなり大規模である。また、見つかった2つのコーナー部分は浅くはなっていない。

規模が確定できる古墳はこの程度であるが、おそらく、このあたり一帯が古墳時代中期から後期にかけての、主に方墳を中心とした墓域であった事は疑いない。未だ、全体が確認されたものがほとんどないが、規模や周濠の廻り方、出土遺物の検討を通じた時期毎の変遷など、今後の検討課題は多い。また、高蔵遺跡では弥生時代後期を通じて築かれ続けた方形周濠墓との関連も検討の課題となり得よう。

27次調査では、古代の竪穴住居も検出した。高蔵遺跡の古代についても未だ不明な点が多い。1次調査では古代の竪穴住居が検出されている。大津通をはさんだ東側の台地上でも24次調査で、土坑等が検出されている。その他、各地点で遺物の出土は認められ、大規模な集落の存在が推測されるが、遺構の遺存状態がよくない場合も多く、古代の遺構の広がりもまだわかっていない。



第9図 高城遺跡古墳検出地点

ところで、隣接する26次地点では、弥生時代中期の遺構、遺物が検出されている。本地点では、併かにP6から弥生時代の上器の小破片が出土するのみで、弥生時代と確定できる遺構はない。古墳の築造に際して削平されてしまったのであろうか。

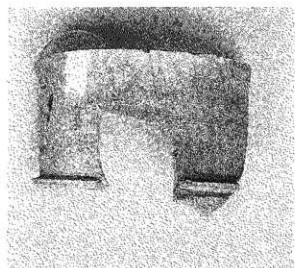


写真13 SD01埴輪 (第6図1)

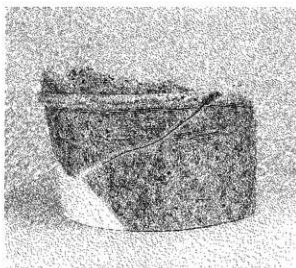


写真14 SD01埴輪 (第6図2)

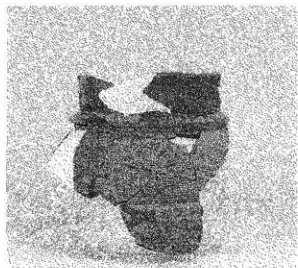


写真15 SD01埴輪 (第6図3)

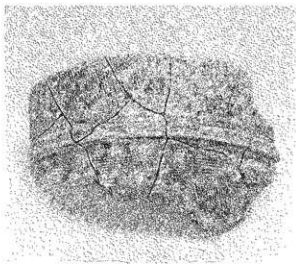


写真16 SD01埴輪 (第6図4)

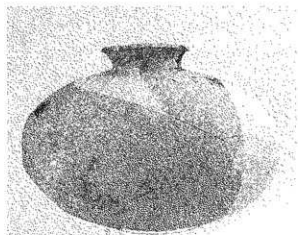


写真17 SB01須恵器 (第6図9)

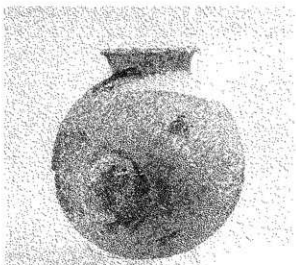


写真18 SB01須恵器 (第6図9)



写真19 SD01須恵器 (第6図5)



写真20 SD01須恵器 (第6図6)



写真21 SB01須恵器 (第7図11)



写真22 SB01須恵器 (第7図12)



写真23 P91須恵器 (第7図13)



写真24 灰釉陶器 (第7図18・19)

第4章 第28・29次発掘調査報告

第1節 調査の経過

高蔵遺跡第28次調査は個人住宅の建築に伴って5月22日より6月9日、29次調査は個人住宅の建築に伴って7月24日から8月11日にかけて実施した。隣接地であり、両調査区に重複する遺構なども認められることから、ここでは同時に説明することとする。

第28次調査：第28次調査は5月22日までに現場での準備作業を終え、23日より北半地区の表土掘削、包含層掘削を進める。検出、遺構掘削を順次進め、29日までに平面図作成などの記録作業を終える。31日には北半地区の埋め戻しを進めるとともに、折り返し南半地区の表土掘削に移行した。6月6日までに遺構を掘りあげるとともに、記録作業を進め、8日までに調査活動を終了、埋め戻しを行う。

第29次調査：第29次調査は梅雨明けをねらって、7月24日より調査を開始する。28次調査同様、調査区の北半地区から調査を開始する。駐車場として利用されていたため、一部アスファルト撤去を行いながら表土掘削を進め、26日より遺構検出作業と遺構の掘り上げ作業を平行して行う。8月1日までに遺構を掘り上げ、図面などの記録作業も終了する。2日に埋め戻しと、南半地区の表土除去を行う。3日以降は順次遺構検出と掘削を進め、10日には平面図などの記録を終える。10日のうちには埋め戻しまで行い、翌日までには片づけも含めた調査の全工程を終えた。

その後、見晴台考古資料館で遺構図面の整理と遺物の水洗、注記、実測、写真撮影などの整理作業を行った。基本的に調査時の遺構名を踏襲して整理作業を行ったが、住居址のみは説明の便宜上新しく住居址A～Pと呼称することにした。

第2節 基本層序

両調査地点とも、調査区内で遺構が激しく重複しており、基本層序を正しくとらえることは難しい。特に29次調査では、駐車場の前は倉庫として使用されており、壁面の大部分を基礎が壊し、観察は困難であった。少ない情報を整理しておく、表土以下30～40cmの厚さで表土、攪乱土が堆積、その下には中世までに堆積したと考えられる褐色土層（包含層）が広がる。包含層自体も茶色味の強い上層と、黒みの強い下層に分かれる。遺構に削られた格好で厳密にはその上面の高さは判断できないが、表土から地山の熱田層までは平均60cm～80cmの深さを測る。上層の観察から、包含層は中世段階まで盛んに形成されたが、近世以降の土地利用活動はそれほど盛んではないようである。遺物は量的には偏るが、調査区全体から出土している。

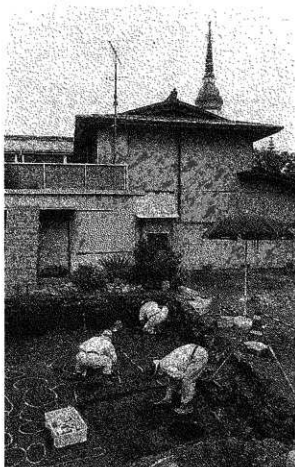
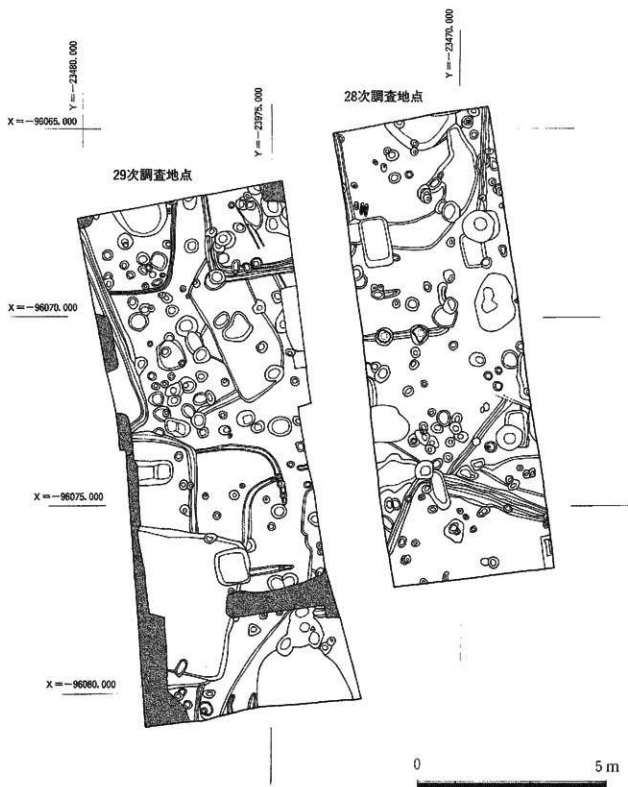
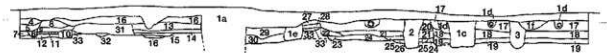


写真1 作業風景



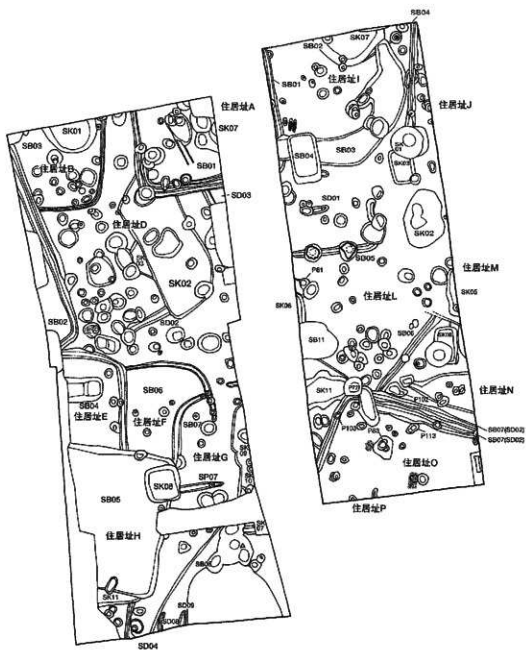
第1図 高蔵遺跡第28次・29次調査全体図



調査区西壁十層調査

- 1a 淡褐色土層 ϕ 1.2cm \sim 半人までの礫を少量に、 ϕ 5mm前後の炭化物、スコリア粒を少量含む。砂質でざらざらとした感じであるが、粘りがややあり、乾くと硬く締まる。1層は、灰土層及び近代以降の土地利用痕跡であり、何層かに分解が可能である。特徴的なものみ、1b \sim 1fとした。
- 1b 褐色土層 ϕ 2、3cmの礫、 ϕ 5mm前後の炭化物粒を少量含む。粘性ややありしりなし。
- 1c 褐色土層 土層を中心に堆山土をブロック状に含み、茶味を帯びる。 ϕ 1、2cmの礫を少量含む。粘性しまりともに弱い。
- 1d 褐色土層 混入物は少ないが、部分的に炭化物の混入が認められる。粘性ややあり、しりなし。土質調査に伴う衛生土が、土厚 ϕ 105mmほど、上層部にはシルト化した層位も認められる。
- 1e 灰褐色土層 ϕ 5mm前後の炭化物粒を少量含む。シルト化しており粘性が高い。
- 1f 褐色土層 ϕ 5mm前後の炭化物粒を少量含む。腐し灰、柳木屑などの破片を含む。
- 2 褐色土層 ϕ 2、3mmの炭化物、スコリア粒を少量含む。下層を中心に堆山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(P47覆土)
- 3 褐色土層 ϕ 5mm前後の炭化物、スコリア粒を少量含む。下層を中心に堆山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(P50覆土)
- 4 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒、 ϕ 5mm前後の礫をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(伴塚北P覆土)
- 5 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 2、3mmの炭化物をごく少量(他層より多い)、 ϕ 1mm前後のスコリア粒、 ϕ 5mm前後の礫をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址P覆土)
- 6 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。堆山土をブロック状にごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址P周覆土)
- 7 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。堆山土を均質にブロック状に少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址P北面貼り土)
- 8 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物をごく少量、 ϕ 5mm前後の炭化物粒を極く少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址O2覆土)
- 9 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1mm前後の炭土、スコリア粒、 ϕ 1、2cmの礫をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址O2覆土)
- 10 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。堆山土をブロック状に少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址O2周覆土)
- 11 褐色土層(焼物多量) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量含む。混入物が少ない。上面には、1.2cmほどの厚で堆山土が張り付けられる。粘性しまりともにあり。(住居址O2北面貼り土)
- 12 褐色土層(焼物多量) 褐色土と堆山土をほぼ1:1の割合で、ブロック状に含む。混入物は ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物をごく少量含む。粘性しまりともにあり。(住居址O1北面貼り土)
- 13 褐色土層(焼物多量) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmのスコリア粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址上)
- 14 褐色土層(焼物多量) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、焼土粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址上)
- 15 褐色土層(焼物多量) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。堆山土をブロック状に少量含む。粘性しまりともにややあり。(伴塚北1、北面貼り土)
- 16 褐色土層(焼物多量) 褐色土と堆山土をほぼ1:1の割合で、ブロック状に含む。混入物は ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmのスコリア粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(SK11覆土) m
- 17 褐色土層(半砂状) ϕ 5mm前後の礫粒を少量、 ϕ 2、3cmの礫をごく少量含む。砂質で、サツサとした質感であるが、粘性しまりともにややあり。(住居址A覆土)
- 18 褐色土層 ϕ 2 \sim 5mmまでの礫、灰土、炭化物、スコリア粒を少量含む。18層と比較して包含物が多い。粘性は弱いものしりやあり。(住居址A覆土)
- 19 褐色土層(焼物多量) ϕ 2 \sim 5mmまでの礫、焼土、炭化物、スコリア粒を少量含む。部分的に堆山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(住居址A周覆土)
- 20 褐色土層(焼物多量) ϕ 2、3mmの炭化物、スコリア粒を少量含むほかは、混入物は少ない。粘性しまりともにややあり。(住居址K覆土)
- 21 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址K覆土)
- 22 褐色土層(焼物多量) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物粒をごく少量含む。稀に堆山土ブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(住居址K北面)
- 23 褐色土層(2層) ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物粒をごく少量含む。堆山土をブロック状に30%ほど含む。粘性しまりともにややあり。(住居址K周覆土)
- 24 褐色土層(焼物多量) 褐色土と堆山土をほぼ1:1の割合で、ブロック状に含む。混入物は ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量含む。粘性しまりともにあり。(住居址K北面貼り土)
- 25 褐色土層 基本的には2層と同様であるが、褐色土層の上層。褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量含む。堆山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(P27覆土)
- 26 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物粒、微細な焼土粒をごく少量含む。比較的粒子が細かい。粘性しまりともにややあり。(住居址L覆土)
- 27 褐色土層(焼物多量) ϕ 1、2mmの炭化物、焼土粒をやや多めに含む。 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。(住居址L覆土)
- 28 褐色土層 ϕ 2、3mmの炭化物、焼土粒をごく少量含む。堆山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(SK05覆土)
- 29 褐色土層 ϕ 1mm前後の白色礫粒を少量、 ϕ 1、2mmの炭化物、焼土、スコリア粒をごく少量含む。堆山土を小さなブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(SK06覆土)
- 30 褐色土層 ϕ 2、3mmの炭化物、焼土粒を少量(他層より多い)含む。 ϕ 1、2mmのスコリア粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。
- 31 褐色土層 ϕ 1、2mmの炭化物、スコリア粒をごく少量含む。堆山土をブロック状に30%ほど含む。粘性しまりともにややあり。(P87覆土)
- 32 黄褐色土層 堆山土。 ϕ 1mm前後の白色礫粒を多量に、 ϕ 1、2mmのスコリア粒を少量含む。粘性強いしりあり。
- 37 桜褐色土層 33層(堆山土)が埋り込んだもの。

第2図 第28次調査調査区西壁土層図



第3圖 遺構位置圖

第3節 遺構と遺物

今回の高蔵遺跡第28次・29次調査においては、弥生時代中期から古墳時代にかけての住居址を中心に、各時期の遺構が激しく重複して確認された。住居址については現場段階では28次調査で11軒、29次調査で8軒を検出したが、両調査区に重なるものも存在し、確実に住居址であると判断されたものについて新たに住居址AからOの16軒（18住居回数）として記述を行いたい。住居址以外の土坑、ピットも多数検出されたが、時期や性格の判断が可能なのは少ない。特徴ある遺構のみ報告させていただきたい。

1. 竪穴住居址

住居址A（28次調査SB01，29次調査SB01）

住居形態	方形
住居規模	3.8m×3.5m以上
住居回数	2回（周溝の重複状況により判断）
付帯施設	柱穴（確定できず）、周溝
重複関係	住居址I、住居址Kを切る。 住居址Dに切られる。
想定時期	古墳時代古墳時代末以降 （住居址Iとの切り合い関係から）

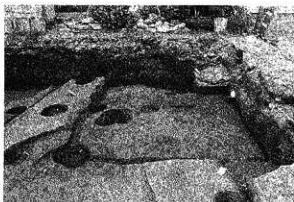


写真2 住居址A

住居址Aは28次調査において平面的には周溝を確認したのみであったが、調査区西壁面において立ち上がりを確認し、住居址として認定した。当然29次調査地点にも住居址の範囲が及ぶことが想定されたが上面でのプランの検出は図れなかった。住居回数は周溝の状況から2回と判断したが、貼り床面の検出は一面にとどまった。調査区北東隅、攪乱の脇にやや深く掘り込まれた部分が存在するが、覆土中に埴土等が散っていたことを考えあわせるとが址の痕跡である可能性が高いといえよう。貼り床面を住居址Dの周溝が切っており、前後関係を把握された。

遺物：遺物量はかなり多いが、小破片がほとんどである。高蔵期以降須恵器まで各時期の遺物が含まれているが須恵器の比率が他の住居址と比較してやや高い。図示可能な遺物は特になく、出土遺物から住居址の時期を比定することはできない。

住居址B（29次調査SB03）

住居形態	方形
住居規模	2.5m以上×2.3m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴（確定できず）、周溝
重複関係	住居址C、住居址Dと重複 （切り合い関係不明）
想定時期	不明



写真3 住居址B

住居址Bは29次調査北半区の遺構検出作業中に、

調査区の北西隅で周溝を確認、住居址として認定した。上面で検出できなかったことから、住居址B(SB03)として取り上げた遺物は少ない。壁の立ち上がりも検出することができなかった。住居址C、Dとの切り合い関係についても判断がつかなかった。

遺物：検出面が低かったこともあり、住居址B(29次SB03)で取り上げた遺物はすくない。

住居址C(29次調査SB02)

住居形態	方形
住居規模	5.8m以上×0.9m以上
住居回数	2回(周溝の重複状況より判断)
付帯施設	周溝
重複関係	住居址B、住居址D、住居址Fと重複(切り合い関係不明)
想定時期	古墳時代

住居址Cは29次調査の北半区の遺構検出作業中に住居プランを確認した。この住居址Cは今回の28次、29次調査のなかで、最も掘り込みが深く、壁の残り具合が良好な住居址であった。地山の熟田層自体がやや高いこともあるが、地山の上面からの残存壁高が25cmを測る。周溝もはっきりと検出できた。周溝の状況から床面も上下2面存在することが想定されるが、貼り床面は確認できなかった。住居址の掘り方は熟田層を深く掘り込んでおり周溝の検出は容易であったが、柱穴等の施設は全く検出できなかった。南東隅のコーナー部分は認められたが、住居址自体の大半は西側の調査区壁の中にあり、住居址の全容は明らかではない。

遺物：先述のように住居址Cは壁の残りがよく、上面で検出できたことからこの住居址の覆土を判断する事は容易であった。埋上の土量はかなりのものであったが、遺物量は以外に少なく、小片がほとんどである。弥生土器は比較的少なく、土師器、須恵器が中心となる。須恵器の一部に古い様相を残すものもあるが混入と考えられ、大部分は新しいもので、住居址Aとさほどかわらない時期かそれ以降の時代の様相であると考えられる。

住居址D(29次調査SD02、SD03など)

住居形態	方形ないし隅丸方形
住居規模	3.8m以上×3.18m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴(確定できず)、周溝
重複関係	住居址Aを切る。 (周溝が床面を切る) 住居址B、住居址Cと重複 (切り合い関係不明)

想定時期 古墳時代後期以降



写真4 住居址CおよびD

住居址Dは29次調査北半区において、以降検出作業中にSD02、SD03として検出した。周溝によって

住居址を確認しているため、住居址の壁は検出できなかった。住居址Aの貼り床面を切って本住居址の周溝が巡っていることから、本住居址は住居址Aよりも新しい段階の住居址（古墳時代末以降）であると判断した。住居址の南東側に浅く幅広く掘り込んだ土坑SK02についても本住居址の掘り方である可能性が高い。ただし周溝よりもSK02が広がっており、純粋に重複した遺構である可能性も否定できない。住居址Dの付近においては、ピットが多数検出されているが、確実に住居址に伴うと判断できるものはない。炉址等と考えられる焼上等も検出できなかった。

遺物：住居址が床面に近いレベルで検出されたことから、遺物量は少なく、図示に耐えうる資料はなかった。遺物により住居の時期を判断することは難しいが、新しい段階の住居址であることは、弥生時代中期以降、須臾器に至るまでの小破片が床面に近い部分で検出されていることから想定される。

住居址E

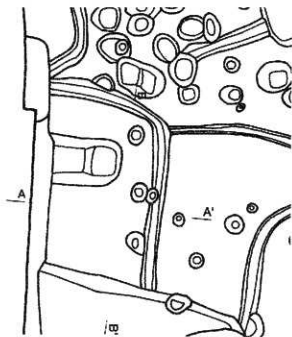
(29次調査SB04, P122, P123, P109など)

住居形態	方形（隅丸方形?）
住居規模	2.0m以上×1.7m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴（P122, P123, P109か?） 周溝
重複関係	住居址Fを切り、Hに切られる （平面プランにより確認） 住居址Cと重複 （切り合い関係不明）
想定時期	弥生時代後期欠土式期

住居址Fは29次調査北半区で住居址Cと同様の面を確認した。北半区では住居址の北東側にあたる一部分のみを調査し、残りの大半の部分は南半区において調査を行った。熱田層を掘り込んでいる部分において住居址の壁の立ち上がりも確認できた。壁に沿って浅い周溝も検出している。住居址の床面では貼り床が認められる(第7図4層)。この住居址の覆土中には焼土が散っており、平面での広がりを掴むことはできなかったが、セクションベルトによる上層の観察で貼り床面上に焼け込んだ箇所が認められた。(第7図3層)。火災住居の可能性もあるが、炭化物などはそれほど多くなく、住居址の覆土を掘り込んだ箇所特に焼土がまとまって認められることから、住居址の埋没過程での燬滅地において、火を用いた作業が行われた可能性も存在する。柱穴らしきピットは調査時にP109, 122, 123と

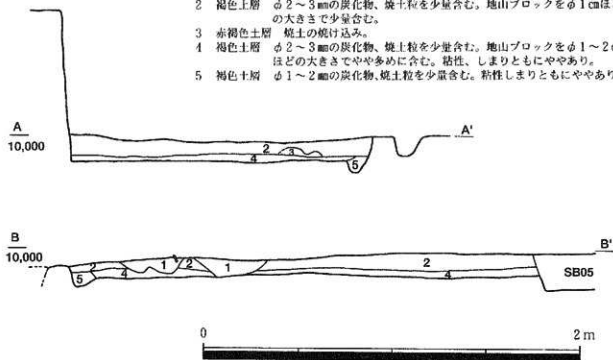


写真5 住居址E



第4図 住居址E

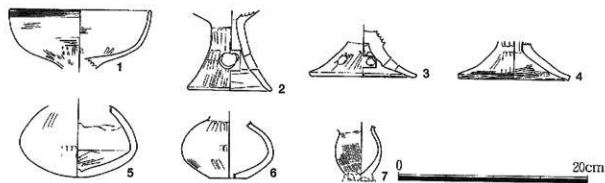
- 1 褐色土層 焼土ブロック、 ϕ 5mm前後の炭化物粒を多量に含む。被熱の因係でカリカリと堅く、粘性弱い。
- 2 褐色土層 ϕ 2~3mmの炭化物、焼土粒を少量含む。地山ブロックを ϕ 1cmほどの大ききで少量含む。
- 3 赤褐色土層 焼土の焼け込み。
- 4 褐色土層 ϕ 2~3mmの炭化物、焼土粒を少量含む。地山ブロックを ϕ 1~2cmほどの大ききでやや多めに含む。粘性、しまりともにややあり。
- 5 褐色土層 ϕ 1~2mmの炭化物、焼土粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。



第5図 住居址E土層図

したものが、住居址東壁の周溝筋に並ぶ。ただしいずれのピットも浅いもので、柱穴であるかは疑わしい。セクションベルトの観察から、検出後の覆土については、攪乱が少ないと判断した。

遺物：さほど多くはないが、床面近くから弥生後期欠山式期の土器がまとまって出土しており、7点を図示した(第8図1~7)。第8図1は椀状の坏部を持つ高坏である。口縁部径で16cmほどを測る。公園直下に五条ほどの浅い沈線列を配する。内外面とも腰の屈曲部付近までは横方向のヘラミガキを施し以下は縦方向のヘラミガキとなる。2から4は高坏の脚部である。2は三カ所に孔を持ち、外面はヘラナデで調整する。内面は横方向のヘラケズリを施している。3は脚部下部が大きく開く高坏で、孔数は6である。外面は荒い縦方向のヘラナデを施す。4は3同様開いた器形の高坏の脚部である。脚の端面が平坦に磨き上げられている。脚部でも上方は縦方向のヘラ磨き、脚部の端面を中心に内外面をそれぞれに横方向のヘラミガキを施している。5、6は直口壺である。口縁部形態は不明である。両者とも外面を縦方向の荒いヘラナデ、内面をヘラケズリしている。5は丸底であるが、内面中央に臍状の突起を持ち、外面より充填して底部を成形していることが考えられる。6は平底でそうした痕跡は認められない。7はミニチュア土器で、台付甕を模倣したものと考えられる。胴部外面は櫛歯状工具により調整されている。台部は剝離しているが、剝離面では指頭による成形痕が明瞭に観察され土器製作者の顔問まで観察できる。住居址Eの土器は多少の時間的な前後の可能性はあるもの、おおよそ欠山期の資料としてとらえて良いであろう。こうした遺物のほとんどが住居址の貼り床面付近より出土しており、土器の遺棄された時期と住居址の廃絶時期は比較的近いと判断した。



第6图 住居址E出土土器

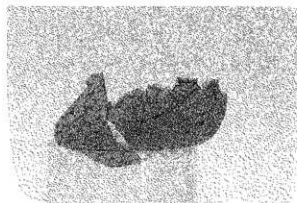


写真6

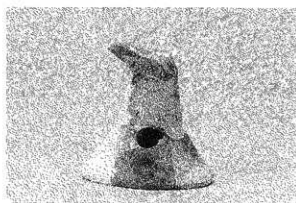


写真7

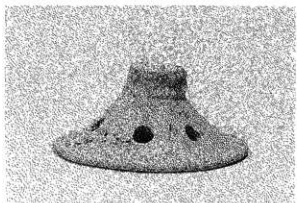


写真8

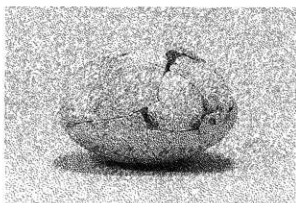


写真9

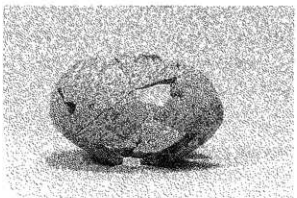


写真10

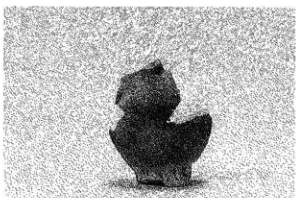


写真11

住居址F (29次調査SB06, SD05など)

住居形態	隅丸方形
住居規模	3.6m (SD05が周溝の場合)以上 ×2.4m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴 (P106?)、周溝
重複関係	住居址E、IIに切られる (貼り床面の広がりから) 住居址Gと重複 (切り合い関係不明)

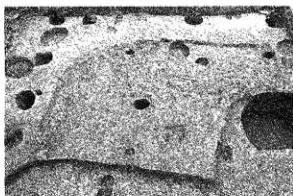


写真12 住居址FおよびG

想定時期 弥生時代後期(欠山式期)以前

住居址Fは29次調査における遺構検出作業中に住居址の周溝と貼り床面を検出した(SB06)。SD05については、レベル的に同一であるが、本住居址の南壁際の周溝である可能性の他に、本住居址もしくは住居址Gにおける住居址内の区画溝である可能性もある。ただし貼り床の状況からは、前者の可能性が高いといえよう。柱穴は規模や位置を考慮するとP106としたピットが対応する可能性が高い。周溝の切り合い関係から、住居址Gを切る可能性もあるが、断定はできない。

遺物：遺物は検出面が低かったことから、小破片のみで量も多くはない。特に図示したものはない。

住居址G (29次調査SB07, SD06など)

住居形態	隅丸方形
住居規模	2.3m以上×2.0m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴(確定できず)、周溝
重複関係	住居址C、住居址F、と重複(切り合い関係不明)、住居址Hに切られる。
想定時期	不明(弥生時代?)

29次調査南平区において、住居址Fとともに検出作業中に周溝を検出、確認した住居址である。部分ごとにSB07とSD05として確認している。床面のみを確認であるが、対応するピットは確定できない。住居址Fほど明瞭に貼り床を確認することはできなかった。28次調査の調査区西壁では、覆土の堆積状況が観察できないことから、あまり大きな住居であるとは考えがたい。先述の通り、SB06としてとらえていた周溝によって本住居址の周溝(SB07)が切られているように観察されたが、ちょうど切り合った部分が小さなピットでさらに切られていることから、平面的なプランによって遺構の前後を判断することは難しい。ただ、明確ではないものの住居址Hに切られており、古墳時代以前の住居址であることは判断されよう。

遺物：住居址Gの覆土として取り上げた遺物はほとんどない。周溝からわずかに遺物が出土しているが、時期判断が可能なほどの遺物量ではない。

住居址H

(29次調査SB05, P116, P117など)

住居形態	方形
住居規模	3.8m×3.0m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴(P116, P117か?)
重複関係	住居址E, 住居址F, 住居址G を切る

想定時期 五世紀前半(松河戸2式段階)

28・29次調査の中で最も遺存状況の良い住居址である。29次調査の南半区で住居址E、F、Gを切って構築されている。東側の住居址が掘り込みが浅いこともあって、床面よりかなり高い面から住居址として調査を進めることができた。住居の壁は残りの良い部分で残存高が30cmほどを測る。住居址覆土は大きく2つに分かれている。まず上層に堆積している土層(第9図1, 2層)で、これは地山土をブロック状に含んだ上層で、1層と2層の区別はその域で行っている。一方下層には地山土をほとんど含まず、黒味の強い土層が認められる。この違いは明瞭に判断され、調査中にもこの上層、下層の違いを意識しながら遺物の取り上げを進めることができた。後述の松河戸式期の遺物は、そのほとんどが下層3層出土であり、3層中には遺物の集中が認められる。また上層層を観察すれば明らかであろうが、下層3層については、南側が厚く堆積していることが明らかである。しかも均質な上層で、遺物の出土状況なども勘案すると、住居址の機能停止後あまり間をおかずに、3層の褐色土によって住居址の整穴が埋まっていることが判断される。1層、2層についてははっきりと言えないが、3層についてのみいえば、土層の観察から南よりの方向から土が流入しているといえよう。南側に土器状の施設や盛土が行われていた可能性も存在するが、住居など掘り込みをとまなう施設の構築に伴って生じた土が、それまでに機能停止をしていた住居址Hの埋め立てに利用されていることも考えられる。住居址Hは今回の検出住居の中でも最も新しい段階に位置づけられる住居址であり、その覆土形成に影響を与える遺構の特定は困難であるが、覆土の堆積状況からは、南側から埋土の供給が多かった、ないしは北側からの供給が少なかったという状況が想定される。

他住居との切り合い関係は、セクション等では明瞭に図れなかったが、検出作業時の平面プラン等の把握状況下から、周辺遺構を切っていることを確認した。

遺物：古墳時代の遺物を中心に、各時期の遺物が混ざって、しかも多量に出土している。しかしながら遺物の大半は小破片で、図示に耐えうるものは限られてくる。図示することができたのは、いずれも下層の3層から出土したもののばかりである。1～4は高坏の坏部である。腰のあたりに襷を有し、緩やかにカーブするもので、いずれも松河戸式期の高坏といえよう。調整はナデを中心としているが、ヘラ状工具によ

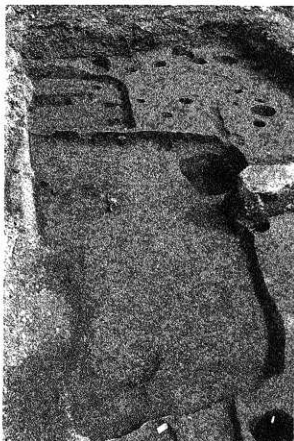
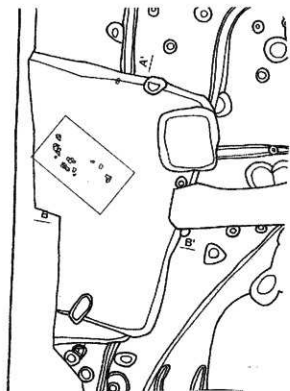
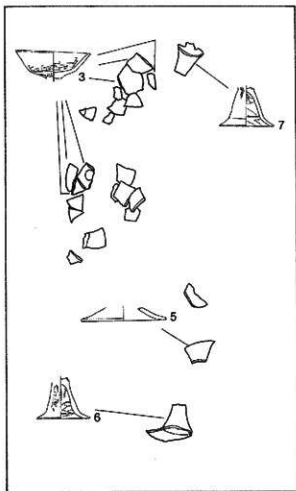


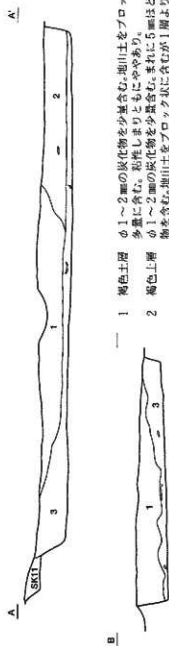
写真13 住居址H



第7図 住居址H平面図



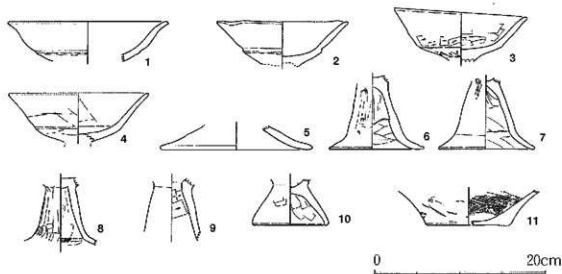
第8図 住居址H床面出土遺物



第9図 住居址H土層図

- 1 褐色土層 約1～2面の炭化物を少量含む。地山土をブロック状に多量に含む。粘性しまりともにややあり。
- 2 褐色土層 約1～2面の炭化物を少量含む。まれに5面ほどの炭化物を含む。地山土をブロック状に含むが1層より小振りである。粘性しまりともにややあり。
- 3 褐色土層 約1～2面の炭化物を少量含む。地山土はほとんど含まない。粘性しまりともにややあり。

リケズリ調整を施すものも認められる。5～9は高環の脚部になる。内面についてはヘラケズリも認められるが、外面はヘラナデ調整が中心である。8については外面調整が明瞭な稜をなし、ミガキに近い調整である。高環の接合方法については、今回観察できた中だけでも3種ほど存在するようであるが、大きな違いは接合面付近の断面形態が三角形のものと同形状のものである。木住居址の床面出土遺物は図示したようにそのほとんどが高環である。高環の比率の上がる時期の遺物であるが、それ考慮に入れても目立った存在である。10は台付甕の台部、11は丁寧な作りの壺らしき器種の底部である。



第10図 住居址H出土土器



写真14 住居址H遺物出土状況

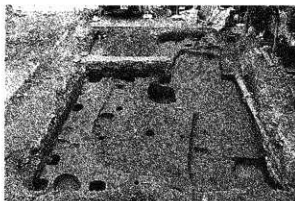


写真15 住居址E～H

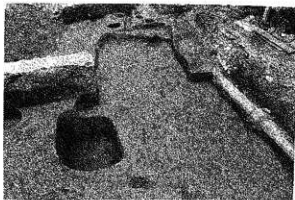


写真16 住居址H完掘

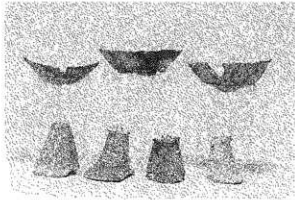


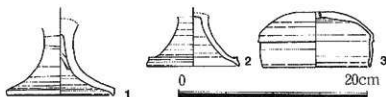
写真17 住居址H出土遺物

住居址Ⅰ（28次調査SB03, SB04など）

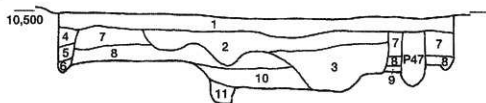
住居形態	不明（方形？）
住居規模	4.0m以上×4.0m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴（確定できず）、周溝
重複関係	住居址Jを切る、住居址Kと重複（切り合い関係不明）
想定時期	古墳時代以降

28次調査の際、遺構検出作業中に確認した住居である。貼り床面に対してSB03、周溝に対してSB04の遺構名を与えていたが、調査区北壁の観察から、同一の住居址であると判断した。同様にSB02については、住居址Ⅰに先行する土坑であると判断した。住居址プランであるが、東端はほぼSB04とした周溝の範囲であることは間違いないが、南側の範囲は確定できない。SD01としている溝が周溝である場合はその周辺までを住居址の床面とできるであろうが、SD01を住居址Kの住居址内の間仕切り溝であることとらえることも可能であり、SB03の浅い掘り込み状の部分の広がり、周溝に面したものであることとらえると、もう少し北側に縮小する。地山十の掘り込みにレベル差はなく、溝の覆土についても峻別する事ができないため、正確な範囲は確定できなかった。

遺物：覆土から取り上げた遺物は少ない。住居址のJを切ることからH-61号窯式段階以降の住居址であることは確実であるが、遺物はより古い段階の状況を呈する。調査後の壁面の確認から下層に至るまで新段



第11図 住居址Ⅰ出土土器



- | | | |
|--|---------|---|
| 1 表土層 | 8 褐色土層 | φ1~2mmの白色礫粒をやや多めに含む。地山土を少量含む。粘性しまりともにややあり。 |
| 2 地山を含む攪乱土 | 9 黄褐色土層 | 地山土を中心とした貼り床上。 |
| 3 地山を含む攪乱土。（2層よりしまりなし） | 10 褐色土層 | φ1mmの白色礫粒を多量に、炭化物粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。 |
| 4 第3図17層に対応 | 11 褐色土層 | φ1mmの白色礫粒を多量に、炭化物粒を少量含む。地山土をブロック状に含み、黄味を帯びる。粘性しまりともにややあり。 |
| 5 第3図18層に対応 | | |
| 6 第3図19層に対応 | | |
| 7 褐色土層 | | |
| φ1~2mmの白色礫粒をやや多めに含む。土器片を少量含む。粘性しまりともにややあり。 | | |

第12図 住居址Ⅰ（28次調査調査区北壁）土層図

階の攪乱を受けていることが判断され、壊された古い段階の遺構の遺物がまともって同住居址の覆土に混入した可能性が高い。1・2は高坏の脚部である。1は褐色がかった焼成でやや背が高い。2は背が低く脚が大きく外側に開く。3は坏蓋であろうが、小振りて背が高い。



写真18



写真19



写真20

住居址J (28次調査SB04など)

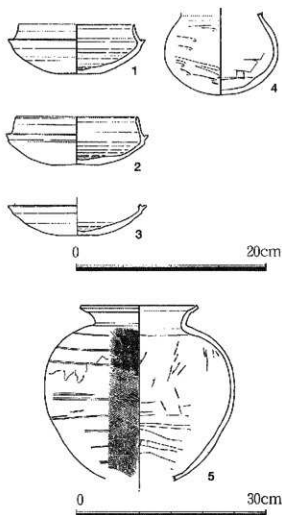
住居形態	不明(方形?)
住居規模	4.0m以上×4.0m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴(確定できず)
重複関係	住居址Iに切られる、住居址Kと重複(切り合い関係不明)
想定時期	古墳時代後期(H-61号窯式段階)

住居址Jは28次調査調査区の北東よりに位置し、調査区の東壁では良好に堆積状況が確認されるが、住居址Iに切られるところから、調査区内に覆土はほとんど残っていないと判断される。はじめSB04を伴う住居址は東側に広がるのではないかと考えていたため、遺物の一部はSB04として取り上げている。この付近では包含層を掘り下げる段階で、調査区の北東よりの地点からほぼ完形の須恵器の高坏が出土しており、これらの遺物も住居址Jの覆土中の遺物と考えられる。平面において確認される住居址内施設は存在しないが、調査区東壁の観察から、住居址の壁の立ち上がりが明瞭にとらえられ、住居址の貼り床面も確認できる。この住居址では住居址施設などは検出されなかったが、遺物の出土状況は特異である。人振りの坏を中心に、完形に近い状態の遺物が、覆土中からまともって出土しているのである。坏が中心であるが、甕(第133号)も認められ、この甕も床面に、口縁部を下にして伏せた状況で出土している。底部を欠損しているものの、残存部の遺存状況は良好であった。関係の土器が床面近くでまともって認められる

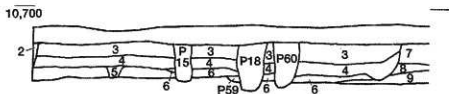
状況は、住居址内の覆土形成過程に廃棄された状況とは明らかに異なった状態である。

この住居址の性格を考える上で不可欠な遺構はSK01である。この遺構は住居址Jのすぐ南に位置する土坑である。詳細はSK02の説明部分で述べさせていただくが、住居址Jと同様にH-61号窯式段階のほぼ完形の須恵器坏がまともに出て上している。このSK01の出土須恵器のほとんどが坏蓋である。一方住居址Jの覆土出土遺物は坏身がほとんどである。こうした状況の意味合いについて簡単に判断は下せないが、先述の甕（第13図5）の頸部付近の破片が1点のみ住居址J上層の覆土から出土し、接合しており、基本的には近い時間を与えられる遺構同士であるが、SK01により新しい時期を与える可能性がある。

遺物：遺物は前述の通り、H-61号窯式段階の須恵器が中心である。1～3は坏身である。4は直口壺であるが、古い段階の混入であろう。5は先述の甕であるが、胴部に沈線が残るものの全面にタタキ痕が認められる。肩の付近まで深緑色の自然釉が認められる。



第13図 住居址J出土土器



- | | |
|---|---|
| <p>1 表土層</p> <p>2 住居址J覆土</p> <p>3 褐色土層 φ1～2mmの礫粒、炭化物粒を少量、ごくまれにφ1～2cmの礫含む。粘性弱いがしまりあり。</p> <p>4 褐色土層 φ1～2mmの礫粒、炭化物粒を少量含む。この上層の下位に須恵器等の遺物を多量に含む。粘性しまりともにややあり。3層より黒み強い土層。</p> <p>5 褐色土層 φ1～2mmの礫粒、炭化物粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。</p> | <p>6 褐色土層 φ1～2mmの礫粒、炭化物粒を少量、ごくまれにφ2～3cmの礫含む。部分的な腐りはあるものの地山土を多量に含み、黄味を帯びる。粘性ややありしまりあり。</p> <p>7 褐色土層 φ1～2mmの礫粒、炭化物粒を少量、ごくまれにφ1～2cmの礫含む。粘性弱いがしまりあり。</p> <p>8 暗黄褐色土層 φ1～2mmの礫粒を少量含む。粘性しまりともにあり。熱田層への前移層か。</p> <p>9 地山熱田層</p> |
|---|---|

第14図 住居址J（28次調査調査区東壁）土層図

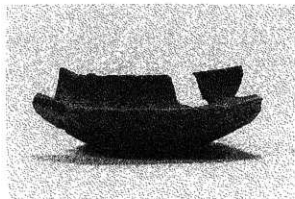


写真21



写真22



写真23

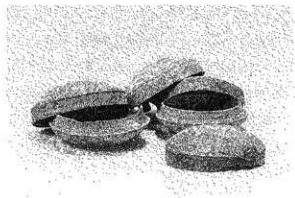


写真24 住居址JおよびSK01周辺出土遺物

住居址K（28次調査SD01，SD05など）

住居形態	方形
住居規模	1.4m以上×2.3m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴（確定できず）、周溝 間仕切り溝？（SD01）
重複関係	住居址Aに切られる、住居址Jと重複（切り合い関係不明）
想定時期	古墳時代

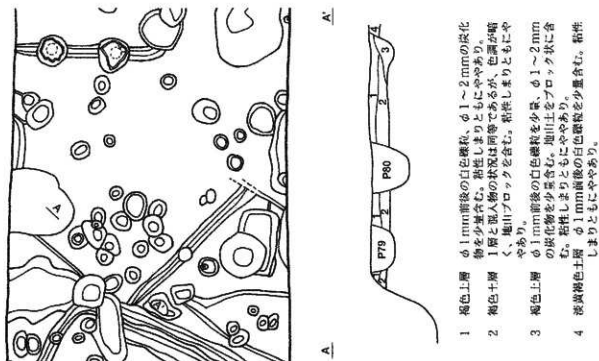
住居址Kは28次調査の北半区において、地山面上面で周溝を確認して住居址として検出した。住居址としての確認したのが床面レベルであったために、覆上として調査でき部分は少ない。周溝の巡り方から方形のプランであることが判断されるが、北側の広がりとはとえられない。その他の施設は認められなない。図中に周溝上に礎が並んで埋設されているが、これはいずれも近代以降の常滑産大甕の底部であり、便槽として用いられたものであろう。ピットは周辺に数多く認められるが、住居址Kに確実に伴うとの判断が可能なピットは存在しない。調査区の西壁の観察から住居址Aに切られていることが判断され、したがって、古墳時代の後期以降の住居址ということになる。

遺物：遺物は先述の通り、住居址としての認定が遅れたため、確実に住居址Kに伴うと判断されるものは少ない。また図示可能な破片は存在しない。

住居址L (28次調査SB06、SB11など)

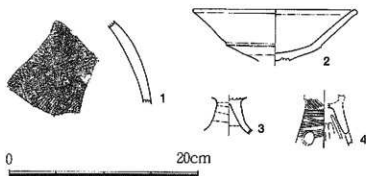
住居形態	不明(方形?)
住居規模	4.0m以上×4.0m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴(確定できず)、周溝
重複関係	住居址Jを切る、住居址Kと重複(切り合い関係不明)
想定時期	古墳時代以降

住居址Lは第28次調査の南北両地区に位置する。北半地区を調査する段階では検出できなかったが、南半区において、SB06として、北西部にプランを確認した。プランを検出した段階で、SB10とした住居(住居址m)に切られていると判断された。住居址Lの東側の部分は比較的地の残りがよく、従って高い面から住居として認定が行われ、覆土についても住居址覆土と意識して調査を進めることができた。住居址北側部分は28次調査でも調査区の北半区に位置するが、住居址Kとの関係からか周溝も含め、住居址の痕跡を検出する事はできなかった。調査の途中、南側部分について一段下がるためSB11としたが、この掘り込みについても住居址Lの貼り床面としてとらえた。遺物については後述のとおり小破片が中心であるが、弥生時代中期末から古墳時代にかけての遺物が取り上げられており、住居址の時期は古墳時代以降と考えている。



第15図 住居址L平面および土層図

遺物：第16図1は須恵器甕の胴部破片、2は欠山式期の高坏の坏部。3は須恵器の高坏脚部、4は山中式から欠山式期にかけての時期の高坏脚部で、襷描文が認められる。



第16図 住居址L出土土器

住居址M（28次調査SB10などか）

住居形態	不明
住居規模	不明
住居回数	1回
付帯施設	柱穴？
重複関係	住居址Lと重複（切り合い関係不明）
想定時期	不明（住居址Mより古い）

28次調査南半区における遺構検出作業中に、住居址L（SB06）に切られる形で検出された住居址プランをSB10とした。調査区東壁の観察からも住居址として確認できたが、これを住居址Mとする。住居址の形態・規模等は明らかではないが、住居址Lの構築時期が古墳時代以降であると考えられるため、住居址Mの所産時期は古墳時代以前としか判断できない。SK05についても貼り床下の掘り込みである可能性がある。

遺物：遺物については量が少なく、図示できるものはなかった。

住居址N（28次調査SB06）

住居形態	不明
住居規模	1.2m以上×1.6m以上
住居回数	1回
付帯施設	柱穴（確定できず）
重複関係	住居址Oに切られる。住居址Kと重複（切り合い関係不明）
想定時期	弥生後期中山中式期？

住居址Nは28次調査南半区の包含層掘削中に遺物集中から存在が想定された。プラン確認後、SB08として調査を進めた。プラン確認時から住居址O（SB07）に切られていることが判断できたが、調査区東壁の観察からもこのことは追認できる。遺物は少なく時期判断の材料は少ないが、住居址Oとの切り合い関係から欠山式期以前と勘案すると、山中式期に比定されよう。周溝は認められないものの、熟土層に掘り込まれた住居址の壁の立ち上がりは容易に判断できる。

遺物：遺物については量が少なく、図示できるものはなかった。

住居址O

(28次調査SB07, SB09, SD02, SD03など)

住居形態	方形
住居規模	4.0m以上×4.0m以上
住居回数	2回 (周溝の重複状況により判断)
	住居址O1(SD03, SB09対応)
	→住居址O2(SD02, SB07対応)

付帯施設 柱穴(確定できず)、周溝

重複関係 住居址Nを切る、住居址Pに切られる、住居址Lと重複(切り合い関係不明)

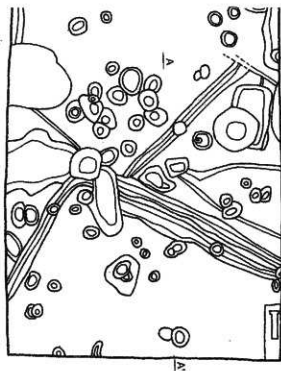
想定時期 弥生時代後期高蔵式期から山中式期

住居址Oは、住居址N同様28次調査南平区における包含層除去の作業中に遺物の集中状況からその存在が想定された。実際には南北ベルトを設定し住居址覆土の掘り下げを進めてゆくなかで、周溝SD02、SD03を検出し、その範囲をSB07として確認した。住居回数は上層の観察から、拡張を伴う新旧2回と判断した。周溝SD03に伴う住居址O1を掘り直し、北側に拡張、床を新たに貼り直しSD02に伴う住居址を構築している。こうした状況が把握された時点で、下層の床面に伴う住居址をSB09としが、ここでは住居址O2としておく。こうした状況は炉址の重複状況にも対応する(第19図)。この住居址の構築から拡張に至る過程は、弥生時代後期高蔵式期から山中式の段階に収まると判断した。住居施設としては先述の通り、2本の周溝を有するほか、南北セクションにかかった部分、調査区の一帯南よりの部分に2面の焼け込みとそれに伴うと思われる掘り込みを確認しており、炉址であると判断した。住居址O2と判断した床面については、もう2カ所住居址床面の焼け込みが認められた。セクション面にかかった炉址の北西側と、調査区の南東隅付近である。同一住居址内に多数の火処が存在するのか、炉址を作り替えているのかの判断はつかない。焼土付近からは焼けた骨角器も出土している。住居址Oは28次調査のなかでは比較的深く掘り込まれた住居址である。

遺物(第20図): 遺物は小破片が多いが、多量に出土している。時期についてはばらつきがあるものの、中心は弥生時代の後期にあるといえよう。1、2は山中式期に位置づけられると考えられる壺の口縁部である。1は口縁部外帯に沈線を巡らし、張り付けを行い、その後内面の口縁部付近にのみ櫛歯状工具による縞杉状の刺突列を巡らして

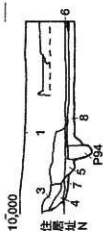


写真25 住居址O



第17図 住居址O平面図

- 1 赤土層
- 2 褐色土層
- 3 褐色土層
- 4 褐色土層
- 5 褐色土層
- 6 褐色土層
- 7 褐色土層
- 8 褐色土層



の1mm前後の白色礫粒を少量、φ2~3mmの礫をごく少量含む。φ1~2mm炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量、φ1~2mm炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。
 3層同様の土層であるが、黒みが強く、炭化物の量が多い。
 の1mm前後の白色礫粒を少量、φ1~2mm炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量含む。上面に地山土が認められる貼り床面。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量含む。地山土をブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量、φ1~2mm炭化物粒をごく少量含む。地山土を少量に含む。粘性しまりともにややあり。

第18図 住居址O土層図 (調査区東側)

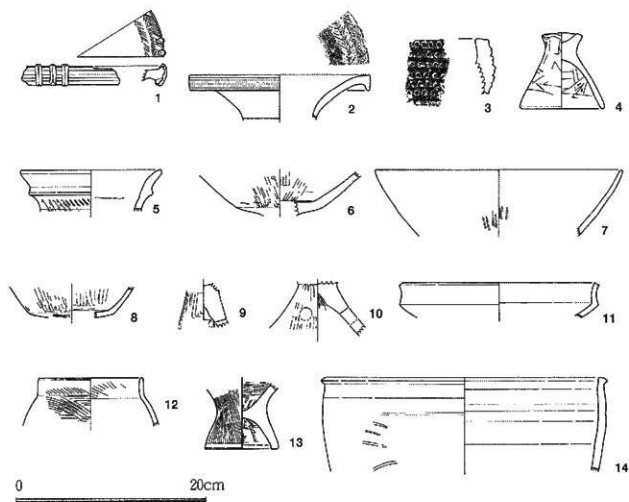


- 1 褐色土層
- 2 褐色土層
- 3 褐色土層
- 4 褐色土層
- 5 褐色土層
- 6 褐色土層
- 7 褐色土層
- 8 褐色土層
- 9 褐色土層
- 10 褐色土層
- 11 褐色土層

の1~2mm炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1~2mm炭化物粒をごく少量含む。地山土を少量、ブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。(1層より厚み大)
 地山土を主体とした土層。
 地山土、焼土ブロックを若干含む。全体の1mm前後の炭化物粒を少量含む。粘性しまりともに弱い。
 の1mm前後の白色礫粒を少量、地山土を少量に含む。粘性しまりともにややあり。(地山土のために風味を帯びる)
 の1mm前後の白色礫粒をごく少量含む。地山土をブロック状に少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒、炭化物粒を少量含む。(7層よりも風味が強い) 粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒、炭化物粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。
 の1mm前後の白色礫粒を少量含む。粘性しまりともにややあり。

第19図 住居址O土層図 (南北セクション)

いる。2については同様の手順を踏んでいると考えられるが、外帯の沈線が回転刷毛目となり、貼り付けも認められない。3は高蔵式期の甕の口縁である。凹線を口縁部に巡らせ、その間に竹管状工具の先をあて、凹形刺突を施している。作りは厚手で、口唇端面は水平に成形されている。4は器種不明であるが、上面に剥離痕等ないことから、ほぼ完形であると判断した。この土器の出土したのが、先述した南北セクションにかかる炉址の上面と下面との間の土層であり、その形状を考えると支脚に類似した性格の遺物であると想定できる。ただし4はそれほど焼け込んだりした痕跡は認められず、断定は出来ない。5は二段口縁の甕で、高蔵期に比定されよう。口縁直下の張り付けの下には、連続の櫛歯状工具による刺突が続く。6～8は欠山式期の高杯の坏部である。内外面ともに丁寧なミガキ痕が観察できる。9、10は高杯の脚部で、同様の調整が認められる。11は山中式期の高杯の坏部であると想定される。口縁部付近で短く外湾気味に直立し、その下は急激にすばまる。口唇端面は平坦で、口唇の外面とともに指でつまみ出されるような格好で成形がされたことが観察できる。12は甕と考えら得るが、荒い櫛歯状工具による調整を施している。13は台付甕の台部で、櫛歯状工具による調整が施されている。台部の端面はヨコナデにより磨り消されている。高蔵式期と山中式期の中間的な段階の資料といえよう。14は須恵器の大型製品である。



第20図 住居址O出土土器

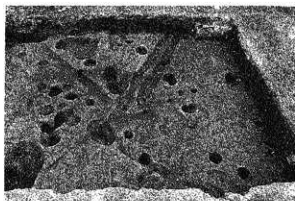


写真26 住居址N、O、P

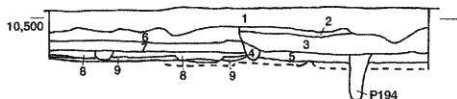


写真27 住居址O付近土層

住居址P（28次調査P85など）

住居形態	不明
住居規模	不明
住居回数	1回
付帯施設	柱穴P85（その他確定できず）、周溝？
重複関係	住居址Oを切る
想定時期	不明（山中式期以降）

住居址Oの覆上を掘り下げる過程で、南西側に地山土を多めに含む範囲を確認していたが、貼り床の地点差と考え掘り下げを進めた。しかしながら住居址Oの覆上を彫り上げた後に、住居址Oを掘り込み新たな住居址を調査区南壁の土層観察により確認した。この住居址を住居址Pとする。住居址Pは土層の観察から先述の地山土を多く含んだ土により貼り床し、周溝を巡らしていることが判断できる。この周溝は、住居址Oの床面（O1の床面）と比較して住居址Pの床面が高いことから平面プランとしての検出は行えなかった。また同じく調査区南壁の観察からP85がこの住居址に伴うことが確認された。



- | | | | |
|--------|--|-------------|--|
| 1 表土層 | | 5 褐色土層 | φ 1mm前後の白色礫粒を少量、炭化物粒をごく少量含む。比較的均質に地山土を含む。粘性しまりともにややあり。 |
| 2 褐色土層 | φ 1mm前後の白色礫粒を少量、炭化物粒をごく少量含む。まれにφ 5cmほどの礫を含む。粘性しまりともにややあり。 | 6 褐色土層 | φ 1mm前後の白色礫粒を少量、φ 1~2mmの炭化物粒をごく少量含む。粘性弱いしまりはややある。 |
| 3 褐色土層 | φ 1mm前後の白色礫粒を少量、φ 1~2mmの炭化物粒をやや多めに含む、粘性しまりともにややあり。 | 7 第19図1層に対応 | |
| 4 褐色土層 | φ 1mm前後の白色礫粒を少量、炭化物粒をごく少量含む。地山土をごく少量ブロック状に含む。粘性しまりともにややあり。 | 8 第19図2層に対応 | |
| | | 9 黄褐色土層 | 地山土の貼り土。 |

第21図 住居址P（調査区南壁）土層図

その他の遺構

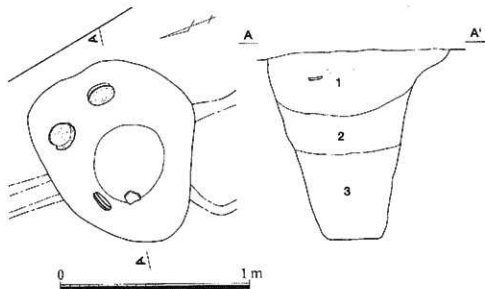
住居址としては確定できたものだけで16軒（18住居回数）になったが、そのほかにも住居址の一部の可能性のある掘り込みが存在し、最終的に何軒の住居址が重複しているのかは確定できない。住居址以外の遺構としてはピットや土坑をかなりの数検出したが、時間的な位置づけや、性格の判断が可能な遺構は少ない。ここではそうした遺構の中から、特徴のあるものを選び、説明することとしたい。なお遺構名は調査時点と同様のものである。

SK01（28次調査）

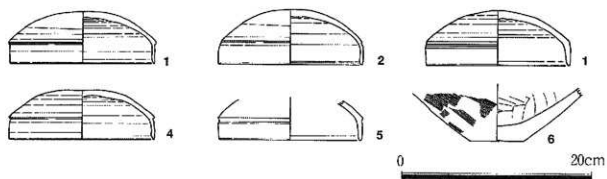
SK01は28次調査の北平区に位置する。熟田層上面で遺構検出作業中にブランを確認している。熟田層を掘り込んでいることもあり、検出、掘り上げともに容易であった。上面ブランはやや不整形で、長径100cm、短径は85cmほどを測るが、土層図からも明らかのように、遺構の肩の部分に崩れた状況にあるようで、実際には、径80cm強の正円形の形状を呈するものと考えられる。地山面からの深さも約100cmほどある。規模、形状とも今回の28・29次調査の中では類を見ない。埋土については、1層は褐色上で小礫の他には混入物が少ない。2層は基本的には1層に類似した土層であるが、細かい地山ブロックを少量含む。3層は褐色上で混入物等は少ないが、やや砂質がかった様子である。

この遺構の性格ははっきりとはわからない。しかしながらかなり立派な掘り込みを持つ点、完形に近く、しかも時期的に近い遺物が覆土中に認められることから、特殊な遺構と考えられる。何らかの柱状の施設に伴うピットである可能性も考えられよう。土層の観察からは柱痕など認められなかったが、柱が立っていたとしても、坏がピットの中央付近にも存在することから、抜き取り後のピットの上面に集中した遺物と考えなければならない。

遺物：遺物は1層中に集中する。遺物としては、ほぼ完形の坏蓋が4点ほど出土している。いずれも口径の大きなもので、H-61号窯式に比定されるものであろう。一部には焼成次に自然釉がかかり、他の製品と釉着した痕跡を残すものもある。



第22図 SK01



第23图 SK01出土土器

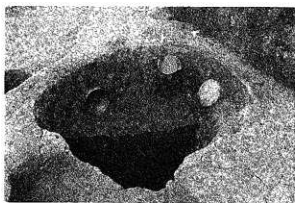


写真28 SK01遺物出土状況

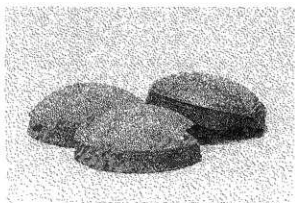


写真29

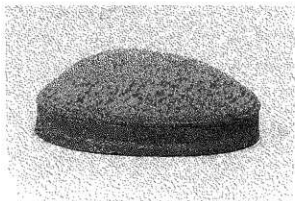


写真30

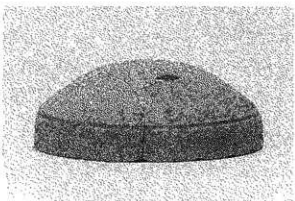


写真31

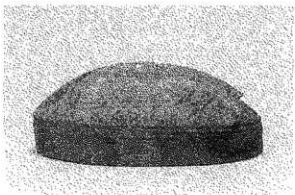


写真32

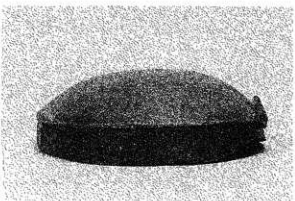
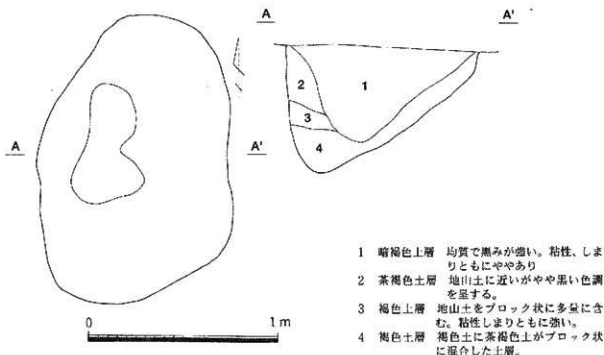


写真33

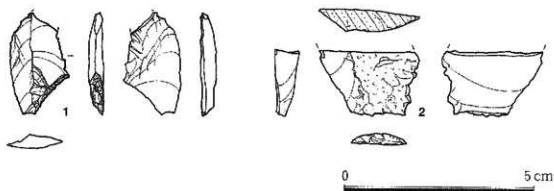
SK02 (28次調査)

SK02は28次調査の調査地点の北半区に位置する。遺構は熱田層の上面で確認した。不整形なプランであり、茶色がかった褐色を呈していたことから、近代以降の攪乱であるかと感じたが、掘削を続けてゆくうちに混入土ではなく、均質な土質であることから遺構であることを判断したが、掘り下げてゆくうちに地山土に掘り込んでいる遺構の壁と遺構埋土が漸移的な変化をしており、遺構自体も不整形な掘り込みとなる。遺構の底部付近まで掘り下げて遺物が出土しないことなどから、風倒木痕の可能性も考えたが、底部付近の4層中より、ナイフ形石器と剥片が出土したことにより古い段階の遺構であることが判断された。このSK02の特徴としては、①不整形な土坑状の遺構であり②覆土の土色がチョコレート色をした茶褐色上で均質、③弥生時代以降の遺物が全く混入せず④熱田層に掘り込んでいるが、壁や底部が漸移的に変化しており、壁面、底面がはっきりしないなどの点が挙げられる。こうした土坑は今回が初めての検出ではなく、見晴台遺跡等でも確認されている。石器が出土することは少ないが、遺構の集中する地点であってもあらゆる遺構に切れ、かつあらゆる遺構を切らない土坑である点から、少なくとも弥生時代以前の遺構であることは以前から考えられていた。今年度の見晴台遺跡発掘調査の際にも同様の遺構が検出されており、土壌分析から、縄文時代の土坑であるとの判断が示されている。今回の高蔵遺跡の28次調査のSK02については縄文時代よりも古い段階の石器が検出されているが、遺構の性格については今後調査事例の蓄積を持って、正確な時期を確定しその後に判断するべきであろう。正確な位置づけは今後の課題としても、このSK02は、熱田台地上に残された数少ない弥生時代以前の生活痕跡であるという点は、間違いないといえよう。

遺物：遺物は2点、いずれも石器であった。1は底部近く4層中より出た。後期旧石器時代のナイフ形石器である。石質は灰黒色のチャートで、素材としては扁平な小型剥片を使用している。ブランディングは剥片の基部付近のみで、打面も大きく除去している。2は淡緑黄色のチャート製剥片である。



第24図 SK02



第25図 SK02出土遺物



写真34 SK02

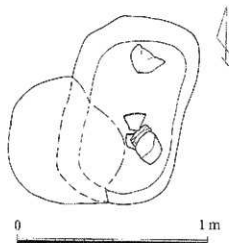


写真35 SK02土層

SK08 (28次調査)

SK08は、28次調査の南半区の遺構検出作業中に、熱田層の上面で確認した。南西部分を擾乱によって切り取られているが、北側を中心に遺物等を検出した。平常はほぼ長方形で主軸は北を向く。長軸が100cm、短軸が60cmほどを測る。覆土は炭化物等を多量に含む土質で、かなり黒みを帯びている。掘り方内からは被熱した破礫と12世紀代の常滑産大甕の破片が出土している。残存壁高は浅いが、本来の壁はかなり深いのではないかと想定される。こうした状況を考えると、このSK08は中世の火葬墓である可能性が高いといえよう。地山は焼け込んでいないことから、どのような行為がなされていたのかは、今後の課題としたい。

遺物等はすべて破礫で比熱していたものが多い。土器は常滑産の大甕で(第27図4)、赤羽一郎氏に実見していただいたが、12世紀第4四半期に位置づけられるもので叩き甕が認められる。



第26図 SK08



写真36 SK08遺物出土状況

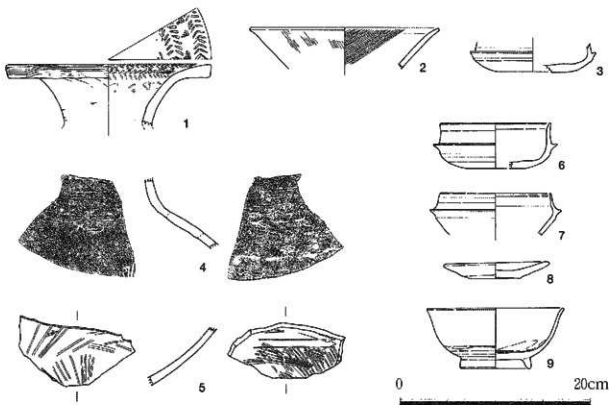


写真37 P102遺物出土状況

P104 (28次調査)

28次調査の南半分で調査を進行途中、住居址Oの脇で確認した遺構である。高裁式から山中式期にかけての弥(第27図1)の口縁部のみを埋設し、上から大型の自然礫を乗せた状態となっている。掘り方は深くないが、首より上の部分がきれいに打ち取られていることと、付近では珍しい大型の自然礫を伴っていることから目を引いた。墓塚の可能性も考えられる遺構であるが、断定はできない。比較的近い時期の住居址が重複する中で、こうした遺構の持つ意味合いを考えてゆく必要があるといえよう。

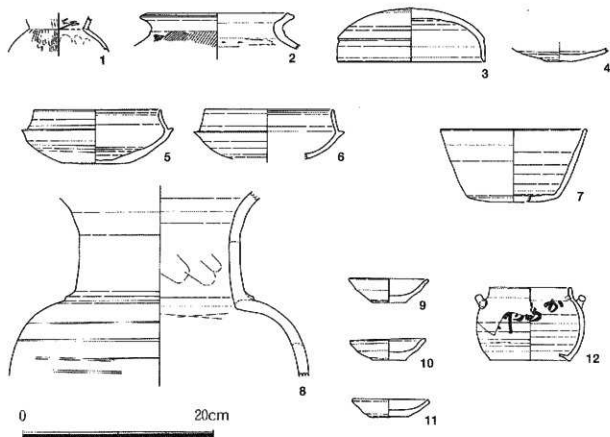
遺物：基本的に大型の自然礫と壺の口縁のみが出土している。礫は砂岩質の自然礫で細長い形状をしている。壺は第27図1に示した。口縁部付近は肥厚せず、端面は櫛歯状工具により施文され、口縁内面には扇状に櫛歯状工具を刺突している。



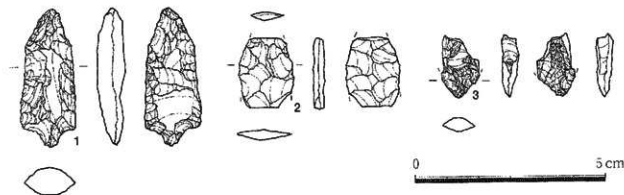
第27図 住居址以外の遺構出土土器

その他の遺物

土器：その他の遺構移行に伴う遺物を第27図に、遺構に伴わない土器を28図に示した。27図の2は調査区P92から出土の高坏の坏部である。3は28次調査SK01、5は28次調査SK04、6は29次調査SK01、7は29次調査SK07からそれぞれ出土している。8、9はいずれも包含層の掘り下げの際に出土したものであるが、9の中に8蓋のようにかぶせられた状況で出土した。8の小皿はやや厚めの器壁で、底部には回転系切り痕が残る。9の大碗はやや薄目の器壁で腰の部分から強く折れ、口縁部付近は緩く外反する。高台は二角

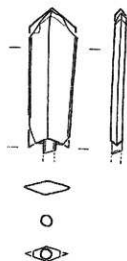


第28図 遺構に伴わない遺物



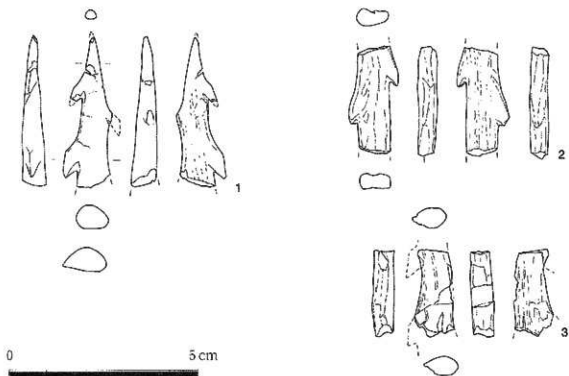
第29図 石器

形に近い形状である。高台内は回転系切り痕をなで消している。軸葉は灰軸で薄く透明度も高い。汲け掛けによる施軸である。窯式でいうところのO-53窯式もしくはそれ以前の様相を表していると考える。8、9は包含層出土であるが、何らかの施設として包含層を囲い込んだ遺構に伴う山茶碗あるといえよう。第28図1はミガキ調整の明瞭な直口壺である。2は字田甕と称される台付甕の口縁部破片である。4については詳細不明であるが、3、5、6ともに須恵器の坏である。3は坏蓋、5、6が坏身である。いずれもH-61号窯式として理解されるものであろう。7は時期は特定できないが須恵器の坏である。8は中世猿投窯の広口瓶である。頸部連結部に突帯を貼り付けており、外面には沈線が弱く巡る。頸部内面には指頭によるナデ痕が残る。12世紀代の所産の製品と考えておきたい。9から11は山茶碗の小皿である。12はいわゆる汽車土瓶で器外面に「かめや〇」とある。おそらくは関西本線の亀山駅で販売された汽車土瓶であろう。第30図 銅鑪
信楽産の製品であろうか。



第30図 銅鑪

石器：石器として確認しているのは、前述のSK02から出土した石器の他に、第29図に図示した3点がある。1は28次調査北半区のP61から出土した弥生時代の石鏃である。下呂石製で厚みがあり重さを感じる。風化は進んでいるが、しっかりとしている。2は下呂石製の石器で住居址Oから出土した。おそらく石鏃ではないかと思われるが、風化が特に進んでいる。薄い作りであること、また風化がかなり進んでいることから縄文時代の石鏃である可能性が高いといえよう。3は石英（水晶）製の石器で、住居址Lから出土した。石鏃などの石器の基部であると考えられる。石英などの石材は弥生時代には用いられることが少な



第31図 鹿角製石先

く、この石器についても縄文時代の所産である可能性が高い。

骨角器：骨角器は住居址Oの付近で集中して出土している。第31図に示した。1はP113から出土した翼状のかえりを持った鹿角製の鋸先である。伊勢湾岸によく認められるタイプの鋸先である。被熱の痕跡があり、表面については多少風化が進むものの、しっかりとしており状態はよい。2、3とも同様の鹿角製の鋸であるが、先端を欠損している。1に比べると風化が進んでいる。

青銅製品：P92より出土した有稜系柳葉脇扶式銅鏃を第30図に示した。青銅製で残りは比較的良い。断面形態は薄い菱形をして、鏃も明瞭である。重量感があり、腐食は進んでいない。ただし一部取り上げ後にブロンズ病が進行した部分も認められ、現在保存処置中である。



写真38 P103銅鏃出土状況

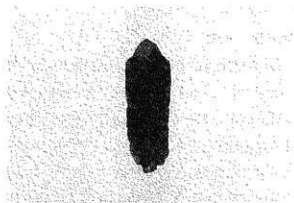


写真39

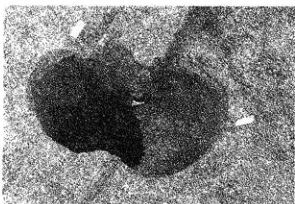


写真40 P113鹿角製鋸先出土状況

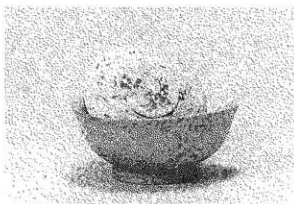


写真41

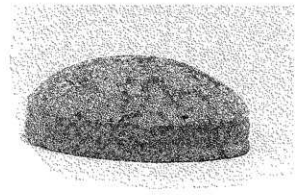


写真42



写真43



写真44

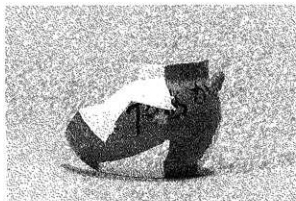


写真45

第4節 小結

今回の高蔵遺跡の調査は、28次調査が60㎡、29次調査が80㎡と2地点併せて140㎡ 足らずの面積ではあったが、激しく重複した形で各時期の遺構が検出された。最も古い段階の遺構としては28次調査SK01が挙げられる。熱田台地上における弥生時代以前の生活痕跡は非常に希薄である。しかしながらSK01のような遺構が存在する。少なくとも後期旧石器のある段階では熱田台地は成立していたことが確認できる。その台地状でどのような生活が営まれていたのかは現在のところその大部分は明らかにはなっていない。今後注意を払いつつ、熱田層内もふまえて残された情報を記録し、蓄積する努力を意識的に図っていく必要があるだろう。弥生時代でも中期以降の生活痕跡は非常に集積された形で確認した。各遺構の時間的な位置づけを行いながら、周辺地点の成果を統合してゆく作業も行わなければならない。また小地点の成果を小地点での成果にとどめない努力が今後重要になってくる。古墳時代より後の時代には居住痕跡はまた希薄となる。今回の調査においても古代松木から中世にかけての居住痕跡は認められない。しかしながら28次調査のSK08や山茶碗の埋設、そして12世紀代の広口瓶など葬送や墓址に関わると感じられる遺物、遺構は検出された。こうした情報をどのように評価し、どう位置づけてゆくかも今後我々の課題となるところであろう。

近年の名古屋市内の発掘調査は、個人住宅の建築に伴って行われる小地点を対象にしたものがほとんどである。今後その成果をまとめ、熱田台地上の人間活動がいかに行われていたかを通史的にみてゆくことが、我々の前に横たわっている大きな課題といえよう。

第5章 第30次発掘調査報告

第1節 調査の経過

第30次調査は、外十居町で個人住宅の建設に伴い実施した。調査地点には2軒の個人住宅が計画されていたが、調査の便宜も考えて一括して調査する事とし、排土の置場の都合から、西側の住宅範囲を前半区、東側を後半区として、二回にわけて行った。

前半区は、2000年10月9日に開始した。天候にも恵まれ、10月19日には調査を終了し、埋め戻しをすることができた。後半区は、土量が多く、途中で土が置き切れなくなったため、更に半分に分割して調査せざるを得なかった。また、後半区は雨も多く、調査区の壁が崩れる等して、記録が作成できなかった部分が生じたのは遺憾であった。そうした状況ではあったが、11月2日にすべての現地作業を終了した。

その後、見晴台考古資料館で遺構図面、遺物の整理作業を行った。遺物については、口径あるいは底径が復元できるものを中心に図化した。

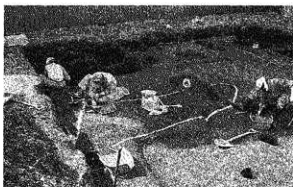


写真1 調査風景

第2節 基本層序(第1図)

前半の東半区は、表土及び盛土の下位には灰黄褐色の砂質土が堆積し、その下はすぐ橙色の粘質地山土であった。東半区では、弥生時代遺構の遺物包含層と思われる黒褐色土はほとんど見られなかった。一方、後半の西半区は、表土の下に、東半区と同様な灰褐色土が堆積し、その下位には黒褐色土が厚く残存していた。この黒褐色土は、含まれる砂粒の量により分層することができた。包含層からの出土遺物は、弥生時代から中世までのものが見られる。断面図には分層した結果を記しているが、包含層掘削時には、土の識別が困難であったため、その分層した層位毎には遺物は採集することができず、層位と遺物の時期の対応はできなかった。

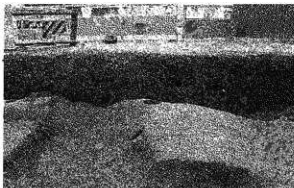


写真2 西半調査区南壁断面

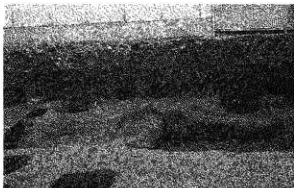
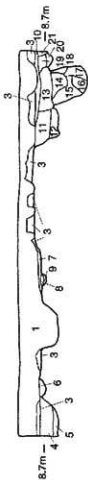


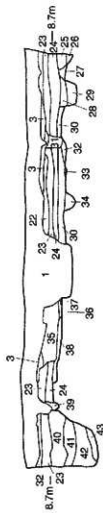
写真3 東半調査区東壁断面

西半調査区西壁



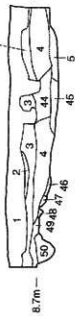
1. 調査区西壁西端
2. 調査区西壁西端
3. 調査区西壁西端
4. 調査区西壁西端
5. 調査区西壁西端
6. 調査区西壁西端
7. 調査区西壁西端
8. 調査区西壁西端
9. 調査区西壁西端
10. 調査区西壁西端
11. 調査区西壁西端
12. 調査区西壁西端
13. 調査区西壁西端
14. 調査区西壁西端
15. 調査区西壁西端
16. 調査区西壁西端
17. 調査区西壁西端
18. 調査区西壁西端

東半調査区東壁



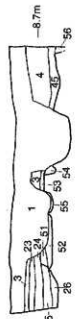
1. 調査区東壁東端
2. 調査区東壁東端
3. 調査区東壁東端
4. 調査区東壁東端
5. 調査区東壁東端
6. 調査区東壁東端
7. 調査区東壁東端
8. 調査区東壁東端
9. 調査区東壁東端
10. 調査区東壁東端
11. 調査区東壁東端
12. 調査区東壁東端
13. 調査区東壁東端
14. 調査区東壁東端
15. 調査区東壁東端
16. 調査区東壁東端
17. 調査区東壁東端
18. 調査区東壁東端
19. 調査区東壁東端
20. 調査区東壁東端
21. 調査区東壁東端
22. 調査区東壁東端
23. 調査区東壁東端
24. 調査区東壁東端
25. 調査区東壁東端
26. 調査区東壁東端
27. 調査区東壁東端
28. 調査区東壁東端
29. 調査区東壁東端
30. 調査区東壁東端
31. 調査区東壁東端
32. 調査区東壁東端
33. 調査区東壁東端
34. 調査区東壁東端
35. 調査区東壁東端
36. 調査区東壁東端
37. 調査区東壁東端

西半調査区南壁



44. 調査区南壁西端
45. 調査区南壁西端
46. 調査区南壁西端
47. 調査区南壁西端
48. 調査区南壁西端
49. 調査区南壁西端
50. 調査区南壁西端

東半調査区南壁



51. 調査区南壁東端
52. 調査区南壁東端
53. 調査区南壁東端
54. 調査区南壁東端
55. 調査区南壁東端
56. 調査区南壁東端

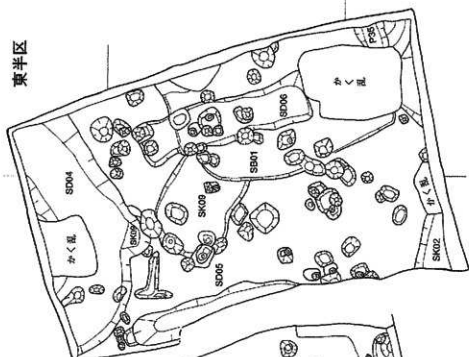
第1図 調査区壁面断面図

0 4m

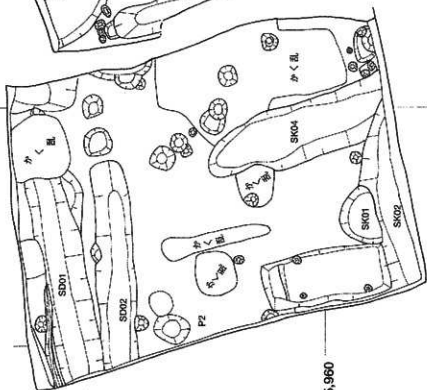


Y=-23,530

東半区



5 m



西半区

Y=-23,535

X=-95,965

X=-95,960

第2図 病舎区平面図

第3節 遺構と遺物

弥生時代の溝4条、古代の堅穴住居らしい遺構1基、中世の上坑等を検出した。また、調査区全域で、小穴100基程を検出した。調査時には、溝状の遺構にはSK、土坑にはSK、住居にはSB、小穴にはPを冠した番号を、検出順に与えた。その後の掘削の結果、遺構とはみなせないものもあり、欠番が生じているが、本書では調査時の遺構番号を踏襲している。また、小穴は、出土遺物がないものが多く、時期を決め難いものが多かった。時期の特定できた遺構を中心に、時代順に報告する。

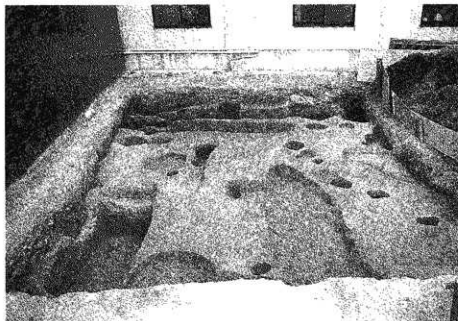


写真4
西半区全景

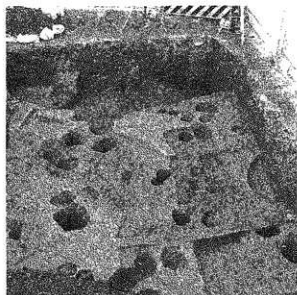


写真5 東半区北部全景

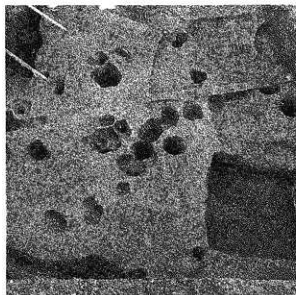


写真6 東半区南部全景

弥生時代

SD01・02 (第3図)

前半区の北部で検出した。この2条の溝は、共に東西方向に伸びており調査区の西端付近では重なっている。切り合いは、SD02→01と判断した。SD01は、1m程の幅で、深さは、検出面から0.9～1m程ある。部分的にオーバーハングしている。N-78° - Eという方向を示す。西側は調査区外に伸びており、東は攪乱に切られているが、攪乱の東側にはつながっていかず、攪乱の範囲内で収束していたようである。埋土は、暗褐色～黒褐色上であり、地山上の混じる量や、砂粒の含み具合から大きく4層に分層した。出土遺物は、何れも小片ばかりで、この溝の埋没に伴って埋まったものが多いと思われる。時期がわかる土器片では、弥生時代中期の櫛描文系の上器片と凹線文系の上器片が共に見られる。これらの土器片は、先に述べたような事情から、遺構の時期を直接には示さないが、埋土中の遺物ではこれより新しいものは見られないため、中期末葉までには埋まっていたと考えて良いだろう。

SD02は、幅0.8m程で、深さは検出面から0.6m程で、SD01やや規模が小さい。方向は、N-84° - Eで、ほぼ東西方向である。SD01とは僅かに方向を異にするのみである。西側は調査区外に続いているが、東端は調査区内で収束している。溝が途切れる位置はSD01とあまりかわらないように思われる。埋土は、灰褐色から黒褐色を呈しており、砂粒の量などから3層に分層した。

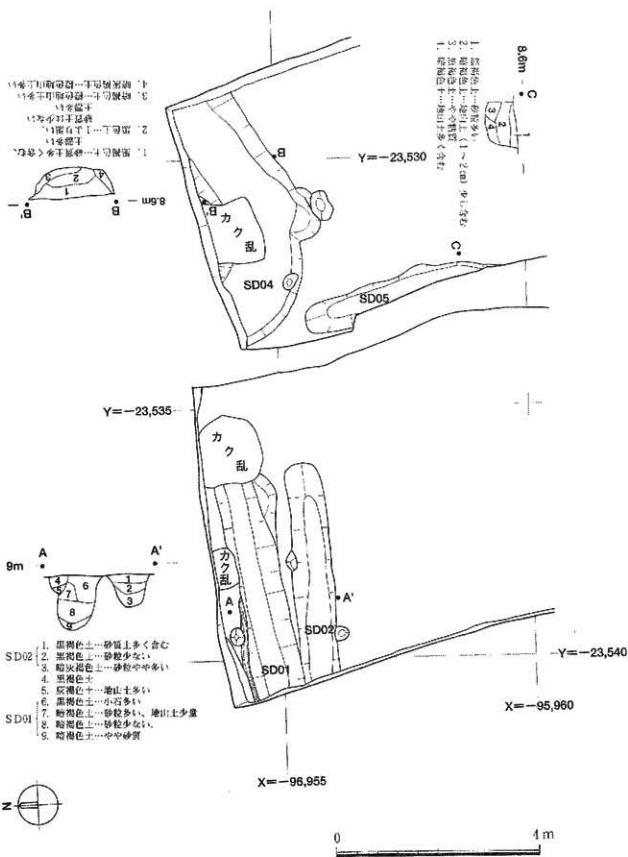
出土遺物は、何れも小片が少量出土したのみで、時期の特定できるものはほとんどなかった。僅かに、弥生時代中期頃かとも思われる破片がある。また、こちらも小片であるが、縄文土器の破片が2点出土している。1点は区画内に縄文を施したのも、もう1点は区画内に沈線文を施したのも、何れも後期前半頃のものである。SD02についても、出土遺物から時期を特定するのは困難であるが、僅かな土器片からではあるが、弥生時代中期頃には埋まっていたものと推測する。

SD05 (第3図)

東半区の西端で検出した。前述したとおり、雨によって調査区の壁が崩れる等したため、一部記録が作成できず遺憾であった。記録が取れた範囲では、幅0.8mほど、深さは検出した面から0.6m程度であった。後半区の北壁から1.5m程のところから始まり、壁が崩壊する以前の所見では、後半区南端の中世の遺構SK02に切られていたから、少なくとも6mほどは検出した。方向は、N-17° - Wである。

出土遺物は、第6図1の、櫛描文系の細頸壺がある。図化した部分についてはほぼ全体が残っている。口縁端部は情報に突出し、口縁端部の外側に面をなしている。肩の部分には、櫛描の直線文が巡っている。これ以外は、小破片ばかりであったが、凹線文系の壺胴部破片等も見られる。弥生時代中期後葉までには埋まっていたと考える。

ところで、このSD05は、位置関係から見てSD01ないしは02と共に方形周溝墓を構成する可能性が高い。時期は、何れの溝にも決定するだけの材料はないが、すべて弥生時代中期後葉以前であり、時期からは特定できない。溝の断面の形状等から判断すると、SD01はやや深く、更に部分的にオーバーハングするような断面形をしているから、SD05はSD02に類似している。一方、方向から判断すると、SD01とSD05はほぼ直交するような方向を示している。ここでは、何れとも判断しかねるが、SD01,02のどちらかとSD05で、コーナー部分の途切れる方形周溝墓を形成していたとしておく。



第3図 弥生時代の溝 (1:75)



写真7
SD01 (右)・SD02 (左)

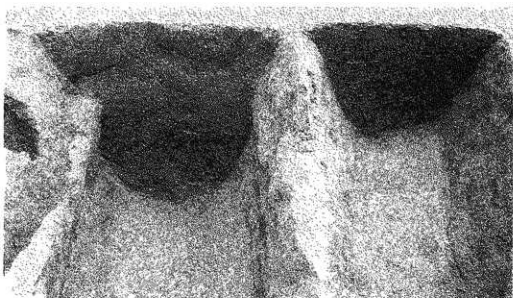


写真8
SD01 (左)
SD02 (右) 断面

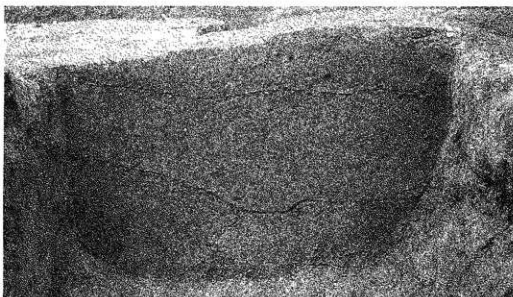


写真9
SD05断面
(第3図C点
北から)

SD04 (第3図)

後半の調査区の北端で、ほぼ直角に屈折している。内側の肩が検出できた地点がないため、幅は1.6m以上としか言えない。深さは、東壁付近では検出面から0.6m程であるが、コーナー部ではやや浅くなっており、0.3m程となっているが、途切れてはいない。埋土は、溝の両側の壁付近には地山土を多く含む暗褐色土が堆積し、溝の中央では、上位に黒褐色土、下位には黒色土が堆積していた。この両層には、弥生土器の破片が極めて多く含まれていた。

遺物は、何れも破片であり、全体の半分以上が残っているような固体は見られなかった。そのため、この溝に本来属するものと確実にいえる遺物はない。第6図には、その内比較的遺存度の高いものを図化した。2は、いわゆるパレススタイル壺である。図化部の1/4程度が残っている。口縁部は上半部分が僅かに内湾しているだけで、椀や段は見られない。内湾している部分には櫛による羽状刺突があり、下半は赤彩が施されている。口縁部外面から胴部の最上位も赤彩されている。口縁部外面端部直下には段があり、沈線状を呈している。胴部は、直線文が4段あり、その間に3段の櫛歯刺突が施されている。口縁部の形態は、パレススタイル壺の中でも後出的なように見える。しかし、胴部の文様は、直線文と櫛による斜位の刺突文である。後出的な口縁形態をもつもので、胴部に櫛の斜位刺突文のものは知られておらず〔浅井1986〕、時間的な位置付けは難しい。3は、壺の底部である。図の1/4程度が残る。突出しない平底で、底部外面及び胴部外面が赤彩されている。

4は甕である。図化部については8割程度残っている。口縁部はやや短く、内湾気味である。端部は丸く、刺突などは施されていない。外面は口縁部から緩く屈曲して胴部にいたる。内面は、胴部のヘラケズリが比較的高い位置まで施されているせいか、はっきりと屈折している。胴部外面はほとんど彫らみのない器形で、左上がりのハケメで調整されている。5は、低脚の甕であろう。図の半分程度が依存している。脚部は、ヨコナデは施されておらず、あまり整っていない。6、7は台付甕の台部である。何れも図の半分程度が残っている。端部は、共に外側に面をもっている。

8は右後高杯の杯部である。図の1/4程度が残る。口縁部は、上半が僅かに内湾しているが、下半は

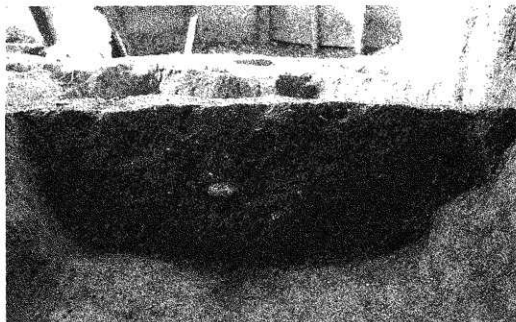


写真10
SD04断面
(第3図B-B'
東から)

むしろ外半している。11縁端部は四角く、外傾する面を持っている。杯の口縁部と底部の境は、僅かに下方に突出している。口縁部外面は縦方向にヘラミガキが施されている。口縁部及び底部との境にはヨコナデの痕跡が見られるが、ヘラミガキの後に行われているようである。9は、高杯の杯部と脚部の接合部である。脚部の内面には横方向に板状工具による調整が行われている。10は法量の小さな高杯の脚部である。図の2/3が残っているが、端部は1/4弱しか残っていない。外反する脚部で、端部は僅かに上方に突出しているが、丸い。四方向に円形の透孔が穿たれる。外面は縦方向にヘラミガキ、内面は下半にヨコナデの痕跡が残り、上位には部分的にヘラによる調整の痕跡が残っている。



写真11 S D04遺物出土状況

11は直口壺の胴部である。図化部全存。偏平な器形である。外面は、下半は横方向にヘラミガキ、上位は縦方向にヘラミガキを行っている。内面は観察し難いが、底部付近に板状工具によるナデ付けの痕跡が集中している。僅かに残る頸部の内面には、横方向のハケメが為され、部分的にナデによって消されている。

12は器台である。11は、口縁部の破片で、図の1/4が残る。口縁の端部には、しっかりした面を形成し、下方に突出している。外面は縦方向にヘラミガキ、内面は摩滅のため不明。

これらの土器は、先に述べたように、出土状況からは同時であるとは言えない土器群であるが、2のパレストスタイル壺の時期の特定が難しいが、弥生時代後期後半1[村木1999]頃のものを中心としている。このほかの、図化できなかった破片の中には、比較的短い高杯脚部や深い杯部の破片等もあるから、遺物の時期としては後期後半2頃までのものを含むものとしておきたい。

S D04は、溝の形状から見て、方形溝墳のコーナー部分である可能性が高く、時期は特定し難いが、弥生時代後期後半2以前である。

古墳時代

S B01 (第4図)

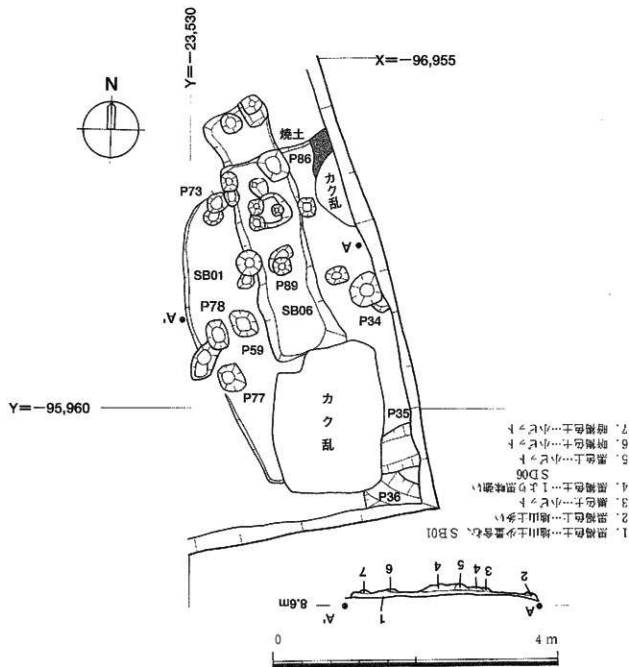
後半調査区の中央部東壁際で検出した。検出できたのは住居の西側半分のみで、東側は調査区外へ続いている。埋土は極めて浅く、プランが検出できないところもあった。種々の遺構や塚に切られており、規模も不明瞭ではあるが、南北方向はおおよそ4.5m程である。埋土は黒褐色土であり、0.05~0.1mほどしか残っていなかった。東半区東壁の断面図では、36、37、30層等がS B01の埋土に相当すると思われる。北側の壁面に接して、焼土を認めたが、調査区外へ続いている事もあって、形状等はよくわからない。

この住居の埋土からは、土師器の甕3点(第6図)と須恵器蓋杯、須恵器壺胴部が出土した。土師器の甕は、口縁部の破片であるが、何れも図の1/4程度が残る。口縁部は強く外反し、端部は丸い。13の外面はヘラケズリが施されている。

須恵器の杯蓋は、図の1/8しか残っていないが、復元した口径は、14.8cmである。口縁の端部には浅い

沈線が一条巡っている。杯身は、1/4が残っている。口径は12.7cm。口縁端部には、一条の沈線が巡っている。これらの須恵器の形状は、尾野氏がⅢ期古段階の基準資料とするH-61号窯の遺物に類似している【尾野1997】。

SB01の範囲内では多くのビッドを検出したが、ほとんどのビッドからは時期が特定できるような遺物の出上はなかった。P78からは、土師器甕(21)、須恵器杯身(22)、甕(23)が出土している。土師器の甕は、接合できなかった破片も含めると、図化部の半分程が残っている。頸部のしまりはほとんどなく、胴部から緩く屈曲して口縁部に至る。口縁の端部は丸い。胴部外面は、磨滅により調整は不明である。22の杯身は、図化部の1/4程が残っている。口径は、9.8cmほどに復元できた。外面受け部直下ははっきりと段をなしている。立ち上がりはやや短く、端部は丸く終わっている。23の甕は図の1/5程度しか残っていない



第4図 SB01

い。胴部からはっきり屈折して口縁部に至る。外面口縁端部直下は、突帯状を呈し、段をなしている。須恵器の杯身は、尾野氏がIV期古段階とするH-50号窯の出土遺物に類似しており、SB01とは明らかに時期が異なっており、SB01に伴うものであるとは言えないだろう。

また、SB01のプランとしては把握できなかったが、検出できたプランの延長上で、P35を検出した。埋土中からは、土師器壺脚部（第6図21）、須恵器杯蓋（22）等が出上している。土師器脚部は、僅かしか残っていないが、やや低脚で内湾する。須恵器の杯身は、全体の1/3以上が残っており、口径15.9cm、器高4.7cmをはかる。口縁の端部は明瞭に段をなしている。H61号窯の遺物に類似している。断面を検討した際は、P35がSB01を切って築かれていると判断したが、遺物からは時期差は認めにくい。それ以外のピットについては、SB01との関連は判断できない。

SB01の床面で、浅い溝状の遺構SD06を検出した。幅1m程で、検出した長さは3.5m程である。SB01に先行することは確かであるが、この遺構の時期は不明である。

P2

前半調査区北西部で検出した。一部を攪乱に切られているが、直径0.6mを計り、深さは0.7m程ある。埋土は、黒褐色土であった。埋土中から、土製紡錘車（第6図25）と須恵器の甕（同24）が出上している。紡錘車は、ほぼ全体が残っており、底部の径が7.2cmほど、高さが4.2cmほどである。須恵器の甕は、口縁部は1/8程度しか残っていない。口径18.5cmほどである。時期の特定は困難であるが、甕の形状等から見て古墳時代の遺構ではないかと思われる。

中世

SK01（第5図）

前半調査区南西隅で検出した。直径0.7m程の円形の土坑である。埋土は、上半に地山土を多く含む褐色土、下半には、焼土粒を含む灰褐色土が堆積していた。中世の遺構であるSK02に切られている。埋土中からは、15世紀代と思われる陶器の小片が出上しており、中世の遺構と判断している。

SK02（第5図）

前半調査区及び後半調査区の南端で検出した。褐色の均質な砂質土を埋土としている。途中、未調査部分があるが、埋土の特徴から同一遺構と見て間違いないと思われる。その検出した長さは7m以上に及び、大きな遺構である。調査では、その端の部分を検出しただけであり、形状等は不明である。埋土中から、山茶碗や中世の陶器が出上している。

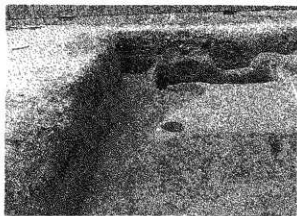
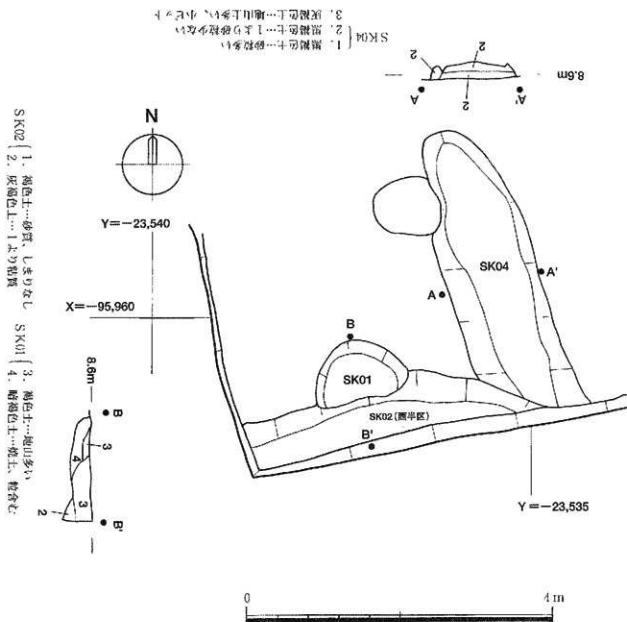


写真12 SK01・02（西半区）

中世の陶器の中には、16世紀代のももあり、この時期以降に埋まった遺構である。



第5図 SK01・02・04

時期不明の遺構

SK04 (第5図)

前半調査区の南端で検出した。幅1.2m、深さ0.2m程である。土坑として番号を与えているが、検出した長さ4mで、更に南は調査区外へと続くから溝状の遺構と考えてもよいかもしれない。南端は、中世の遺構SK02に切られている。方向は、N-20°-Wである。埋土は、黒褐色土で、上位には砂粒を多く含んでいた。

埋土中から出土した遺物は、何れも図化できない程度の小破片ばかりで、確實にこの遺構に伴うものと言えるものはない。その中では、弥生時代中期の上器片が目立つ。方向が、弥生時代中期の溝SD05と近いだけに、興味深いが、時期は決定できない。

SK07

SD04を切って掘られた、直径0.8m程度の円形の土坑である。検出面からの深さは0.5m程である。黒

味の強い黒褐色土を埋土としている。古墳時代の須恵器、十師器等の破片が出土しており、古墳時代のものである可能性が高いが、確実にこの遺構に伴う遺物とは言えないため、時期は古墳時代以降と考えるにすぎない。

SK09

S B01の北西隅と重なる短辺1.5m程の方形の上坑である。黒褐色土を埋土としていたが、極めて薄く、S B01との切り合いは判断できなかった。この土坑内には、焼土の塊が見られた。出土遺物は、弥生土器の小片が中心であるが、須恵器の破片も僅かに含まれている。時期は不明といわざるを得ない。



写真13 SK09内焼土

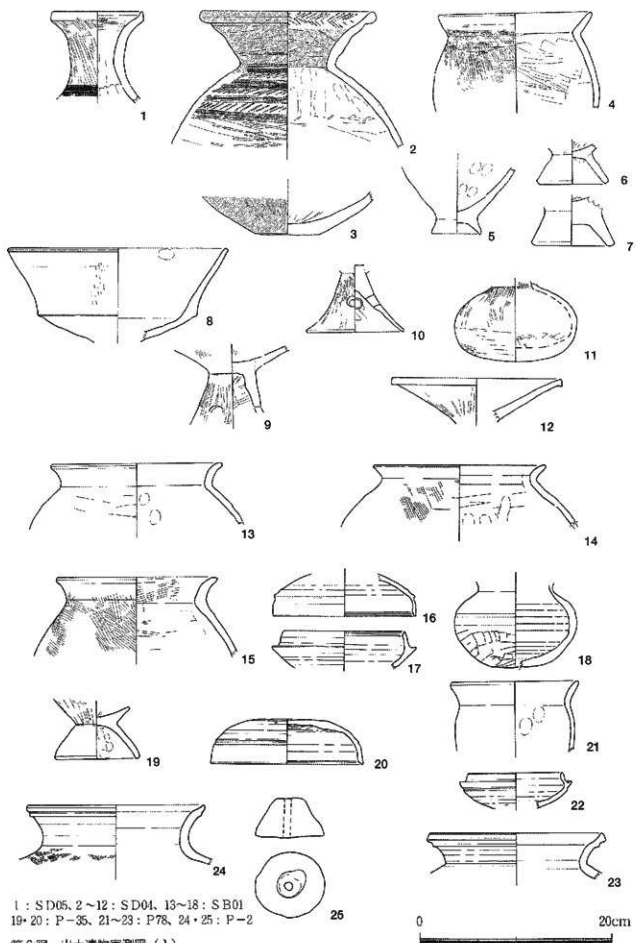
包含層等出土の遺物（第7図）

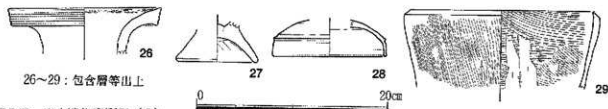
表十掘削中や包含層掘削中に出土した遺物は銅片が多く、図化できたものは多くない。26は弥生土器蓋の口縁部。図の1/4程が残る。単純に外反する口縁で、口縁外側の面には凹線あるいは直線文が3条見られる。口縁の内面にはヘラまたは鏝による羽状刺突が施されている。27は台付壺台部。台天井部はあるいは下備から粘土を充填したのか、上に半球状に突出している。28は須恵器杯蓋。図の1/4程が残っている。口径は11.8cmに復元できた。29は須恵器の甌の口縁部であろうか。内外面共にハケメによって調整されている。

第4節 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後葉以前1基、後期後半2以前1基の方形周溝墓を検出した。更にもう1条、中期後葉以前のもとの重なりを持つ方形周溝墓らしい溝を検出しており、今回の調査区は方形周溝墓が群在している地点の可能性が高い。30次調査地点付近では、北西の地点で5次調査を実施しているが、ここでも弥生時代中期の遺物が出土する溝と、後期の遺物が出土する溝がそれぞれ1条検出されている。検出されたのはごく僅かであるが、特に後期の溝についてはバレススタイル壺の出十等から方形周溝墓の可能性が指摘されている【野口1994】。今回の調査地点の間には少し距離があるが、30次調査区における周溝墓の密度の高さを考えると、台地の東側の縁辺部にあたるこのあたりに、中期から後期の方形周溝墓群が営まれている可能性もあろう。高蔵遺跡では、例えば五木松町での調査【荒木1986、87、91】のように、方形周溝墓が群在している地点も見つかっており、そうした群があっても不思議ではない。五木松町では、中期後葉から古墳時代にかけての方形周溝墓、方墳が一部に溝を重ねつつ連結と営まれており、今回の調査地点での溝の重なりも同じ状況を示しているのかもしれない。

高蔵遺跡では、各調査地点で弥生時代の方形周溝墓が報告されているが、中期後葉以降のものばかりで、今回のようにそれ以前に比定できるものはほとんどない。そのため、今回のような、コーナー部分が切れる形態が中期後葉以前に一般的なものか否か良く分からないが、存在することは明らかとなったわけであ





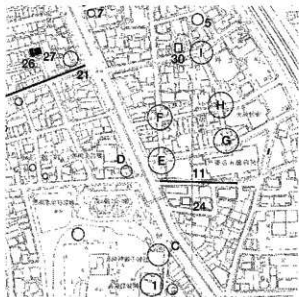
第7図 出土遺物実測図(2)

るから、今まで見つかった中期の溝などを検討してみる必要も生じてきた。例えば、24次調査で見つかったSK07も、溝状の遺構のようであり、周溝墓の一边である可能性も出てきたわけである。これも遺物の出土が少ないが、中期以前と評価している。今後の調査に待つと共に、既にわかっている遺構や遺物を再検討しなければならない。

ところで、今回の調査区のすぐ東側は、田中稔氏が報告する〔田中1954〕1地点にあたる。〔地点では中期、後期の土器を出土する「V形ピット」が報告されている。この「ピット」については、性格はわからないが、〔村木1998〕に引用させて頂いた通り、石黒立人氏は、これを環濠として弥生時代後期の環濠集落範囲を想定している。とすれば、今回の調査地点はその集落の範囲内となる。今回の周溝墓が、環濠集落期にその内部に営まれたのか、あるいは環濠が機能していない時期のものなのかによって、集落像は随分異なったものとなろう。田中氏の採集した資料の再検討など、こちらについても既にある資料の再検討を行っていかねばならない。

古墳時代の竪穴住居については、最近の台地東縁部の調査で徐々に調査例が増えている。遺存状態の良くないものも多く、遺構の比較検討は困難であるが、時期毎の遺構の動向等は幾らかは検討できるだろう。また、27次調査などで報告した通り、大津通を挟んだ西側で多く見つかった古墳の動向などと合わせて考えてみることも必要であろう。

課題を述べるだけになってしまったが、高蔵遺跡の全体が調査されることが有り得ない以上、小規模な調査や過去の資料をつなぎ合わせて、高蔵遺跡像を復元する試みを始めていきたいと思う。



第8図 高蔵遺跡東半の調査地点 (1:5000)

数字は市教育委調査次数

C～Iは田中稔氏によるC～I地点



写真14 弥生土器 (SD05)



写真15 弥生土器 (SD04)



写真16 弥生土器 (SD04)



写真17 弥生土器 (SD04)



写真18 弥生土器 (SD04)



写真19 土師器 (SB01)



写真20 須恵器 (SB01)

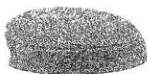
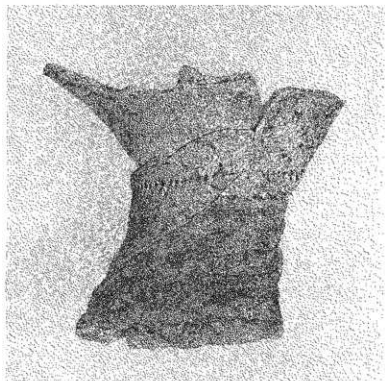


写真21 須恵器 (P35)



写真22 紡錘車 (P2)

玉ノ井遺跡第2次発掘調査



S D01-N出土物生土餅

例言

- 1 本編は、玉ノ井遺跡第2次発掘調査の報告である。
- 2 調査地点は、名古屋市熱田区玉の井1-21地内のうち、面積約50㎡である。
- 3 調査期間は、平成12年10月23日から11月10日までである。
- 4 調査は、個人住宅建設に伴うもので、土地所有者の協力を得て、名古屋市教育委員会の事業として実施した。調整事務は、教育委員会文化財保護室学芸員 竹内宇哲、現場作業は、名古屋市見晴台考古資料館学芸員 伊藤厚史、水野裕之が担当した。
- 5 排土工事は、(有)角田造園が工事請負で実施した。
- 6 基準点測量等は、(株)ジーアイエス中部に委託した。
- 7 出土遺物、記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 8 本編は、伊藤厚史のほか当資料館職員の協力を得て、水野が執筆した。

特に出土品については、伊藤正人、村木誠、藤井康隆、小浦美生の各氏の助力を得た。

目次

- | | |
|---------|----|
| 1 遺跡の概要 | 87 |
| 2 調査の経過 | 88 |
| 3 遺構と遺物 | 88 |
| 4 小結 | 99 |

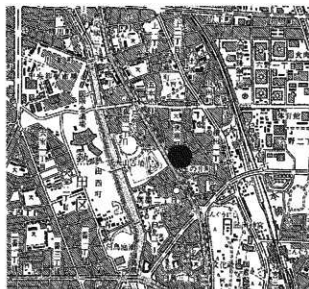


図1 遺跡位置図 (S=1/25,000)

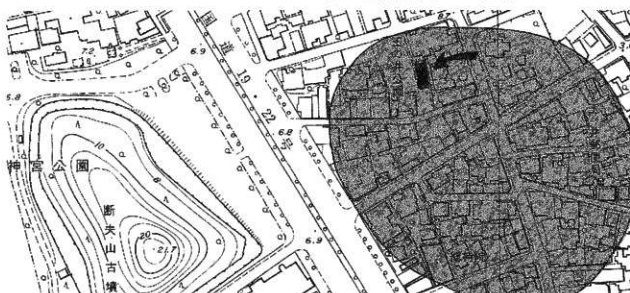


図2 調査地点位置図 (S=1/2,500)

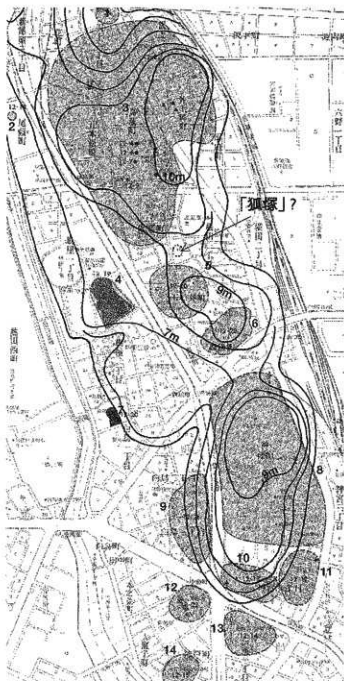
1 遺跡の概要

玉ノ井遺跡は、名古屋市の都心部から南方に細長く続く熱田台地に立地している。遺跡の現況は、古くからの住宅街となっていて土の露出している部分は、ほとんど無い状況である。調査地点付近の標高は、8.3mほどであるが、この台地の東側では標高が高く、西側は低くなっている。これは、この熱田台地が、熱田層という第四紀の水成層から成り、数万年前以降に熱田層の堆積物が陸地化する過程で、波食台を形成していったためと思われる。江戸時代に整備された堀川を境に、西側の沖積低地の地下にもこの熱田層の波食台が埋没していることが知られている。

熱田台地では、縄文時代や弥生時代以降、ある時期には海岸線が台地縁の近くにきていたと思われ、該期の貝層が周辺の遺跡からも検出されている。

また、当遺跡は北に高蔵遺跡、西に断夫山古墳、南に熱田神宮（埋蔵文化財包蔵地でもある）、白鳥古墳という当地方では著名な遺跡に囲まれたその中間地帯に位置している。しかし、これまでは縄文時代晩期や弥生時代後期の採集資料等が、断片的に知られていた〔伊藤他1993〕ものの、本市による発掘調査は、平成6年（1994）に遺跡範圍（およそ径200mと推定）の南端近くの地点で、約300㎡を行なったのみであった〔竹内他1995〕。このときは、古代（7～8世紀頃）に埋った狐を描く溝の一部や、中世陶器（15世紀頃）などが出土したクランク状に屈曲する溝の一部が検出された。他に、古墳時代の須恵器や埴輪片も出土しており、付近に古墳の存在をうかがわせている。

なお、今回の発掘調査地点は、遺跡範圍の北側にあたる。



- | | | |
|---------|----------|--------------|
| 1 熱田村城 | 5 玉ノ井遺跡 | 9 熱田-C遺跡 |
| 2 花ノ木古墳 | 6 表後町遺跡 | 10 熱田神宮南門前貝塚 |
| 3 高蔵遺跡 | 7 白鳥古墳 | 11 新宮坂貝塚 |
| 4 断夫山古墳 | 8 熱田神宮遺跡 | 12 熱田-D遺跡 |
| | | 13 熱田-B遺跡 |
| | | 14 御新調短跡 |

図3 周辺の遺跡と地形 (S=1/12,500)

2 調査の経過

当地では、既設の建物を取り壊し、住宅を建築するという計画に伴い調整はかられた結果、事前の発掘調査として行なったものである。調査対象は、建物の基礎部分であり、これを調査区(約50mf)とした。

工程は、平成12年10月23日～31日の間に表土除去、掘削、検出等の作業を行ない。11月1日～6日までに平面図、断面図を作成し、写真撮影を行なった。そして、11月7、8日には、埋め戻し等を行ない現場作業を終了した。

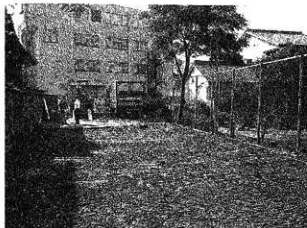


写真1 調査前状況



写真2 遺構掘削後の状況

3 遺構と遺物

調査区付近は、ほぼ平坦な地表面が広がっている。基本的な層序は、GLから15～40cmまでは表土層で、近現代の攪乱土や整地土である。その下に10～40cmほどの層厚で、灰褐色土および黒褐色土の包含層が黄褐色の熟田層(地山)の上に堆積している。

調査区内での地山面は、北側で標高が高く、南側は低くなっていて、遺構は主にこの地山面で検出された。調査区の関係で一部分だけの検出がほとんどであったが、各遺構の残存状態は比較的良好で、溝状遺構(SD)が4条、竪穴住居跡(SB)1軒、土坑(SK)1基、ピット(P)17基を検出した。全体の遺物の量は、コンテナケース3箱分であった。



写真3 SD01-Nと土器出土状況



写真4 SD01-Sと調査区東壁

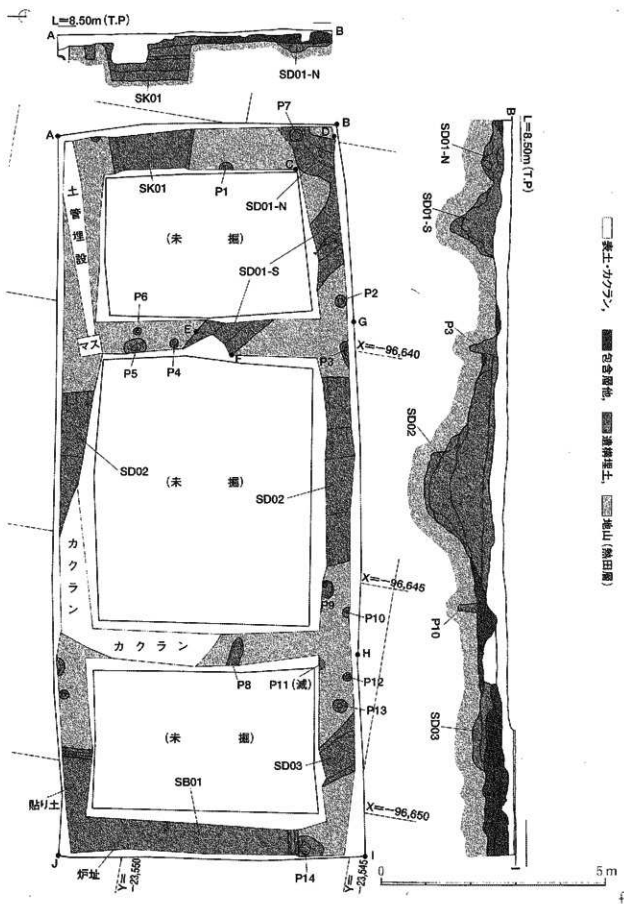


図4 調査区平面図および調査区土層断面図

●SD01-N

調査区北東隅の地山面で検出された。当初は、南側に接するSD01-Sとは一連の遺構と考えていたものが、その後の出土遺物や上層断面の観察からSD01-Sより古い時期の別の遺構とした。検出部分は、断面形が浅いU字状の溝状遺構の一部分と思われ、南東から北西へ続くようである。遺物は、破砕片（弥生時代中期後葉、高蔵期）が埋土上位から出土した。

遺構の規模や形状が不明であるが、方形周溝墓の可能性を示している。

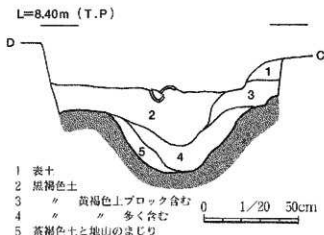


図5 SD01-N埋土断面



写真5 SD01-N埋土断面

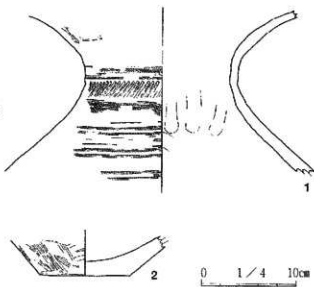


図6 SD01-N出土遺物

●SD01-S

調査区北東部の地山面で検出された幅1m、深さ0.8mほどの溝状遺構である。断面形は、逆台形状で底の幅は、約0.4mでほぼ平坦である。溝の方向は、南西から北東へほぼ直線状に伸びるが、両端とも調査区外に続いているため、全体の形状や規模は不明である。埋土中からは、小破片ながら比較的多くの土器片が出土した。時期的には、弥生時代後期後半1[村木1999]頃のものである。埋土は、検出範囲のうちでは自然な堆積状況を示し、急に埋めたり掘り直したような状況は認められなかった。また、埋土上位は、付

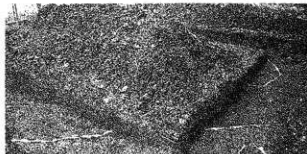


写真6 SD01-S検出状況

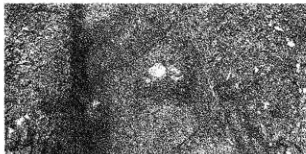
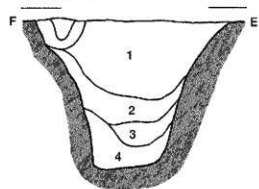


写真7 SD01-S遺物出土状況

近の地山面上に堆積する黒褐色土（包含層）との区別がつかず、当遺構が半分あまり埋った後、包含層の土と共に堆積していると考えられた。今回検出された土器片類も同じ頃のものと思われる。

当遺構は、今回の調査区内では確定することが難しいが、環濠または、周溝墓の一部と思われる。

L=7.8m (T.P)



- 1 黒褐色土
- 2 # 黄褐色土山ブロック含む
- 3 # " (やや砂質)
- 4 # (砂質)

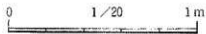


写真8 SD01-S土層断面

図7 SD01-S埋土断面

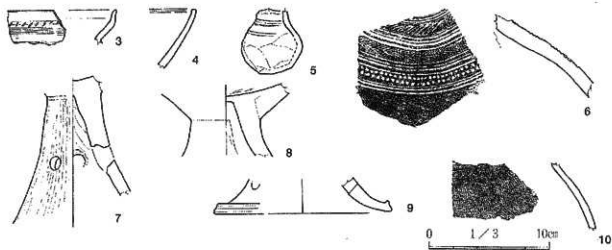


図8 SD01-S出土遺物

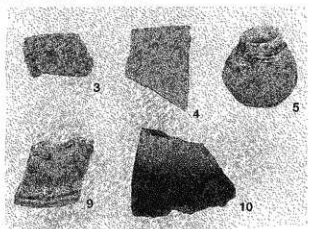


写真9 SD01-S出土遺物

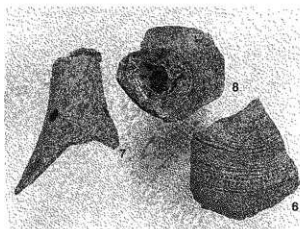


写真10 SD01-S出土遺物

●SD02

調査区のほぼ中央で、東西方向に検出された幅4mあまり、深さ1.3mほどの溝状遺構である。断面形をみると上半部では、緩い傾斜であるが、下半部ではやや急な壁の傾斜となり、断面がU字状となる。埋土は、上下とも暗褐色土を基本とするが、上半部は均質で、下半部では黄褐色の地山ブロックを多く含み、違いがみられる。出土遺物からも、埋土上半では、灰釉陶器、緑釉陶器片のほか、須恵器片などが検出され、下半部では弥生時代後期前半Ⅰ(山中式)頃の土器片で占められていた。

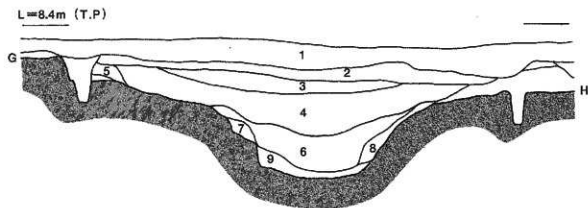
今回の調査部分ではこれらの状況から、下半部の形状や埋った時期は、本来環濠として構築されたものが、弥生時代以来の状態で保存されていたと思われる。そして、上半部分では、平安時代頃にも溝状になっていたことを示し、溝の幅など、形状が弥生時代以来のかたちであるかは不明である。



写真11 SD02掘削状況



写真12 SD02埋土断面



L=8.4m (T.P)

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 表土、カクラン土 (灰褐色砂質土) | 6 暗褐色土と地山土のまじり土 |
| 2 暗褐色土、やや砂質 (中世陶片含む) | 7 暗褐色土、地山Br. 含む |
| 3 暗褐色土、均質 (灰釉陶器片含む) | 8 暗褐色砂質土、地山Br. 多く含む |
| 4 " 黒味つよい (緑釉陶器片含む) | 9 暗褐色砂質土 |
| 5 " 地山Br. 含む | |

0 1/50 2m

図9 SD02埋土断面

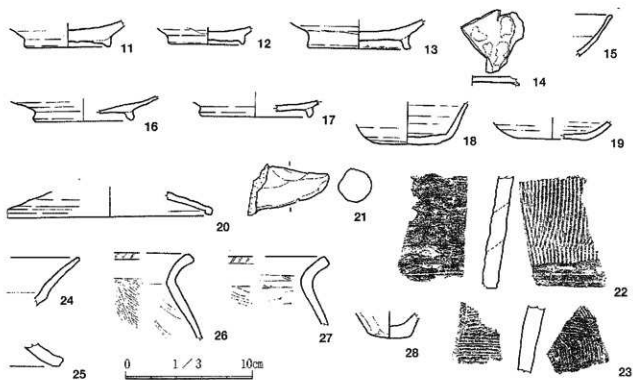


図10 SD02出土遺物

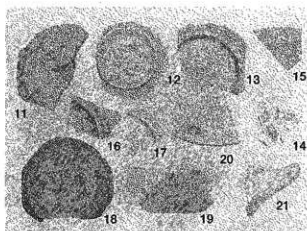


写真13 SD02出土遺物（灰釉陶器、須恵器など）

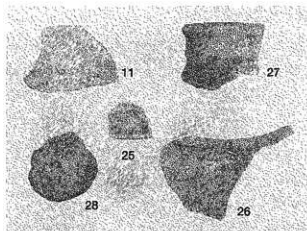


写真14 SD02出土遺物（弥生土器）

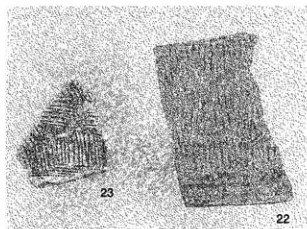


写真15 SD02出土遺物（埴輪片・外面）

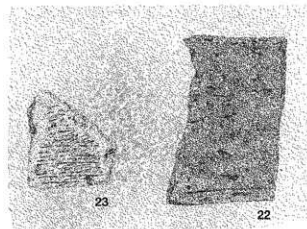


写真16 SD02出土遺物（埴輪片・内面）

●SD03

当遺構も地山面で検出された。埋土の遺物として弥生土器細片と山茶碗片が検出されているが、十層断面の観察や埋土の特徴からは、中世より古い時期の遺構と判断されたため、ここでは遺構の時期を保留する。

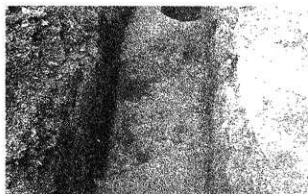


写真17 SD03

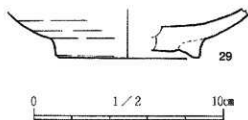


図11 SD03出土遺物



写真18 SD03出土遺物

●SB01

調査区の南端部で検出された竪穴住居跡である。平面形が方形ないし長方形を呈すると思われる東壁と北壁の一部と、その内側床面を検出した。地山を掘り込んだ壁の高さは、40cmほどあり、熟田台地上で検出される竪穴住居跡のなかでは、遺存状態が良好である。当遺構の検出部分からは東西方向に5.5m以上、南北に3.0m以上の規模が推定され、地床炉が一箇所検出された。なお、柱穴が検出されていないのは、コーナー付近が未掘部分となっているためかと思われる。検出した床面のうち西側では、地山を15~20cmくらい掘り下げて、黄橙色地山土と黒褐色土のブロック土の混じり土で埋めてある状況であり、この面に地床炉がつくられていた。他の部分では、地山面を床としている。壁溝は明瞭に検出され、東壁部では、壁材を固定するかのように壁溝部にもみブロック土が観察できた。住居埋土中の遺物は少なかったが、床面直上で、弥生時代後期後半1〔村木1999〕頃と思われる高坏、直口壺、台付甕片が検出された。



写真19 SB01北壁部分



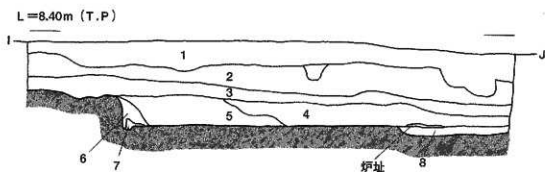
写真20 SB01土器出土状況



写真21 SB01炉址



写真22 SB01住居実壁付近埋土



- 1 表土、カクラン土（灰褐色砂質土）
- 2 灰褐色土、やや砂質（中世陶片含む）
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土、黄褐色地山ブロックを少し含む
- 5 “ “ “ 非常に多く含む
- 6 “ “ 黒味つよく均質

- 7 黄褐色土と黒褐色土のまじり土
- 8 “ “ （貼り土部分）

0 1/50 2m

図12 SB01埋土断面（調査区南壁土層図）

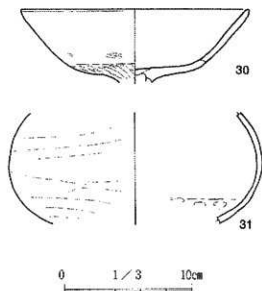


図13 SB01出土遺物（床面検出）

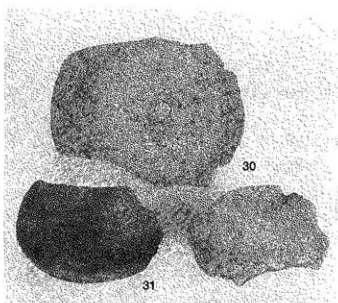


写真23 SB01出土遺物

●SK01

調査区の北端部で検出された直方体状を呈する土坑の一部と思われる。埋土は、黄色土や褐色土のブロック上によって重層的に埋められている状態であった。出土遺物は無かったが、形状や土層の状況から近世～近代の地下室（穴蔵）を埋めたものと推定している。ごみ穴として転用されることなく、丁寧に埋めてある状況は、類例の少ないものである。かつては、当地の東側に隣接する「威徳院」の敷地内にあったと思われる施設に伴うものかもしれない。



写真24 SK01

●ピット

ピット（小穴）は、調査区内で17基検出した。調査区の制約もあって、各ピットの関連や他の遺構との関係が説明できるかは不明であった。ピットは、時期の特定が明確にできないものが多いが、P1、2、3、7、14は、深さや形状からみて柱穴と考えられるものであり、それぞれの埋土からは、弥生時代後期後半頃の土器片が出土している。

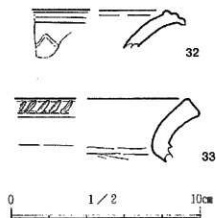


図14 P7出土遺物

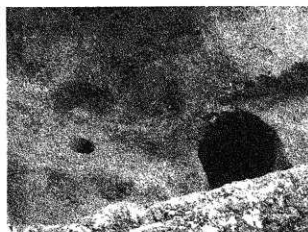


写真25 P7

●その他（縄文時代の遺物など）

玉ノ井遺跡では、1990年に工事の際、縄文時代晩期の土器片や石器が、貝殻を含む包含層から採集されている例などが知られていた【伊藤他1993】。1次調査地点でも晩期の条痕文系の土器片が少量であるが検出されている。

今回の調査では、弥生時代以降の各遺構埋土に混入する状況で縄文土器片が検出された。いずれも5cm以下の小破片であるが、調査区全体で40点ほど検出された。これらの土器片は、口縁部や施文部の破片が少なく、詳細は不明ながら、晩期の深鉢や鉢の破片が大半であると思われる。石器については、晩期の土器に伴うものとしても妥当と考えられるが、確定できない。

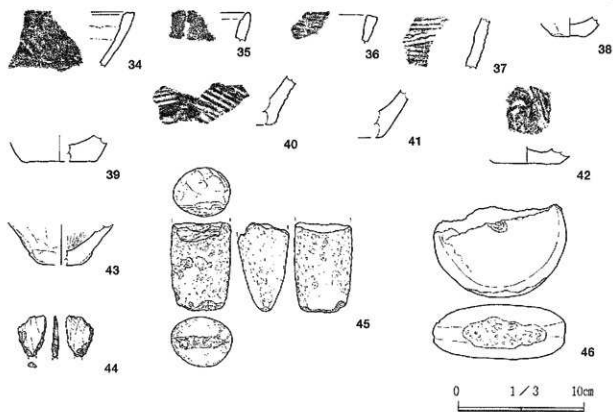


図15 縄文土器片と石器

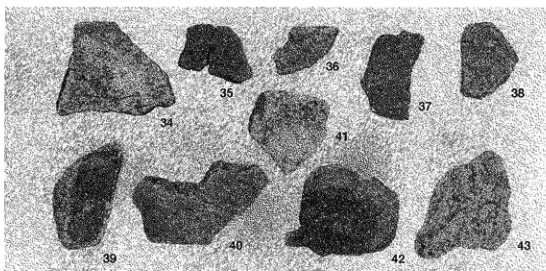


写真26 縄文土器片

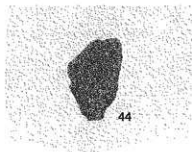


写真27 石雫

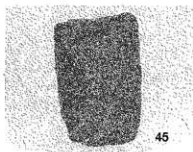


写真28 磨製石斧

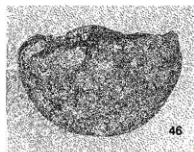


写真29 敲石

表1 玉ノ井遺跡出土遺物(図示資料)一覧表

番号	種類	器種	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	SD01-N	頸部片、櫛描文、刺突文
2	"	壺	SD01-N? (上位層)	底部片
3	"	台付甕	SD01-S	受口状口縁
4	"	高 环	"	
5	"	壺	"	ミニチュア土器
6	"	"	"	赤彩、貝殻腹縁などによる刺突文
7	"	高 环	"	
8	"	"	"	
9	"	高 环	" (下位層)	脚端部、赤彩
10	"	台付甕	" (下位層)	
11	灰釉陶器	碗	SD02 (上位層)	底部外面回転系切
12	"	"	" "	
13	"	"	" "	
14	緑釉陶器	碗(皿?)	" "	
15	灰釉陶器	碗	" "	
16	"	碗(皿?)	" "	底部外面回転ナデ
17	"	"	" "	底部外面回転ケズリ
18	須恵器	环	" "	
19	"	"	" "	
20	灰釉陶器	蓋	" "	
21	須恵器	瓶(把子)	" "	
22	埴 輪		" "	外面タテハケ、内面回転ナデ、底部内外面回転ケズリ
23	"		" "	外面タテハケ後回転ヨコハケ、内面回転ヨコハケ
24	弥生土器	高 环	SD02 (下位層)	
25	"	"	" "	
26	"	台付甕	" "	
27	"	"	" "	
28	"	壺	" "	赤彩、小型
29	山茶碗	碗	SD03	
30	弥生土器	高 环	S B01床面直上	
31	"	直口壺	"	
32	"	高 环	P7	
33	"	台付甕	"	

34	縄文土器	鉢	調査区南畷	
35	〃	深鉢	SD02下位層	
36	〃	〃	SB01	
37	〃	〃	SD02	
38	〃		SB01	底部片
39	〃		SD01	〃
40	〃	深鉢	調査区南東検出	〃
41	〃		SD01	〃
42	〃		SD02	〃
43	〃	深鉢	SD01下位層	〃
44	石器	石錐	SD02	先端部古い折損面、石質は下呂石
45	〃	磨製石斧	〃	敲打製、刃部付近研磨、石質は流紋岩か
46	〃	敲石	〃	平面中央に凹み有り、石質は石英虎岩か

4 小結

当調査地点の主な遺構に伴った遺物は、弥生時代中期と後期の時期のものであったが、他の遺物としては、縄文時代晩期の土器片、竈窯焼成の埴輪片、古代の須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器片、そして、中世の山茶碗および幕末頃の陶器片が検出された。当遺跡では、場所によっては各時期の遺構の存在をうかがわせている。

調査区北端部の遺構（SD01-N）は、検出遺構のなかでは最も古い弥生時代中期末頃（高蔵期）の臺が出た。ついで後期前半（山中期）から後期後半（廻間期）の初め頃にかけての環濠かと思われる溝（SD01-S、SD02）や竪穴住居跡（SB01）が、当地点での主要な活動期の痕跡を示す。SD01-Nは、検出部分のごくわずかで、遺構の性格が不明確であるが、方形周溝墓の溝の可能性も残されるであろう。また、SD01-S、02、03も、今回の調査部分だけでは、遺構の時期を決定し難いが、SB01は、これらの溝と同じか、その少し後に造られたものと思われる。この竪穴住居跡は、調査地点の南端で検出されたが、居住域はさらに南方にあると思われ、現在の遺跡範囲の中心が概ね該期の集落にあたっているのではないかと思われる。

当遺跡と高蔵遺跡との関係では、これまで高蔵遺跡の弥生時代後期の周溝墓が、遺跡範囲の南西部に多く検出されており、居住域は遺跡の東側にあたると推定されていたのであるが、近年の調査成果からは、高蔵遺跡範囲の北東端部にも中期、後期の方形周溝墓が検出されてきている（5次、30次）。このように、時期的な遺跡の拡大、縮小、移動があったと思われ、北方に位置する高蔵遺跡のなかに、当遺構群もその南部分として吸収すべき遺跡なのかもしれない。これについては、将来の調査成果の蓄積や研究により明らかになるとと思われる。

古墳時代では、玉ノ井遺跡第1次調査で円筒埴輪や須恵器が出土しており、当調査区SD02の埋土上半部からも竈窯焼成の埴輪片2点が出土した。また、当遺跡の北方には、江戸時代後期の熱田絵図（註1）で「狐塚」と記されている地点がある。これは、明治26年発行の地形図にも塚状の表現になっていて、今回

の調査地点から北へ約70mの距離である。斯夫山古墳や北山古墳（跡）以外にも、この付近には複数の未知の古墳が存在しているようである。

灰釉陶器片などの古代の資料は、SD02の埋土上半部分に破片として混入しているものであった。時期的には、猿投窯K-90、O-53窯式墳のものである。

中世では、表土層のすぐ下に該期の包含層（灰褐色土）が調査地点を覆っている状況が南半部を中心に検出され、1次調査地点のように場所によっては、中世の遺構があると思われる。なお、1次調査地点の成果からは、玉ノ井の地は、中世に鎌倉街道が通っていたという古渡（ふるわたり）と熱田の宮をむすぶ街道筋に位置していたと想定され、中世後期には、常滑焼の甕を多用していたことから、街道筋に形成された町屋のように生産、商業活動の場であったことを推察している〔竹内他1995〕。

このように、今回の調査で検出した遺構は、調査区の関係で、ほとんどがその一部分を検出しただけであったが、中世以前の包含層および遺構の残存状態は良好なものが多かった。これらの遺構は、当遺跡の地理的な位置をみても、周辺に存在している重要な遺跡群との関係を考えるうえでの資料が、さらに付近に包蔵されていることを示すものである。

註

- 1 名古屋市蓬左文庫『尾張志付図 熱田 大保年間（1830-44）写』蓬左文庫所蔵
古地図複製No10 名古屋市教育委員会 による。

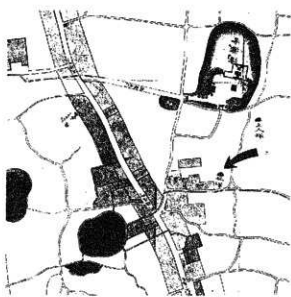


図16 絵図（註1）による「狐塚」位置（矢印）

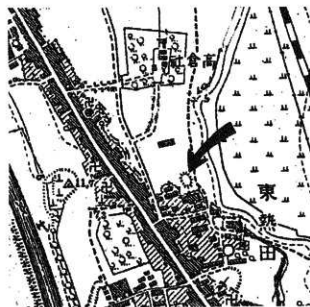


図17 明治26年発行の地形図にある「狐塚」？（矢印）

参考文献

- 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 愛知県埋蔵文化財センター
- 浅井和宏 1986 「<宮廷式土器>について」『欠山式土器とその前後』愛知考古学談話会
- 荒木 実 1986 『名古屋市高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書』五代産業株式会社
- 荒木 実 1987 『名古屋市高蔵遺跡五本松町第2、3次発掘調査概要報告書』国際興建開発コンサルタント株式会社
- 荒木 実 1991 『名古屋市高蔵遺跡五本松町第4、5、6、7次発掘調査概要報告書』株式会社ユニオン
- 伊藤厚史・村木誠 2000 「高蔵遺跡（第24次・第25次）」『埋蔵文化財調査報告書』34
名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育委員会
- 伊藤正人・川合剛 1993 『特別展 名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館
- 尾野善裕 1997 「尾張・西三河（窯跡）猿投・尾北・その他」『古代の上器5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の上器研究会
- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 東海土器研究会
- 齋藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』古代の上器研究会
- 田中 稔 1954 「高倉貝塚」豊橋市瓜郷遺跡調査会
- 竹内宇哲・尾野善裕・水橋公恵 1995 「玉ノ井遺跡発掘調査報告」
『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 野口泰子 1994 「高蔵遺跡第5次調査の概要」名古屋市教育委員会
- 村木 誠 1998 『よみがえる環濠集落—弥生時代後期の名古屋—』
- 村木 誠 1999 「名古屋市域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向」『埋蔵文化財調査報告書』30
名古屋市文化財調査報告40 名古屋市教育委員会
- 山田敏一・野口泰子 2000 『高蔵遺跡第21次発掘調査報告書』東邦ガス株式会社
- 窯業史研究所 1995 『変わりゆく旅の器たち 汽車土瓶』窯業史研究所

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	高蔵遺跡(第26次～30次)玉ノ井遺跡(第2次)							
巻次	37							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	50							
編著者名	野口泰子・水野裕之・村木誠・藤瀬茂							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL052-823-3200 FAX052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL052-972-3268							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高蔵遺跡	熱田区沢上1丁目621-1	23100	12-2	35° 38'27"	136° 54'27"	2000.2.8～ 2000.2.29	50	個人住宅
高蔵遺跡	熱田区沢上1-6-28	23100	12-2	35° 35'27"	136° 54'27"	2000.2.21～ 2000.3.17	80	個人住宅
高蔵遺跡	熱田区外土居町5-13	23100	12-2	35° 36'11"	136° 54'32"	2000.5.22～ 2000.6.9	60	個人住宅
高蔵遺跡	熱田区外土居町5-14	23100	12-2	35° 36'11"	136° 54'32"	2000.7.24～ 2000.8.11	80	個人住宅
高蔵遺跡	熱田区沢上2丁目713	23100	12-2	35° 35'26"	136° 54'26"	2000.10.10～ 2000.11.2	120	個人住宅
玉ノ井遺跡	熱田区玉の井1-21	23100	12-10	35° 45'45"	136° 54'27"	2000.10.23～ 2000.11.10	50	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生時代～古墳時代	溝	弥生土器・須恵器・ 瓦葺		第26次調査		
高蔵遺跡	集落遺跡	古墳時代～古代	溝	須恵器・埴輪		第27次調査		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生時代～中世	竪穴住居址	弥生土器・須恵器・ 山家陶		第28次調査		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生時代～中世	竪穴住居址	弥生土器・須恵器・ 山家陶		第29次調査		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生時代～古墳時代	溝	弥生土器・須恵器・ 土師器		第30次調査		
玉ノ井遺跡	集落遺跡	弥生時代	溝・竪穴住居址	弥生土器・縄文土器・ 灰蓋陶器		第2次調査		

名古屋市文化財調査報告50

埋蔵文化財調査報告書37

2001年3月30日

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印刷 菱源印刷工業株式会社

